



財団法人 花と緑の銀行

はじめに

富山県は、豊かな緑と水に恵まれた美しい自然があり、本州一の植生自然度を誇っております。

この素晴らしい自然を守り、さらにうるおいとやすらぎに満ちた美しい環境づくりを進め、次代に引き継いでいくことは、私たちの責務であります。

そこで、このたび県民の皆様が自らの家庭の庭や窓辺を、そして学校や職場を、花や緑で彩り、楽しみながら花づくり、緑づくりに取り組んでいただけますよう、「とやま花づくり」を発刊いたしました。

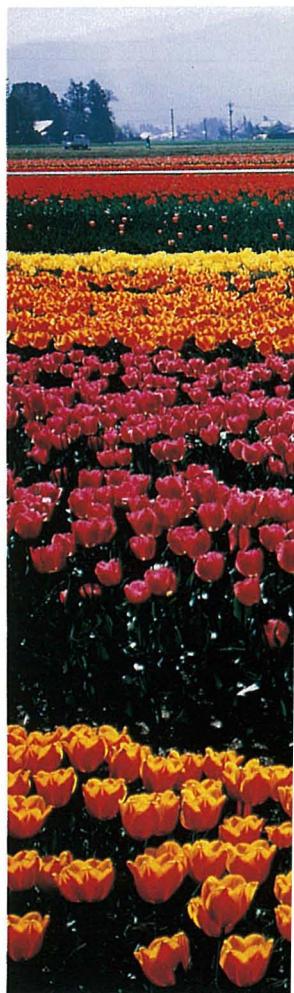
この冊子には、四季折々の楽しい花づくり、風土に適した栽培法や花にまつわる楽しい知識などが盛り込まれております。

この冊子が県民の皆様とともに、日本一の花と緑の県づくりを進めていくうえで、少しでもお役に立ちますよう心から念願しております。

平成2年3月

財団法人 花と緑の銀行

理事長 中 沖 豊



とやまの花



チューリップと散居村(砥波市)

目次

□ 絵

とやまの花

四季を楽しむ花づくり

1. 1・2年生草花	5
2. 宿根草花	37
3. 球根草花	65
4. 山野草	81
5. 室内鉢花観葉類	97
6. 新しい花	131
7. 水辺の花	135

花づくり、これだけは知っておきたい

1. きれいな花を咲かせる肥料の知識	145
2. 丈夫に育てるよい土づくり	149
3. 草花の殖やし方	153
4. 花を病気や害虫から守る	157
5. これだけは揃えたい園芸用具のいろいろ	161

花の楽しみ方いろいろ

1. 吊鉢で楽しむ草花 167
2. 寄せ植えで楽しむ 171
3. テラリウムで楽しむ 175
4. 水栽培(ハイドロカルチャー)の楽しみ方 177

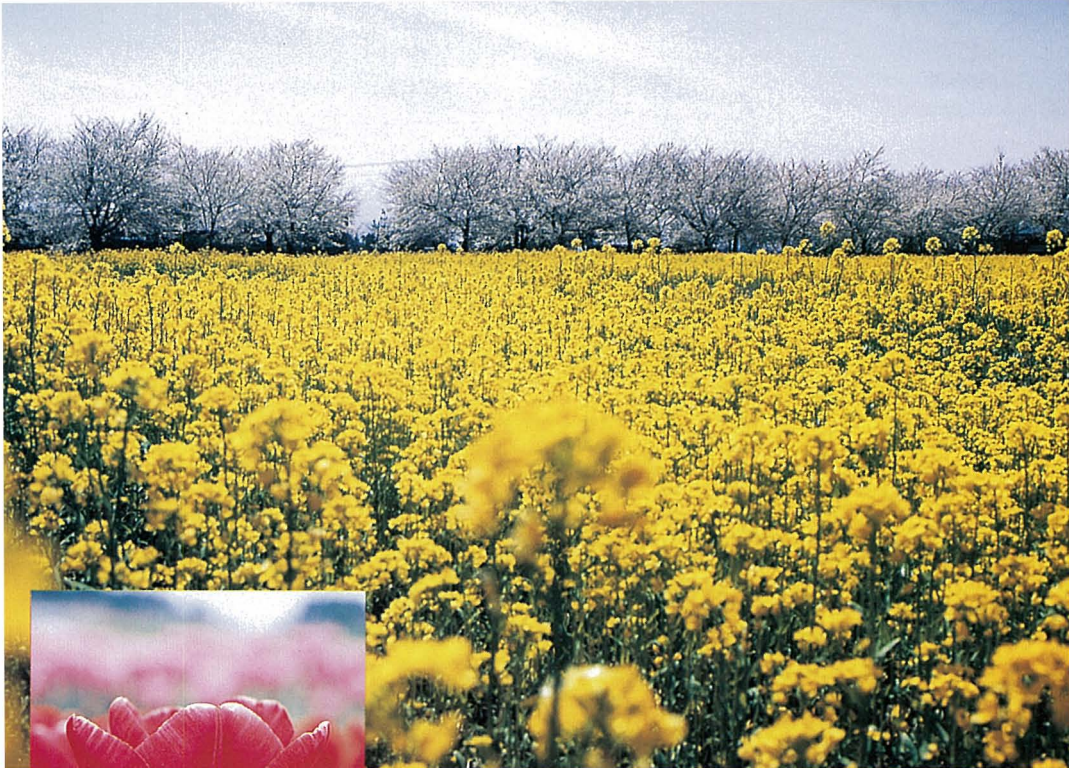
みんなで楽しむ花づくり

1. 花だんづくりを倍に楽しむ 185
2. 道路を彩る花づくり 195
3. プランターで楽しむ草花 197

附 表

- とやま花の名所(マップ) 202

花の栽培ごよみ

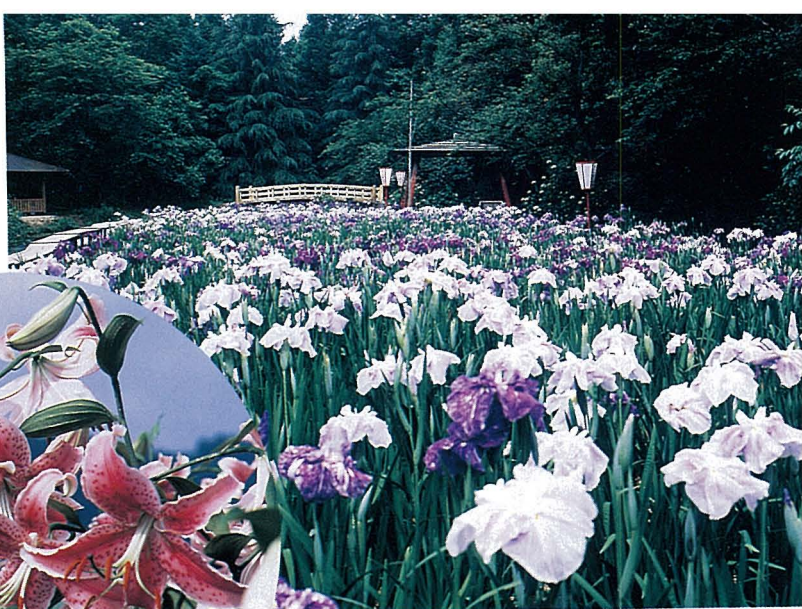


菜の花畑(県緑化センター)

チューリップ

花時計(県庁前)





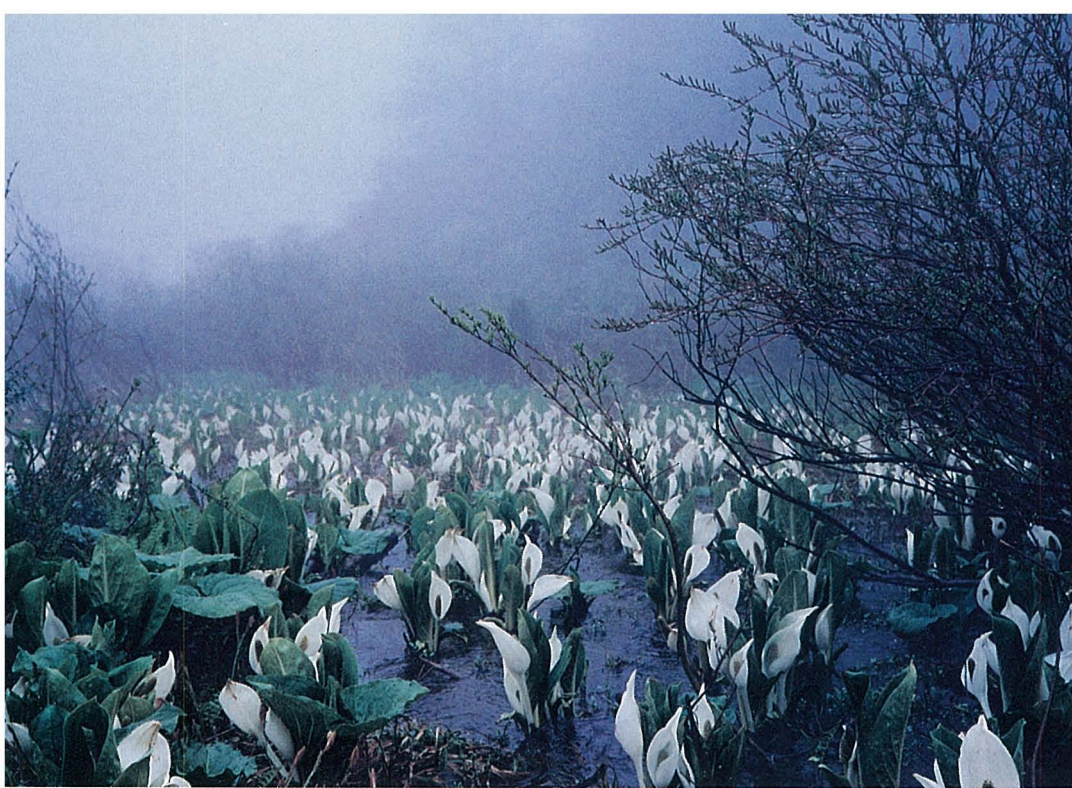
ハナショウブ(行田公園)



カノコユリ

コスモス(夢の平)





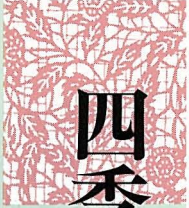
ミズバショウ(縄ヶ池)



カタクリの花

フクジュソウ



A red floral pattern, possibly a traditional Japanese textile design, is located in the top right corner of the page. It features stylized flowers and leaves in a repeating pattern.

四季を楽しむ花づくり



ハボタン



パンジー



デージー



コリウス



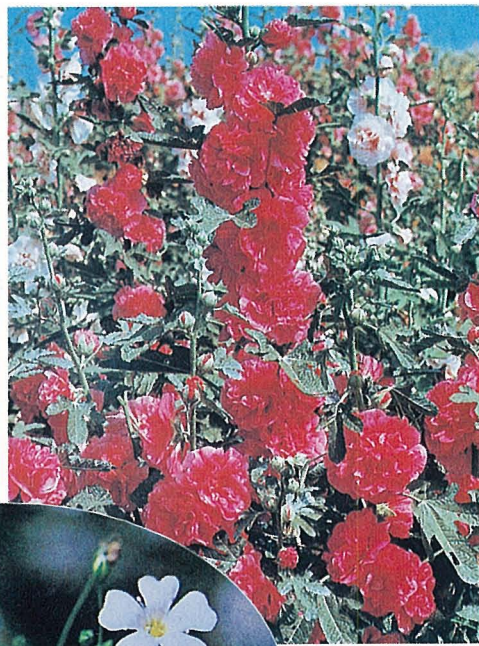
ペチュニア



サルビア



ムギワラギク



タチアオイ



カスミンソウ



アスター



ジキタリス



キンセンカ



ニチニチソウ



ケイトウ



キンレンカ



ペコニア



インパチェンス

1. 1・2 年生草花

種子をまいて1・2年間で生長開花し、結実してライフサイクルを終える植物を1・2年草とよんでいます。そのうち、種子が発芽して満1年以内にライフサイクルを終えるものを1年草、満1年以上を経て2年目に開花するものを2年草といっています。

1. 1年生草花と2年生草花

1年生草花は、種子をまく時期によって春まきと秋まきに大別されます。しかし、園芸的には正しい分類のしかたではないのです。春まき1年生草花の多くは、熱帯～亜熱帯原産で、ほとんどが非耐寒性であるのに対して、秋まき1年生草花は、欧州あるいは北米、中国など温帯原産のもので、耐寒または、半耐寒性の性質をもっているのです。つまり、1年草が春まきと秋まきに区別されるのは、それらの原産地の環境と密接な関係があるのです。したがって秋まき1年生草花のなかには、春にまいてもよいものもあるのです。

なお、たねまき後、まる1年以上たたないと開花しない草花は、ここでのいう2年生草花なのです。

2. 春まきと秋まき

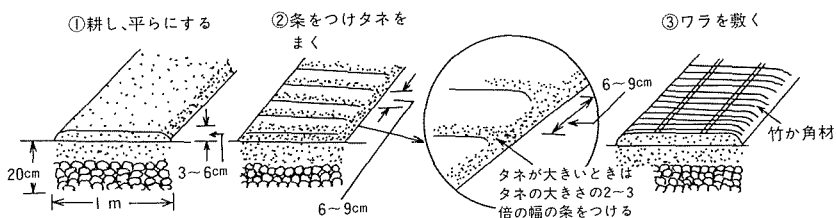
春まき1年草は、前述のとおりほとんどが耐寒性のない熱帯、亜熱帯原産の草花ですから、高温下でよく生長し、開花するものです。そしてこれらの多くの草花は、日長に反応して開花する性質をもっています。一般に春まき1年草のたねまき適期は、桜の「ソメイヨシノ」の花が散るころがよいといわれています。あまり早くまくのはよくありません。秋まき1年草は、温帯原産の草花ですから、ある程度、生長したあとに一度低温にあって花芽ができる性質のものと、春にまいても花は咲くけれども株が張らずに小さいままで開花するので、実用上秋まきとして株を茂らせるものがあります。

だいたい寒さに強いものですが、本県のように冬期間、寒さのきびしいところでは、やはりそれなりの防寒や冬越しのための工夫が必要です。一般に秋まき1年草のたねまき適期は、9月中旬から10月上旬ごろです。適期が短く、早いと温度が高く、また遅くなると発芽後の発育期間が短くなるので、秋まきの場合、適期をはずさぬように注意が必要です。

3. 種のとまき方

(1) 大きなたねのまき方

キンセンカ、ヒャクニチソウなどのような大きなたねは、適当な幅のまき床をつくり、表面を平らにし、すじまきにします。覆土は、たねの厚さの2倍ぐ



らいとし、上に敷きワラなどをして乾燥を防ぎます。

(2) 直根性草花のたねのまき方

マメ科植物などのように、太い根が一本長くなる種類や、移植をきらうものは、直まきといって、目的の場所に2～3粒づつ点まきにします。発芽後は、間引きして1本にしてやります。

(3) 細かい小さなたねのまき方

ベゴニア・センパフローレンスなどのように、1mm以下の微細なたねや家庭において少量だけつくるような場合は、鉢や箱まきにしてやります。

Q&A

花づくりこんなときどうする？

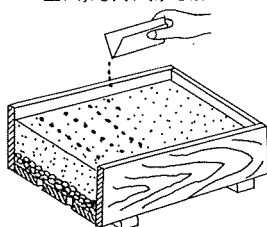
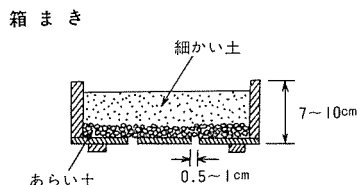
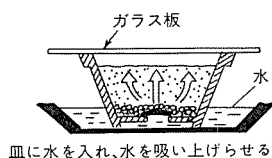
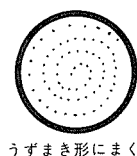
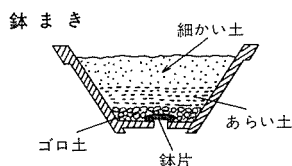
Q サルビアの茎ばかりが伸びて、株の姿が悪くなります。どうしたらよいのでしょうか？

A サルビアの株の姿が、格好悪くなるのは茎の先端に花をつけるためです。花が咲いている間は、わき芽の生育が悪く、茎ばかりが長く伸びてしまうのです。ですから、夏になって姿の悪い株や花数の少ない株は、思いきっていちばん草丈の低い株の高さにそろえて切ってしまいます。切り戻したあとは追肥をし、たっぷりかん水してやります。秋には、わき芽が伸びだし、株がこんもりと茂って、花もたくさん咲きます。

Q インパチェンスの葉が、夏になって急に落ちてしまいました。どうしてでしょうか？

A 強い直射日光に当たったり、ペラシダなどの乾燥のはげしい場所ではハダニによる被害が出たりして、葉が落ちてしまうことがあります。これは、高温、乾燥、強光線など、環境条件が悪くなると起るのです。涼しい日陰に移し、過湿にならぬよう水やりをし、夏場をしのぎましょう。秋になれば、新芽が伸び始め、元気をとりもどします。

Q ペチュニアをフラワーポットや吊り鉢で格好よく仕立てたいのですが、どうしたらよいのでしょうか？



4. 苗の育て方

(1) 発芽から移植まで

1年生草花は、早いもので3~4日、遅くとも2週間で発芽します。発芽後は、ジョウロを使ってのかん水に切り換え、よく日に当ててやります。光や水分を調節し徒長させず、根張のよいがっちりとした苗をつくりましょう。よい苗ができれば花づくりは半分以上成功したといえます。子葉が開ききったときから、本葉1~2枚に育ったとき、移植をします。ここまでは、無肥料とします。

A ペチュニアは、丈夫で栽培も容易なのですが、見た感じで格好よく仕立てるには、少し工夫がいるようです。それにはまず、目的に応じた品種を選ぶこと、そしてさらに、生育に応じて間伸びした茎、枝数の少ない茎を切り戻し、摘芯をくり返しておこなうことです。この摘芯は、植えつけ時から何度もくり返してやりましょう。ボリューム感のある姿のよい株に育つはずです。

Q ベコニア・センパフローレンスの株の見えが悪くなりました。どうしたらよいのでしょうか？

A 四季咲きベゴニアとも呼ばれるセンパフローレンスは、温度さえあ

れば周年開花します。花は茎の先端に近い葉のつけ根に咲き、花の咲いた個所からは、わき芽が出てきません。そこで花が咲きつづけると茎だけがどんどん伸びて、株の姿が悪くなるのです。こんな時は、株全体を株元から3分の2ぐらいのところまで切り戻してやります。摘芯をくり返して株の格好をととのえます。冬期は温度が5℃以上あれば枯れることはありません。

冬越しした株は、生育が始まる前に軽く切り戻して薄めの液肥を与えましょう。

Q 小葉性の美しいコリウスを知人からもらいました。ふやすのはさし芽でよくふやせるのですが、冬は枯れてしまいます。毎年育てるよい方法は

(2) 上手な移植のしかた

移植については、平箱かプラスチック製のパット、ビニールポットなどに土を入れて、これに植え替えます。移植用土は、たねまき用土に草木灰やくん炭を混ぜてやります。

移植する苗は、なるべく根を切らぬように、ていねいにほぐすように抜きとり、3cm間隔ぐらいにして植えつけます。植え終れば、十分にかん水をして2～3日のあいだ日陰におき、その後日に当ててやります。

追肥として、液肥を1週間に1回程度、かん水がわりに与えます。みるみるうちに苗は大きく育ってくれます。本葉6～8枚で定植します。

6. 上手な定植のしかた

花壇にはあらかじめ堆肥などの有機質肥料を混入しておきます(一週間前)。

植えつけ間隔は、小型種で12～15cm、中型種で20～25cm、大型種で30～40cmぐらいが適当です。植えつけは、浅植え、深植えをせず、ほどよく植え込みます。植えつけ後のかん水は、たっぷりおこなってください。定植後、一週間程度たったところで、化成肥料を追肥してやります。その後は、月に1回程度の追肥です。長期間花を楽しむために、こまめに花ガラ摘みや整枝をしてやりましょう。手をかければかけるほどりっぱな花が、次々と咲き誇ってくれます。

ないものでしょうか。

A 初夏から晩秋にかけて美しい彩りの葉をみせてくれるコリウスは、寒さには弱い暑さに強く、高温でさえあれば冬でも生育をつづけます。

ある程度育ったコリウスの天芽を三節付けて切り取り、下葉一節をかき取って砂を入れた容器にさし、水をたたえておきますと、すぐに発根してくれます。小葉性のコリウスは、たねがとれませんのでこうした元気のいい小苗を秋になってからつくっておき、小鉢に植えて暖かい室内で越冬させてやります。約10℃の温度が必要です。春には大きな鉢にはちがえて大きく育ててやりましょう。

Q カトレアの花が咲きそうですが、バルブの横から新芽が発生し、10cmほどになりました。どのような管理をすればよいのでしょうか。

A 花を早く咲かせるために温度を高くして育てますと、どうしても新芽の発生がみられます。新芽が生長すれば、その分養分がそちらにまわり、花が咲いても小さい花となってしまいます。つぼみがついたころから温度は高すぎず、鉢の中も乾かし気味につくると新芽の伸びをある程度抑え、正常な開花がみられます。良い花を咲かせるためには新芽をかきとることもあります。



ハ ボ タ ン

- ボタンナ
- アブラナ科
- 夏まき1年草
- 観賞期 11月上旬～2月

〈種 類〉

ハボタンの原種は、ヨーロッパに分布し、古くは野菜として栽培されていました。学名のブラシカ・オレラジーの由来は、まさに「キャベツの仲間」という意味なのです。つまり、ハボタンはキャベツを観賞用に改良した珍しい植物といえます。

〈性 質〉

本来は、秋まき1年草として扱われていますが、時期的には夏まきの観葉草花といえます。耐寒性があり秋から冬にかけて寒さに合わせますが、むしろこの寒さに合うことで着色し色づきます。

〈種 ま き〉

7月上旬から8月上旬にたねまきします。切り花にしたいときは早めに、寄せ植え材料として使うには遅めにたねまきします。

〈育苗・定植〉

発芽してすぐに移植し、9月に入って本葉7～8枚のころにもう一度、仮植してやります。花壇や鉢への定植は、11月に入って芯葉が色づいた頃がよいでしょう。

〈肥 料〉

育苗中は、月2～3回の割合で、化成肥料を与え、徐々に窒素肥料を控え、草木灰などのカリ肥料を多く与えてやります。

〈手 入 れ〉

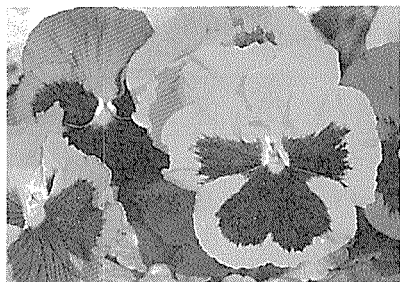
日当たり、水はけ、風通しのよい場所に植えてください。定植の際は、ぎっしりと間隔をつめて植えます。また、必要に応じて下葉かきをしてやりましょう。茎を短くするためにBナイン処理をおすすめします。

〈病 害 虫〉

大敵は、キャベツと同様にアオムシです。また、コナガの幼虫がつくこともあります。カルホス乳剤やデイプテレックス乳剤などの殺虫剤を定期的に散布してください。病気の心配はありません。

〈楽しみ方〉

初霜から積雪時までの期間、格好の草花が少ないのが本県の実情ですが、ハボタンは、その不満をなくしてくれます。冬花壇の材料として鉢ものとして効果的です。



パンジー

- サンシキスミレ
- スミレ科
- 秋まき 1 年草
- 開花期 3 ～ 5 月

〈種 類〉

春花壇に欠かせない草花といえばこのパンジーです。パンジーという名前は、フランス語のパンセ「考える、もの思う」からきたものです。花色がカラフルで色彩に富んでいますが、花壇では、黄、ブルー系が目立ちます。

現在、私たちが栽培しているパンジーは、北ヨーロッパ原産の野生種を交配育成した園芸種です。

〈性 質〉

寒さに対して強く高温多湿に弱いようです。本来は多年草ですが夏の暑さに弱いので秋まき 1 年草として扱っています。

〈種 ま き〉

パンジーは、8 月下旬～9 月中旬ごろまでにたねまきをします。早すぎると夏の高温で発芽しません。また逆に遅くなると冬までに株が十分育たないので、まき時を厳守してください。

〈育苗・定植〉

本葉 2 ～ 3 枚で移植します。本葉 7 ～ 8 枚で花壇に定植しますが、株間は 20cm ぐらいがよいでしょう。

〈肥 料〉

定植の際、堆肥などの有機質肥料を十分施しますが、年内に一回、翌春の 3 月から 1 ～ 2 回程度、追肥します。

〈手 入 れ〉

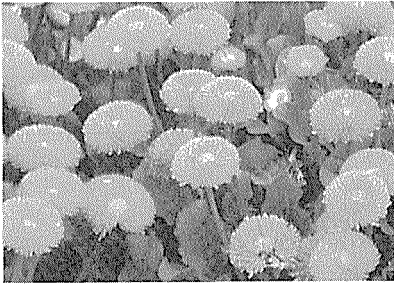
花が咲いている間は追肥を続けますが、咲き終った花ガラはこまめにつみとります。

〈病 害 虫〉

灰色かび病にはベンレートやマンネブダイセンをまいて予防し、アカダニは殺ダニ剤で、ウイルス病については、冬の間にマラソン乳剤、スミチオン乳剤をまいてアブラムシの発生を防ぎます。

〈楽しみ方〉

カラフルな花壇植えのほか、プランターやつり鉢作り、切り花として楽しめます。



デ ー ジ ー

- ヒナギク
- キク科
- 秋まき1年草
- 開花期 3～5月

〈種 類〉

デージーは、赤・桃・白などのかわいらしい菊状花を株いっぱいに咲かせ、春花壇にはもってこいの草花といえます。

デージーの名は、`太陽の目`を意味し、和名のヒナギクも、優しくかわいい草姿を表しています。花期の長さ、生命力の強さから`延命菊`ともいわれています。

〈性 質〉

もともとは、多年草で寒さには強いのですが、高温多湿に弱く梅雨時になると枯れてしまうところから、秋まきの1年草として扱っています。

〈種 ま き〉

9月上・中旬にたねまきします。発芽の適温は15～20℃です。

〈育苗・定植〉

本葉2～3枚のころ、2～3cm間隔に植え広げ、10月中旬に15cm間隔にて定植します。日当たりのよい場所に植え、11月以降は、霜よけや冬越しのための防寒をしてやります。

〈肥 料〉

油かす、鶏糞などの有機質肥料を元肥として与え、追肥は生育に応じて化成肥料を1～2回程度施します。

〈手 入 れ〉

育苗時や定植の際、かん水に注意し、乾燥しすぎないように注意しましょう。花ガラはその都度摘みとり、たねを实らせないようにします。防寒については、特に嚴重にする必要はありません。

〈病 害 虫〉

つきやすいアブラムシと葉を食害するテントウムシダマシは早めにマラソン乳剤かオルトラン粒剤で駆除します。

〈楽しみ方〉

花壇に色別で群植したり、縁どり用として配植するときれいになります。

また、パンジーなどと組み合わせて楽しむのもおもしろいものです。



ヤグルマソウ

- ヤグルマギク、セントウレア
- キク科
- 秋まき 1 年草
- 開花期 4 ～ 5 月

〈種 類〉

花形が陽春の空を泳ぐ鯉のぼりの矢車を思わせるところからヤグルマソウという名がつけました。しかし、日本の深山に自生するユキノシタ科のヤグルマソウと区別するため、ヤグルマギクと呼ばれたりしています。一重と八重のものがあ
り、高性種と矮性種があります。また花色も、青、紫、赤、桃、白と豊富です。

〈性 質〉

丈夫な秋まき草花ですが、寒地では秋まきよりはむしろ春まきして夏に開花させる栽培が好適なようです。もともとヤグルマソウは、寒さにも強く、簡単な防寒で冬越しが可能です。

〈種 ま き〉

9 月上・中旬がたねまき適期です。花壇に直まきするか育苗箱にすじまきします。

〈育苗・定植〉

本葉 2 ～ 3 枚のころに苗床へ 3 ～ 4 cm 間隔で仮植し、切り花の高性種は本葉 7 ～ 8 枚で定植してやります。日当たり、風通し、水はけのよい所を選びましょう。直根性の草花ですから、春になってからの大苗の移植はきらいです。

〈肥 料〉

肥よくな土地であれば無肥料でもよく育ちます。幼苗期に肥料が効き過ぎる(特に窒素肥料)と茎葉が軟弱徒長して花が貧弱になるのでりん酸、カリ分の多い草木灰を与え、追肥は、1 ～ 2 回施す程度です。

〈手 入 れ〉

寒さに強いとはいっても、本県では冬越しのための防寒が必要です。

〈病 害 虫〉

アブラムシがつきやすいのでダイシストン粒剤を株もとにまいてください。菌核病、ウドンコ病には、トップジンが有効です。



カ ス ミ ソ ウ

- ムレナデシコ
- ナデシコ科
- 秋まき 1 年草または多年草
- 開花期 5 ～ 6 月

〈種 類〉

小さな花をいっぱいつけて咲きそろうカスミソウの姿は、遠くから見るとまさに「春霞」を思わせるようです。近年になって人気が高まり、切り花、花壇などで幅広く利用されるようになりました。

カーネーションやバラの花束に添える花としては、これに勝るものはありません。最近では宿根性のカスミソウにも人気があります。

〈性 質〉

耐寒性が強く、至って丈夫な秋まき草花です。

〈種 ま き〉

9 月中旬が適期で、直まきにすれば 10 月中旬ごろまでまくことができます。種子は、10cm 間隔に 3 ～ 5 粒ずつ点まきするかすじまきにします。

〈育苗・定植〉

寒さのきびしい本県では、苗の状態でも越しさせ、春に定植したほうがよいでしょう。

〈肥 料〉

窒素分が多すぎると茎葉が軟弱徒長化します。また酸性の土をきらいますので、石灰や草木灰をあらかじめ多く与えるようにします。

〈手 入 れ〉

秋の植え替えは、10 月中旬ぐらいまでにすませ、寒さの来る前によく根を張らせておくことが大切です。また春以降、茎が急速に伸びてきますので、倒伏防止のための手入れが必要です。

〈病 害 虫〉

アブラムシには、馬拉ソン乳剤かスミチオン乳剤を蕾が見えたら月に 2 回程度散布し、白絹病にはベンレートかオーソサイド水和剤を灌注します。

〈楽しみ方〉

切り花では、花束や生け花の材料として、また、花壇の背景に群植して楽しむのもおもしろいものです。



マリーゴールド

- クジャクソウ、マンジュギク
- キク科
- 春まき1年草
- 開花期 6～11月

〈種 類〉

初夏から秋にかけての花壇で、必ずといってよいほど見かける草花にマリーゴールドがあります。メキシコ原産のこの花は、美しくも愛らしいカーネーションにも似た黄色またはオレンジ色の花です。アフリカン種とフレンチ種があり、最近では、両系統の交配種のほか、シグナータ種が出回っています。

〈性 質〉

熱帯性の植物ですが、冷涼な気候を好みます。むしろ高温下では、花つきが悪くなります。真夏の7月下旬から花は一休みをしますが、9月に入って再び開花し、11月中旬まで咲き続けます。

〈種 ま き〉

まきどきは、4月下旬～5月中旬がよく、発芽温度は20℃、発芽日数は、4～5日間です。

〈育苗・定植〉

本葉が2～3枚で仮植し、本葉8～10枚で花壇や鉢に植えてやりましょう。矮性種では20×30cm、高性種では30×40cmの間隔で植えると最後には見栄えのよいものになります。

〈肥 料〉

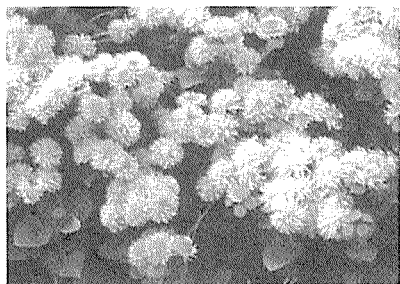
元肥に鶏糞、油かすなどの有機質肥料を土全体とよく混ぜて施します。追肥には、化成肥料なら1㎡当たり50gを月1回与え、液肥ならば500倍液を月2回ぐらい与えてください。

〈手 入 れ〉

定植後、次第にこみ合ってきますと下枝の発生が悪くなり、花がとぎれがちとなって見苦しくなりますので、間引きをしたり、刈り込みをしてやります。特に花ガラ摘みをかねて適切に整枝することが効果的です。

〈病 害 虫〉

病害虫のつきにくい草花ですが、まれにウドンコ病やハダニ、アブラムシの被害も出ますので早目にベンレートやマラソン乳剤で防除してやりましょう。なお、マリーゴールドはその根から殺セン虫成分の分泌があって、ネマトーダ防除に効果があります。



アゲラタム

- カッコウアザミ
- キク科
- 春まき1年草
- 開花期 7月上旬～11月

〈種類〉

アゲラタムは、ペルー、メキシコ原産の草花で、草丈は20cm内外と低く、よく枝分かれした株が、半球状に茂り、アザミに似た小花をつけて、いかにも清涼感を味わせてくれます。

〈性質〉

原産地では、多年草として取り扱っていますが、寒さに弱いところから温帯地方では春まき1年草として扱っています。

〈種まき〉

発芽適温は、15～20℃で、本県においては4月下旬～6月上旬がまきどきです。

〈育苗・定植〉

種子が非常に細かいので箱または鉢まきにします。本葉3～5枚くらいで移植してやります。苗が3～4cmに伸びたら一度芯を摘み、側芽が3～4本出たら定植します。

〈肥料〉

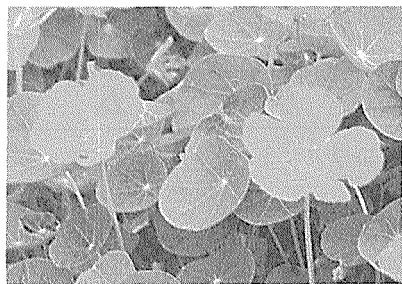
有機物が混入された用土であれば、肥料はほとんど必要ありません。追肥は、りん酸、カリを主体に施します。窒素肥料を多く施すと、茎葉ばかりが茂って草姿が乱れ、花つきも悪くなりますので注意します。

〈手入れ〉

真夏の夏バテ、時期に、花ガラ摘みと整枝をおこない、その枝先をさし芽してふやすのもおもしろいものです。15℃の適温下では、約10日間で発根します。

〈病虫害〉

病虫害は少ないのですが、ときに発生する斑点性病害には、ベンレート水和剤を散布します。また乾燥時によく発生するアブラムシには、マラソン乳剤、オルトラン、スミチオン乳剤などを、ハダニには、殺ダニ剤で定期的に駆除します。



キンレンカ

- ナスタチューム
- ノウゼンハレン科
- 春まき1年草
- 開花期 6～10月

〈種 類〉

南米生まれのキンレンカは、長いつる、ハスのような形の葉、カラフルな赤や黄色の花が特徴で、目にも鮮やかな草花です。

キンレンカには、つるが2～3mにも伸びる在来のもつる性種のほか、改良されてつるが伸びない矮性種もあります。プランター植えや花壇の縁どりに最適です。

〈性 質〉

春から秋まで咲き続けますが、冷涼地でないと夏の間、花がつきにくいという欠点があります。つまり夏の暑さや乾燥に弱いのです。

〈種 ま き〉

やや高温発芽性のため、本県では5月に入ってからまくのが確実です。

〈育苗・定植〉

直まきが向いていますが、移植する場合、本葉5～6枚くらいの間で、鉢または花壇に定植します。やせた土地でも十分育ちます。

〈肥 料〉

肥料は、ほとんどいりません。むしろ肥えた土地では、葉ばかり茂って花つきがきわめて悪くなります。窒素肥料を控えめにし、りん酸肥料を多めに与えます。

〈手 入 れ〉

本葉6～7枚のとき摘芯し、分枝を促してやります。また夏場は、十分かん水し、適当につるの整理もしてやります。

〈病 害 虫〉

病害虫は、比較的少なく、時々つくアブラムシを駆除してやる程度です。

〈楽しみ方〉

横に広がる性質を生かして、芝生の中の円形花壇に配植したり、プランター植えにして垂らして仕立てるのにもおもしろい草花です。



ペチュニア

- ツクバネアサガオ
- ナス科
- 春まき1年草
- 開花期 6～11月

〈種 類〉

多くの草花のなかで、とりわけ花色が豊富でしかも花期が長く群植したものが咲き誇るとたいへん華やかになるのが特徴です。

和名をツクバネアサガオとよんでいるこのペチュニアは、ブラジル語のペチュン(Petun: タバコ)にちなんでつけられた名称であり、草丈は20cm前後で、自然に枝が分かれ、花は和名のとおりのアサガオに似ています。

〈性 質〉

高温多湿に弱くて、冷涼な気候を好む性質があります。ペチュニアの花芽は、短日で分化し温度20～25℃の長日下で開花します。

〈種 ま き〉

4月上・中旬にたねまきして7月上旬からの夏花壇への利用か、7月上旬にたねまきして9月中・下旬からの秋花壇利用もおもしろいものです。

〈育苗・定植〉

発芽後、本葉が出ない間に仮植します。本葉6～7枚で株間を20～30cm前後として定植します。

〈肥 料〉

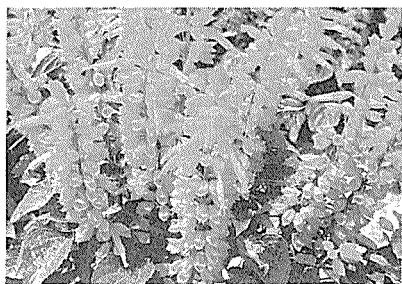
肥料を十分に与えることが長く開花させるためのポイントです。元肥には、有機質肥料を、追肥には、開花後、市販の化成肥料を月に1～2回程度、与えてやります。

〈手 入 れ〉

花が咲き終わったものは、できるだけ早く花ガラ摘みをし、あわせて整枝を行います。夏の終わりに株を10～15cmに切り戻してやりますと、やがて新芽が出て、秋には再生します。

〈病 害 虫〉

雨に弱く、花卉がぬれると病気になりやすい性質をもっています。ウイルス病、灰色カビ病、ウドンコ病などがあり、害虫では、アブラムシ、ハダニ、ヨトウムシ、ナメクジなどに食害されます。ベンレートやダイセン等の殺菌剤、マラソン、ディブテレックスのような殺虫剤で予防してやります。



サルビア

- ヒゴロモソウ
- シソ科
- 春まき 1 年草
- 開花期 6 ～ 11 月上旬

〈種 類〉

秋空に燃えるような真紅のサルビアは、まさに私たちの心をとらえてくれます。原産地では冬越しする多年草ですが、日本では温室にもちこめば冬を越すことができますが、通常春まき一年草として扱っています。花壇はもちろんですが、プランター植えにも適しており、夏から秋にかけての花壇には欠かせないものです。

〈性 質〉

元来はコスモスと同じく短日植物で秋にならないと咲かない草花でしたが、近年早咲き種が多くなり、長日下でも花をつけるようになりました。

〈種 ま き〉

発芽適温が20～25℃ですから、5月以降にたねまします。7～8日間で発芽します。

〈育苗・定植〉

発芽後は、本葉が出始めたら一回仮植して、苗を育て本葉6～8枚のころに定植してやります。日当たりと水はけのよい場所に間隔を十分とって植えます。

〈肥 料〉

基肥に、堆肥、鶏糞などの有機質肥料を施してやります。生育期間が長いので月に1回、追肥として化成肥料を施します。

〈手 入 れ〉

秋によい花を咲かせるために、8月上・中旬の夏バテ時期にいちど花穂を摘みとり、かるく切り戻してやります。そのあと追肥してたっぷりとかん水してください。1カ月後には再生します。

〈病 害 虫〉

通風が悪いとウドンコ病やアブラムシ、ハダニがよく発生します。ベンレート、ダイセンそしてマラソン剤で早めに駆除します。

〈楽しみ方〉

花壇のほか、プランター植えにしてベランダや窓辺において楽しむのもよいものです。また、刈りこみした枝をさし芽してふやし、鉢づくりにして楽しむこともできます。



インパチェンス

- アフリカハウセンカ
- ツリフネソウ科
- 春まき1年草
- 開花期 7～11月

〈種 類〉

夏から秋にかけての花壇で、よく見かける花色の鮮やかな草花です。和名をアフリカハウセンカとよんでおり、ハウセンカの仲間なのです。最近は品種改良が進み、花色も多彩になっています。

現在、栽培されている品種は、ほとんどが一代交配種で、草姿や開花のそろいもよく、早咲きの矮性種です。

〈性 質〉

インパチェンスは、高温と半日陰下でよく育ちます。また温室で育ててやれば、多年草のように周年開花します。ただし越冬には、8℃以上の温度が必要です。

〈種 ま き〉

温室があれば早まきも可能ですが、ふつうは5月に入ってからたねまきします。

〈育苗・定植〉

本葉が2～3枚のころ、育苗箱に移植し、その後は直射日光をさけて管理します。本葉6～8枚である程度の株間をあけて定植します。最終的には30cmの株間をとります。

〈肥 料〉

肥料は少なめに与えるのがよく、インパチェンスは、窒素肥料分が多すぎると花つきが悪くなります。

〈手 入 れ〉

花ガラ摘みと整枝は大切な作業です。花を一斉に咲かせるためには的確に、切り戻しを行う必要があります。真夏の時期に株を3分の1程度刈り込んで更新しても1～2カ月後には再び鮮やかな花が咲きます。

〈病 害 虫〉

ナメクジによる食害やネマトーグ(セン虫)もよく寄生します。土壌消毒を念入りにおこなってください。そのほか、ウドンコ病、サビ病、斑点病などがあり、予防が必要です。



マツバボタン

- ヒデリソウ、ツメキリソウ
- スベリヒユ科
- 春まき1年草
- 開花期 7～9月下旬

〈種 類〉

マツバボタンはブラジル原産の草花で、日当たりがよければ多少のやせ地や乾燥地にでも非常によく育ちます。葉は多肉で茎はよく枝分かれして地面をはい四方に広がります。ボタンを小さくしたような花が無数に咲き、夏の日照りにもおとろえません。

夏の炎天下でも、平気で花を咲かせるのでヒデリソウともいわれ、爪で切っさせば簡単に根づくところからツメキリソウともよばれています。

〈性 質〉

乾燥には強いのですが、過湿に弱いようです。花は半日花で、朝開花して昼には閉じる性質がありますが、最近、夕方まで咲く終日咲き種もあります。

〈種 ま き〉

たねまきは、5月から7月ごろまでで、5月上旬からまきはじめるとよいでしょう。

〈育苗・定植〉

発芽して、苗が指でつまめるようになったら、一度仮植してやります。花壇は日当たりのよい、排水良好なところを選びます。定植間隔は、15～20cmとし、あまり密植しないことです。

〈肥 料〉

特に生育が劣る場合にのみ、化成肥料で追肥します。

〈手 入 れ〉

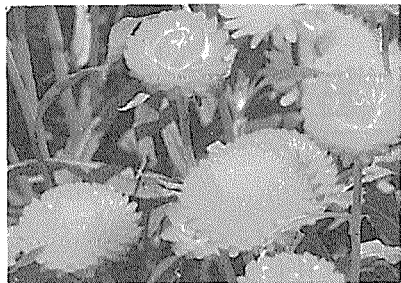
ときどき長くなった側枝を摘んで株張りをよくしてやります。

〈病 害 虫〉

病害虫は、ほとんどありません。幼苗の時は、過湿になると腐りやすいので注意が必要です。

〈楽しみ方〉

茎が地面にはうようにして茂りますので、花壇の縁どりなどには最適です。日当たりのよいテラスのまわりや園路に沿って細長く植え付けすると、たいへんきれいなものです。



ムギワラギク

- ヘリクリサム
- キク科
- 春まき1年草
- 開花期 7～10月

〈種 類〉

ムギワラギクは、明るく輝く光沢をもち、色彩が豊かでドライフラワーの代表としてよく知られていますが、これは花弁にふれるとカサカサと乾いた音を立てるほど水気がなく、よく乾かした麦ワラで作った花のようにみえるところからこの名がつけました。

一般には、カイザイクという名でよばれていますが、正式には属がちがっており、別種のものです。

〈性 質〉

一度作るとこぼれだねで生えてくるほど育てやすく丈夫な草花です。比較的耐寒性もあるところから、暖地では越冬も可能ですが、本県では春まきのほうがよいでしょう。

〈種 ま き〉

発芽適温が20～25℃と高いので、4～5月にたねまきします。

〈育苗・定植〉

発芽日数は10日前後、本葉3～6枚のうちに間引きし、本葉8枚で定植します。日当たり良好で、やや湿気を含んだ肥よくな場所を選びます。

〈肥 料〉

たいへん吸肥力が強いので、肥料分の多い圃場は基肥なしで始め、生育状況をみて化成肥料を追肥します。

〈手 入 れ〉

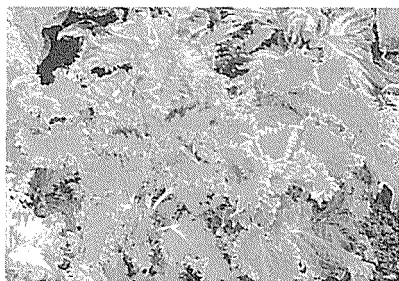
かん水はできるだけ控えぎみとし、多湿にならぬよう注意します。開花をそろえるため、伸びはじめた時点で摘芯をします。草丈が伸びたら、支柱立てをして倒伏しないようにします。

〈病 害 虫〉

密植したり、窒素肥料分が多いと立枯病が発生します。オーソサイドをかん注するかベンレートで消毒してください。アブラムシ、ヨトウムシ、アオムシにはDDVP、オルトランを散布してやります。

〈楽しみ方〉

ドライフラワーとしても楽しめます。



コ リ ウ ス

- キンランジソ
- シソ科
- 春まき1年草
- 開花期 7月上旬～10月

〈種 類〉

葉色が赤、黄、緑、ピンクなどと美しい錦模様を描き、鮮やかに色づくいわば一年生の観葉植物です。葉の形はシソに似ており半日陰の庭先にもよくマッチします。近年、品種改良が進み多彩な葉色や葉形の変化に富む園芸品種が作り出されています。

〈性 質〉

夏の強光線下よりは、半日陰の場所をむしろ好む植物です。湿り気の多い日陰でよく育ち、水々しくて美しい葉色が楽しめます。

〈種 ま き〉

たねは、細かいのでまき箱にいてねいにまきます。高温(20℃以上)を好むのであるべく暖かい場所がよく、5月に入ってからまくと苗作りは容易です。

〈育苗・定植〉

発芽して子葉が展開したら、箱または地床に仮植します。本葉が5～6枚になれば、25～30cmの間隔で花壇に定植します。

〈肥 料〉

窒素分を多くすると葉色が悪くなりますので、りん酸分を多く施すのがコツです。1㎡当たり50gの化成肥料を元肥とし、月に1～2回程度、追肥します。

〈手 入 れ〉

夏場の乾燥を防ぐために、表土に堆肥を加えたり、敷きワラをしたりします。乾燥時には十分にかん水すること、花穂を除去すること、切り戻しをして側枝を多く出させることがポイントです。

〈病 害 虫〉

葉を犯す斑点性の病気には、早めにベンレートを散布し、アブラムシやハダニには、マラソン乳剤やカルホス乳剤が効果的です。

〈楽しみ方〉

摘芯して株が茂ってくれば、7～8cmのわき芽を摘んでさし芽してやります。室内での水栽培やテラリウムの材料としても利用できます。また吊り鉢として楽しむのもおもしろいものです。



ベゴニア・センパフローレンス

- シキザキベゴニア
- シュウカイドウ科
- 非耐寒性多年草
- 開花期 5～11月

〈種 類〉

ベゴニア・センパの名で知られているこの草花は、ブラジル原産の植物です。今日では、夏から秋にかけての花壇には必ずといってよいほど使われています。本来は、温度条件さえよければ一年中開花するもので、センパフローレンスという言葉は、`周年開花する`という意味をもっているのです。和名をシキザキベゴニア(四季咲き性である)といい、数多いベゴニア類の中で、最もポピュラーな花ベゴニアです。また、わが国で古くからなじみ深いシュウカイドウの仲間です。

〈性 質〉

熱帯性の草花ですから、寒さに弱く、霜にあうと枯死します。四季咲き性というものの、冬の寒さが厳しい本県では、露地での冬越しは無理です。

〈種 ま き〉

発芽適温は20℃で、発芽に2～3週間を要します。4～5月上旬がまき時です。

〈育苗・定植〉

本葉が2～3枚になったら、鉢または、箱に仮植してやります。ベゴニア苗は、茎が伸びず平たく葉が出ますのではしや竹ベラでていねいに根もとを押さえるようにして植えます。花壇への定植は、日当たりがよく、排水良好で腐植質に富む場所を選びます。

〈肥 料〉

開花期間が長いため、途中`肥料切れ`することがあるので、基肥は緩効性肥料を施し、また月に1～2回化成肥料を追肥するかかん水がわりに液肥を1,000倍程度にうすめて施します。

〈病 害 虫〉

灰色かび病やウドンコ病が発生します。こまめに花ガラ摘みをし、ダイセンやベンレート剤で防除し、多発する茎腐れ病はバシタック剤で防除します。



アサガオ

- ケンギョウカ
- ヒルガオ科
- 春まき 1 年草
- 開花期 7 ～ 9 月

〈種 類〉

清楚で可憐な花が真夏の朝を彩り、夏の風物のいわばシンボルともいえる草花がこのアサガオです。中国から薬用植物として渡来したのが始まりで、今から約1200年前の奈良時代から栽培が始まり、江戸時代においては数々の変化アサガオが作られたといわれています。つまり、アサガオは日本で非常に改良発達した草花です。

〈性 質〉

代表的な短日植物で、かなり高温を好む、つる性の春まき草花です。

〈種 ま き〉

高温発芽性の種子ですから、また非耐性で晩霜害も大きいので5月に入ってからまくようにします。

〈育苗・定植〉

発芽後3～4日で移植し、小さい鉢に仮植したかたちで育ててやります。7月上旬には、大きな鉢に植えかえたり、花壇に定植したりします。

〈肥 料〉

油かす5、米ぬか3、わら灰2を混合し、それを水で半練り状態として発酵させます。乾燥した肥料を大さじ一杯ぐらいずつ鉢に施し、蕾がみえはじめたら、液肥にきりかえます。大輪系では、追肥をしますが、洋種アサガオの垣根作りなどは施しません。

〈手 入 れ〉

つる性植物ですから、支柱やフェンスが必要です。

〈病 害 虫〉

アブラムシには、マラソン乳剤やスミチオン乳剤を散布し、ハダニにはアカルケルセン、テデオンなどの各乳剤の交互散布を行います。斑紋病には、ダイセンを散布します。

〈楽しみ方〉

大輪系や変化咲系は、鉢作りとし、矮性系はプランターや花壇で楽しめます。



ケイトウ

- セロシア
- ヒユ科
- 春まき1年草
- 開花期 8～10月

〈種 類〉

ケイトウといえばニワトリのとさかのような赤い花が最もポピュラーで、強烈な色彩の花が青空を背景に咲く姿は実にみごとなものです。まさに夏の草花という印象をもつものですが、その種類には、トサカケイトウ、ウモウケイトウ、ヤリケイトウ、タマケイトウなどがあります。

〈性 質〉

熱帯原産の春まき1年草で、その発芽や生育にはかなりの温度を必要とします。また、乾燥に強く、耐暑性の強い草花で、移植をきらいます。

〈種 ま き〉

比較的高温発芽性のため、5月中旬以降にたねまします。8月にまくと11月に咲いてくれます。

〈育苗・定植〉

できれば直まきして、間引いていくほうがよいでしょう。箱まきする場合は、薄めにまいて、本葉5～6枚で定植してやります。あまり大きくなってからの移植は、植え傷みの原因となるので注意します。

〈肥 料〉

m²当たり堆肥2～3kg、化成肥料50～70gを基肥として施し、7月頃までに化成肥料20～30gを1～2回追肥します。

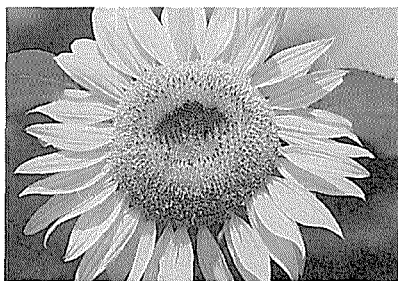
〈手 入 れ〉

直まきしたものは、倒れやすいので土寄せや支柱立てをします。

〈病 害 虫〉

根腐れ病や立ち枯れ病が出たら、その株を抜きとり焼却します。できるだけ連作を避け、タチガレン剤で土壤消毒しましょう。また褐斑病には、銅水和剤かダイセン水和剤が有効です。

害虫は、ヨトウムシやアブラムシですが、ヨトウムシには、ディプテレックスかサリチオン乳剤、アブラムシには、マラソン乳剤かスミチオン乳剤を定期散布します。



ヒマワリ

- ニチリンソウ、ヒグルマ
- キク科
- 春まき1年草
- 開花期 7～8月

〈種類〉

真夏の太陽に向かって大輪の花が咲くところから、英名をサンフラワー(太陽の花)といいます。ヒマワリの大きな花はいかにも夏むきの草花といえましょう。ヒマワリ属の植物は、約100種あるといわれ、系統、品種も多種多多彩です。

〈性質〉

どこでも栽培可能なのがこのヒマワリです。ただ、日当たりのよいところが大好きな草花です。

〈種まき〉

たねまきは4月中旬～5月に直まきするほうがよいのですが、床まきして移植してもかまいません。

〈育苗・定植〉

たねが大きいので、直まき作りがよいでしょう。30～40cm間隔で2～3粒づつ点まきしてやります。

〈肥料〉

腐植質に富んだ肥よくな場所を選びます。土が酸性にならぬよう石灰を100g/m²程度施します。直まきの苗が30cm以上に伸びたら、月に2回程度、液肥を使って追肥します。

〈手入れ〉

大きな花を咲かせるために、蕾を2～3個残して、ほかは摘みとります。

〈病虫害〉

害虫はあまりつきませんが、病気ではウドンコ病が発生しやすいので、早めにモレスタンやトップジンM等の散布で防除します。

〈楽しみ方〉

庭の背景として50～60cm間隔に群植したり、垣根などに列植すると見栄えがあります。



ヒャクニチソウ

- ジニア
- キク科
- 春まき 1 年草
- 開花期 6 月下旬～10 月

〈種 類〉

夏の暑い太陽のもと、けなげにも咲きつづけるヒャクニチソウは、夏を謳歌する花で、家庭でたねをまいて楽しむ草花の代表格といえます。その種類には大輪のダリア咲き、中輪のプミラ咲き、大輪で狂い咲きのカクタス、小輪でまり状のポンポン咲き、極小輪株立ち状で花壇に好適のジニア・リネアリス等種類は豊富です。

〈性 質〉

メキシコ原産の草花で、性質はきわめて強く、夏花壇には欠かせない春まき 1 年草です。

〈種 ま き〉

たねまきは、4～5 月がよいのですが、高温期ほど短期間で咲きはじめることから、夏まきをしても、秋にはきれいな花を咲かせてくれます。

〈育苗・定植〉

発芽後 1 回移植して、本葉 6～8 枚の時に定植します。日当たりがよくて、よく肥えた土地で、夏乾燥しない場所が適します。

〈肥 料〉

基肥には、できるだけ有機質肥料を多く施し、その後も月に 2 回程度、化成肥料で追肥してやりますと長期間、花を楽しめます。

〈手 入 れ〉

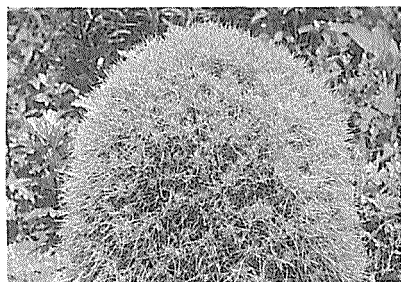
ヒャクニチソウの花を絶えず咲かせるには、開花して咲き終った花を絶えず摘み取ってやることです。この花ガラ摘みこそ、株を弱らすことなく次々と側枝を出させる秘けつです。

〈病 害 虫〉

ウドンコ病や斑点病、アブラムシやハダニがよく発生します。殺菌剤のベンレートやモレスタン、殺虫剤のDDVPやケルセン、アカール、モレスタンなどを定期的に散布します。

〈楽しみ方〉

矮性種は花壇に群植したり、鉢作りにしたりします。種類の多さから切花としての利用も増えています。



コキア

- ホウキギ
- アカザ科
- 春まき1年草
- 観賞期 8月下旬～10月

〈種類〉

細く先のとがった葉をつけ、こまかく分枝した高さ60～100cmのこんもりとした球状の株を作るのがコキアです。

夏は、緑すがすがしく、秋には枝も葉も紅葉します。生け垣や花壇の縁どりなどには好適な一年草です。秋には刈りとりて干し、束ねて、草ぼうきを作るのに広く利用されることから、ホウキギ、ホウキグサと名づけられました。

〈性質〉

日当たりのよい所であれば、どこにでもつくれる強い性質の植物です。

〈種まき〉

4月中旬に苗床にたねまきします。たねは、ホウレンソウに似ており、直根性ですので直まきに適していますが、移植も可能です。

〈育苗・定植〉

発芽後20日ぐらいで一度移植し、15cm以上になったら植え出します。水はけがよく、やや乾きぎみの日当たりのよい場所に適します。はじめ30～40cm間隔に株間をとり、植えてやります。

〈肥料〉

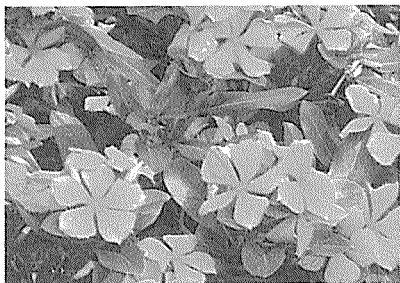
ごく控え気味に与えます。

〈手入れ〉

株の形を整えるには、7月ごろ枝先を軽く刈り込みます。また生育中に倒伏することがありますから支柱をしてやります。

〈楽しみ方〉

花壇の縁どり、生垣、ぼうき材料そして薬用植物として利用されています。



ニチニチソウ

- ビンカ
- キョウチクトウ科
- 春まき1年草
- 開花期 8～10月

〈種 類〉

真夏の草花として盛夏期の花の少ない時期の花壇や鉢植えそして切り花として広く利用されています。花は1日花ですが、夏から秋まで毎日次つぎに開花するので日々草といわれているようです。高性種と矮性種に分かれ、花色は、白、桃、濃桃、赤目などがあります。

〈性 質〉

マダガスカル、ジャワ、ブラジルなどの熱帯地方が原産地であるためか、高温を好む春まきの一年草で、直根性であり、移植をきらう性質があります。

〈種 ま き〉

発芽に20℃以上を必要とするので、たねまきは5月以降直まき又は箱(平鉢)まき→ポット育苗とします。

〈育苗・定植〉

直まきの場合は、発芽したら適宜間引きします。鉢栽培の場合は、本葉2～3枚で早めに仮植してやります。本葉が10枚前後になれば軽く摘芯し側枝を出させます。日当りのよい、排水良好な場所を選んで定植します。

〈肥 料〉

基肥には有機質肥料を与え、追肥は、月に1回程度、化成肥料を施します。あまり窒素が多いと花つきが悪くなります。

〈手 入 れ〉

花壇では、一回摘芯して側枝を出させますが、切り花用の場合は、摘芯せずにつくります。鉢ものは、日陰や過湿の場所に置かないよう注意します。

〈病 害 虫〉

葉を犯す斑点病には、早目にベンレートを、害虫ではウイルス病を媒介するアブラムシがよくつきますので、オルトラン、ダイシストン粒剤で駆除します。

〈楽しみ方〉

炎天をものともせず、また公害にも強い草花として、道路沿いのプランターやフラワーポットに最適です。



ハゲイトウ

- ガンライコウ
- ヒユ科
- 春まき 1 年草
- 観賞期 8 月中旬～10 月

〈種 類〉

ハゲイトウは、ケイトウの仲間で、一名アマランサスと呼び、わが国では、`雁来紅、ともいわれてきたものです。

花ではなく、茎の上部の発色した葉を観賞するものでバイカラー、ニシキバケイトウ、ヤナギバケイトウなどがあります。

〈性 質〉

生育適温が18～35℃で、耐寒性がなく、比較的高温でないと発芽しない熱帯原産の春まき 1 年草です。

〈種 ま き〉

発芽適温が比較的高温であることから、気温が十分上がった5月中・下旬にたねまきをします。

〈育苗・定植〉

直根性で移植をきらう植物なので庭や花壇に直接にたねをまき、必要に応じて間引きをしてやります。花壇の都合で移植が必要な場合は鉢まき育苗しておきます。

〈肥 料〉

6 月ころまでは、月に 2 回ぐらいの割合で化成肥料を与えますが、それ以降はほとんど肥料は必要ありません。特に窒素肥料を控えめにすることが葉の色づきをよくするポイントです。

〈手 入 れ〉

直まきの場合は、間引きが必要です。草丈が高くなるので場合によっては支柱を立ててやります。

〈病 害 虫〉

土から伝染する病気に弱く、連作すると立枯病になります。できるだけ連作は避け、葉の色づくところヨトウムシやズイムシに食害されることもあるので、マラソン乳剤やカルホス乳剤を散布します。

〈楽しみ方〉

花壇に群植して楽しむのが普通ですが、6 月以降たねまきして、鉢づくりするのもおもしろいものです。



ア ス タ ー

- エゾギク
- キク科
- 春まき1年草
- 開花期 7～8月

〈種 類〉

7～8月の頃、さまざまな花色の八重や一重の花を咲かせ、夏の切り花、特にお盆の花としてなじみの深い草花です。日本へ渡来したのは、江戸時代といわれ、水あげがよく、切り花として需要が多いことから改良が進みました。枝打ち型とほうき立ち型の2つのタイプがあります。

〈性 質〉

春まき1年草でありながら、暑さに弱いという性質があり、冷涼な気候を好みます。耐寒性があることにより、暖地では秋まき栽培も可能です。

〈種 ま き〉

4月中・下旬が、花壇用としてのまき時です。発芽適温は18℃で発芽日数は4～5日間です。なお種子は、消毒したほうがよいでしょう。

〈育苗・定植〉

いちど仮植したあと、本葉8～10枚のとき日当たり、通風、排水のよい土地を選んで株間15～18cm間隔に定植します。

また、定植の際、石灰を施用します。アスターは、大変連作をきらい、少なくとも3～4年は、同じ場所で作れません。

〈肥 料〉

有機質肥料を十分に施して、肥料を切らさないように注意し、追肥は、月に1～2回、化成肥料を施します。

〈病 害 虫〉

病気では、立枯病、いちょう病、斑点病、さび病にかかりやすいので、あらかじめ土壌消毒をおこないます。また連作をさけ、定期的にベンレートやダイセン、マンネブダイセンを散布します。

害虫としては、ウリハムシやズイムシ、ヨトウムシがつきやすいのでマラソン乳剤などで駆除します。

〈楽しみ方〉

矮性種は、花壇に最適です。高性種は、仏花としてなくてはならないものとなっています。



コスモス

- アキザクラ
- キク科
- 春まき1年草
- 開花期 6～11月

〈種類〉

和名をアキザクラと呼んでいるこのコスモスは、秋の季節になくてもならない花。わが国へは明治中期に渡来したものです。

極めて強健で栽培し易く、花壇に、切花に古くから親しまれてきました。その種類は、9月末頃から咲く秋咲き種、種をまいてから60日で開花する早咲き種、種類の異なるキバナコスモスなどがあります。

〈性質〉

こぼれ種で毎年自生するくらい強いが、全く耐寒性のない春まきの1年草です。とくに土質を選ばないが、日当たりと水はけのよい所を好み、肥料は控え目にすることが肝要です。

〈種まき〉

普通コスモス、キバナコスモスいずれも4月中旬～5月がまき時です。草丈を低くしたいときは、夏まきにします。

〈育苗・定植〉

直まきがいちばん簡単ですが、移植の場合は本葉3～4枚で10cm間隔に移植し、大きくなれば日当たりのよい場所に60～90cm間隔で群植します。

〈肥料〉

徒長しやすいので肥料はほとんどいらず、生育に応じてごく少量、追肥をする程度です。むしろやせた荒地のほうが花つきがよくなります。

〈手入れ〉

草たけが20cmくらい伸びたら、芯を摘みます。こうするとよく枝分かれし、秋まで咲き続けてくれます。また台風シーズンは倒伏しやすいので支柱立てや土寄せをします。

〈病虫害〉

病気の心配はありませんが、アブラムシやハダニがつきますので殺虫剤で予防します。

〈楽しみ方〉

草たけの高いものは、庭の背景に群植したり、垣根づくりにしても楽しめます。花壇への利用では、低く仕立てたもので密植します。またさし芽した苗を鉢あげして鉢ものとしても楽しめます。



ジギタリス

- キツネノテブクロ
- ゴマノハグサ科
- 春まき2年草
- 開花期 6～8月

〈種類〉

ジギタリスは、草丈50～130cmの美しい鐘状花をつける薬草です。古くから庭園に植えられ、葉を陰干しして粉末にし、強心剤としても利用されてきました。花として観賞価値もあることから、花壇に配植されたりします。大輪咲きの高性種と多花性の矮性種があります。

〈性質〉

よく2年草として扱われていますが、本来は多年草扱いできるものであり、一度植えるとたねが落ちて自然に生えてくるくらいの強くて作りやすい耐寒性草花です。

〈種まき〉

適期は、5～6月、細いたねなのですまきします。

〈育苗・定植〉

10～15日で発芽するので、そのあと7～8cm間隔に移植します。夏場は半日陰で育苗します。9月中・下旬に日当たりと水はけのよい場所に株間30～40cmで定植します。

〈肥料〉

月に1～2回程度、化成肥料を施します。

〈手入れ〉

一度植えれば、ほとんど手入れは必要ありませんが、花が終わったら花ガラを切りとってやります。

〈病虫害〉

病気としては、茎腐病と炭そ病、害虫はアブラムシが時々発生します。

〈楽しみ方〉

花壇の背景や中心に列植したり、群植すればおもしろいものになります。



フウリンソウ

- カンパニュラ
- キキョウ科
- 春まき2年草
- 開花期 5～7月

〈種 類〉

ラテン語でカンパニュラの語意は「小さい鐘状のもの」という意味であり、日本の山野に自生しているホタルブクロもこの仲間です。数多いカンパニュラの中で、フウリンソウは草丈1mほどの二年草で、春から初夏にたねをまくと、冬越しして翌春に開花します。正式名をカンパニュラ・メディウムといい、花壇や切り花用として広く利用されています。また、大型の鐘形花で、花色も桃、淡紅、白、青と豊富にあります。

〈性 質〉

あまり耐寒性がなく、本県のような寒冷地帯では、冬越しがむずかしいとされています。

〈種 ま き〉

5～6月に育苗箱にうすくばらまきするか、すじまきして、たねが隠れる程度に覆土します。

〈育苗・定植〉

本葉2～3枚で、仮植し、10月上中旬に日当たりと水はけのよい場所を選んで30cm間隔に定植します。

〈肥 料〉

堆肥か腐葉土を1㎡当たり2kg、化成肥料70gを基肥として施し、春以後化成肥料20g程度を2～3回追肥します。

〈病 害 虫〉

立枯れ病には、ベンレートやタチガレン剤を土壤灌注します。

〈楽しみ方〉

切り花のほかに、矮化剤(Bナイン250倍液)処理によって、鉢花としても楽しむこともできます。



タチアオイ

- ホリホック
- アオイ科
- 2年草または多年草
- 開花期 6～7月

〈種 類〉

直立した長い茎が数本に分枝し、フヨウに似た花を数多くつけて立ち並ぶタチアオイは、日本では万葉の昔から栽培されていたものです。英名をホリホックと言って、一般によく知られています。学名のアルテアは、ギリシャ語「治療させる」に由来しており、文字どおり薬草としても知られています。タチアオイ属は東半球の温帯に約15種存在することが知られています。

〈性 質〉

耐寒性の宿根草の性質をもっており、性質は丈夫で強く、むしろ植え放しにしておいても枯れることはありません。

〈種 ま き〉

暖地では、秋まき(9～10月)に適していますが、本県のような寒冷地は、春まきし、翌年の6～7月に開花するパターンが確実です。

〈育苗・定植〉

たねまきすると約1週間ぐらいで発芽してきますから、本葉2～3枚になったら花壇に植えてやります。日当たりと排水がよく、それでいてあまり乾燥しない場所に株間30cmぐらいにして定植します。移植をきらうので、根を傷めないよう注意して植え込みます。

〈肥 料〉

基肥に堆肥などの有機質肥料を施し、追肥として化成肥料を与えます。

〈手 入 れ〉

通風を図り、十分にかん水をします。台風時には、支柱をするか風よけしてやります。

〈病 害 虫〉

ウドンコ病には、モレスタンやトップジンをアブラムシやハマキムシにはスミチオンやDDVPなどで防除します。



キンセンカ

- カレンジュラ
- キク科
- 秋まき1年草
- 開花期 4～5月

〈種類〉

キンセンカは、春から初夏にかけて咲く秋まき1年草の代表格といえましょう。学名のオフィキナリスは、`葉になる、`という意味をもち、古くから薬用植物としても利用されてきました。昔は、切り花として有名な早春の花でもありましたが、最近では矮性の種類が改良され、花壇用として広く栽培されています。黄、だいたい、赤のにぎやかな花を咲かせてくれます。

〈性質〉

耐寒性の秋まき1年草であるために、温暖な気候を好みます。したがって、寒さのきびしい本県では、秋まきよりも、春まきして夏に咲かせる方がより安全です。

〈種まき〉

まき時は、9月上旬ですが、早春に室内でたねまきするのもよいでしょう。たねは大粒でまきやすく、よく発芽してくれます。

〈育苗・定植〉

本葉2～3枚で一度移植し、ポリ鉢で苗を育てて、本葉6～8枚で花壇に定植します。キンセンカは、酸性土をきらいますので、土には必ず石灰を1㎡当たり200g程度混ぜて耕してから植えます。

〈手入れ〉

冬越しの際の敷きわらは防寒対策として有効です。

〈病虫害〉

苗のときにウドンコ病にかかります。トップジンやモレスタンで防除します。害虫では、アブラムシやヨトウムシが出やすいのでダイシストン、オルトラン粒剤を株もとにばらまきます。

〈楽しみ方〉

花壇に群植するのがもっとも美しいでしょう。プランター植えもよいものです。

2. 宿根草花

宿根性草花は、春のシバザクラやスズランから晩秋のツワブキまで、毎年、とくに手をかけなくても自然に土の中から出てきて、絶え間なく庭に豊かな色合いとポイントをくりひろげてくれます。

1. 宿根性草花とは

宿根性草花(宿根草)とは、永続的に、毎年、生長、開花、結実を繰り返す性質をもつ多年生草花です。多年生草花の中には、地下茎や茎・根に養分を貯えて休眠するものがあり、これらを球根草花類と呼んでいる。一般には、この球根草花類を除いた多年生植物のすべてを宿根草としています。

宿根草は、その性質別に大別すると、次のように分類できます。

◇地上部枯死型…冬期、地上部が枯れて休眠する。

ホトトギス、スズラン

◇ロゼッタ型……ロゼッタ形の葉をつけた小苗で越冬する。

キク、セキチク

◇常緑型……年中、葉を繁らせている。

オモト、シバザクラ

◇室内越冬型……冬、屋外では越冬できない。

マーガレット、クンシラン

ただし、この分類は、取扱い方によるため、地方によって異り絶対的なものではありません。

2. 宿根草の魅力

宿根草は、日本、中国、ヨーロッパの比較的温暖な温帯地方原産のものは、性質が強健で増殖し易く、極めて育て易い。一方、熱帯原産のものは耐寒性が弱く、冬期温室栽培を必要とする場合が多いものです。

(1) 花壇作りとして

宿根草は、永年的に、生育を繰り返すので、一度植えておけば、毎年花が咲いてくれるメリットがある反面、その多くは一季咲きであり、花が咲いているのは、1年のうち、1カ月以内のことが多く、その他の時期は葉ばかりとなります。そのため、一般花壇としては主役を1年草類とし、添え役に、宿根草を用いています。

しかし、毎年きまった季節に、きまった花がみられ、自然な草姿を楽しめるので、園芸愛好家の間で人気が高いものです。これを用いての花壇は、一般花壇と同様に、①群植花壇、②寄植え花壇、③境栽花壇が考えられます。これらの

花壇作りには、多くの宿根草の性質とその組み合わせによる効果についても、熟知している必要があります。そこに、宿根草の花壇作りのむずかしさがあると同時に、魅力があるわけです。

(2) 庭植えとして

宿根草は、1年草と異なり、あまり、人為的に改良されていない野趣を残した種類が多いので、庭の適切な所に、数株ずつ植え込んだ方が、山野草的な味わいを楽しめます。また、1年草よりも日陰性のもの(ユキノシタ、シュウカイドウなど)や、半陰地性のもの(ツワブキ、シラン、ギボウシなど)がかなりあるので、植え場所も、1年草類以上に広範囲に求められます。一方、地被植物(グランドカバー)として、洋風・和風いずれの庭にも用いられ、洋風の庭には、明るくモダンな感じのするものを選び、和風の庭には落ちついた渋みの素材を選びます。

(3) 鉢植えとして

古くから栽培されてきた宿根草のなかでも、フクジュソウ、サクラソウ、キクなど日本園芸草花の多くは、庭植え以上に鉢植えとしての利用が多い。花が咲く頃、各地で、愛好家による展示会が開かれ、それに合わせた品種改良や栽培法が考案されて、これが園芸の発展をうながしてきました。

3. 宿根草の育て方

(1) 植え時

植え時をまちがえると、よく根づかなかったり、その後の生育が悪くなったり、開花に至らないことが多い。植え時は、その種類によって次のように考えて決めます。

- 春咲き宿根草……原則として、前年の秋、9～10月が植えつけの適期であり、春植えにすると、根づいても花が咲かなかったり、咲いてもあとの生育の悪いことがあります。(ジャクヤク、ミヤコワスレなど)
- 夏～秋咲き宿根草類……原則として冬を越して春先きの4月頃、新芽が伸び始める前に植えるようにします。植え時が遅れると芽が伸び過ぎて植えいたみを生じやすいので適期をはずさないことが肝要です。(ホトトギスなど)
- 四季咲き宿根草類……ガーベラなどの四季咲き種は、夏～秋咲き宿根草に準じて春植えをするのがよい。(セントポーリアなど)
- 例外的なもの……宿根アヤメ類は、春咲き種に準じ秋植えでもよいが、花後、夏までの間に植え終るのがよい。フクジュソウ、サクラソウなどは、12～2月に、鉢植えができます。

(2) 場所

種類によっては、好む日照が異なるので、日当たり具合をみて、適切な場所を選ぶことが大切です。

- 日当たり地がよいもの(半日以上日の当たる場所)…… シバザクラ、シャク

ヤク、ハナショウブ、キキョウ、ガーベラ、キクなど

- 半日陰地がよいもの(半日以下の日照でよいもの)……オダマキ、シラン、スズラン、ギボウシ、ツワブキ、フクジュソウなど
- 日陰地がよいもの……ユキノシタ、シュウカイドウ、シャガ、ホトトギス、シダ類など

(3) 植え方

面積あたりの植え付け株数は、種類によって違い、アメリカフヨウのような大形のものは1㎡当たり1株、ギボウシなど中形のもので5～6株、シランなどの小形のものなら30株程度とします。植え付け後、十分に、灌水を行えば、その後、よほど乾かない限り灌水の必要はありません。

(4) 手入れ

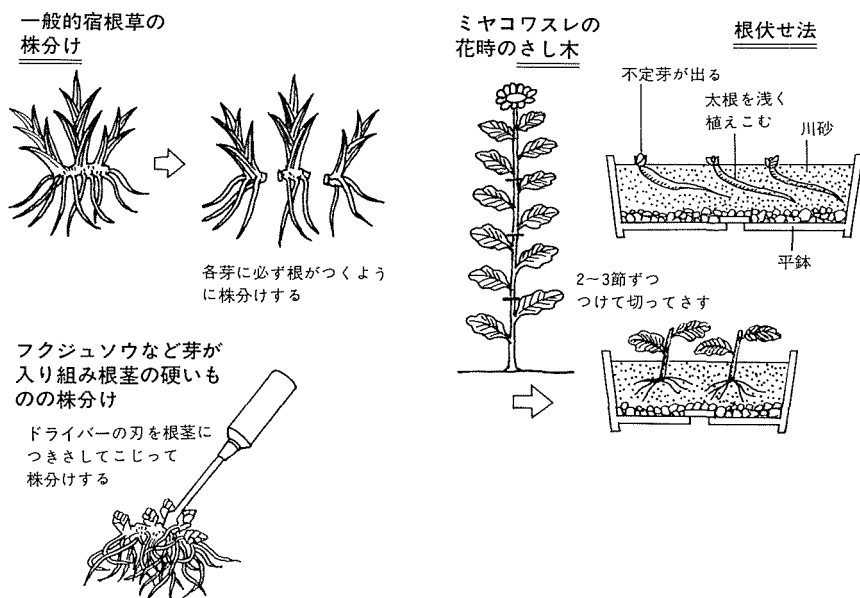
生長期には原則として月に1回程度追肥をしますが、花芽分化期1ヶ月ぐらい前からは施肥をしない方がよい。春咲き宿根草類では、花が終わった直後にお礼肥を施し、以後茂る茎葉を大切に、刈りとりたないように注意します。結実性の高いものは、採種株以外は結実させないように花がらを切り除きます。

4. 殖やし方

宿根草はいろいろな殖やし方ができますが、次のような方法が主に行われます。

(1) 株わけ

株元より多数出ている子芽を親株より切り分けて殖やす方法です。繁殖率は



それほど高くないが、株分けした苗は、初年度にほとんど、一人前に育って開花する最も確実な繁殖法です。株分けの時期は、ほぼ前述の植え時と同じ時期に行いますが、株元より子芽が多く出そう時期がよい。

(2) さし木

宿根草類のうち、茎立つ性質のものは、ほとんど、さし木でも殖やすことができます。一度に多く殖やしたい時には、このさし木繁殖を行います。

(3) 根伏せ法

根から不定芽を出すもの(オイランソウ、ニホンサクラソウなど)は、太根を切って、浅く横に寝かせて伏せこむとよく芽を出します。

(4) 実生

よく結実する種類では、いずれも種子繁殖ができますが、開花まで年数の要する種類では、品種改良以外は行われません。

● 手作りを楽しむドライフラワー ●

1. どんな花がドライフラワーに向くか。

ドライフラワーにするためにはどんな花でもというわけにはいきません。第一に、乾燥させても花の形が変わったり、くずれたりしないもの。第二に、花色が変色しないもの。以上二つの条件が備わった植物であることが必要です。

簡単にドライフラワーにできる植物としては次のようなものがあります。

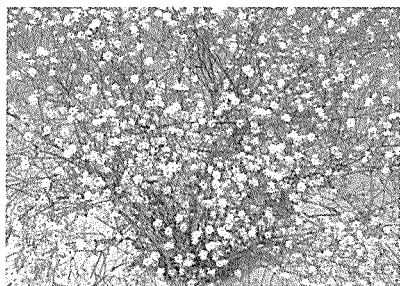
ヘリクリサム(帝王貝細工)、アクロクリニューム(姫貝細工)、千日紅、スターチス類、カスミソウ、ペニバナ、アリウム、ススキ、ガマの穂、コバンソウ、ワレモコウ。

2. 自然乾燥がいちばん簡単

薬品等を使わずに、逆さに吊しておくだけで作られる自然乾燥法は、時間がかかるが最も簡単な方法です。不要な葉は切取ってから、太いものは1本ずつ、細いものは数本を束ねて吊す。直射日光をさけ、なるべく風通しのよい場所を選んで、短時間で乾かすのがコツです。

3. 立枯れを楽しむ

自然に枯れた植物の姿を楽しむのも風情があります。花の終わった後のヒマワリ、ガクアジサイ、ヤマノイモ。実のはじけたアヤメ、ヒオウギなどの殻。山にあるツルウメモドキ、サンキライなど、探せば楽しめるものが沢山あります。



宿根カスミソウ

- ジブソフィラ
- ナデシコ科
- 開花期 6～9月

〈性 質〉

小さな花をたくさんつけて咲きそろう姿は、遠くから眺めると春霞を思わせませす。近年、この花の人気の高まり、フラワーアレンジには欠かせない花です。

原産地の条件からも酸性を避け、乾燥気味の土地を好み、排水のよい砂壤土や壤土を選び、高うねにして乾燥ぎみな条件で作るようにします。

一般に、四季咲きに八重のもの(プリストルフェアリー)の人气が高く、栽培も多い。草丈120cmに伸びる主枝から、針金のように細くてかたい側枝を無数に出し、各先端に雪白色八重の花径1cm位の美しい小花をつける。白花のほか、桃色系もあり、近年はさらに濃色のレッドシーが出回っています。

繁殖は、現在、大部分が挿し芽によって行われています。

〈栽 培〉

日当たりと排水の良いところを選び、11月あるいは4月頃に定植します。施肥は1㎡当たり堆肥3kg、化成肥料60g～100g程度施す、徒長させないことが大切であり、窒素肥料は少なめにし、リン酸とカリ肥料を多くするようにして茎を硬く作る。又、石灰を1㎡当り200g程度施し、pH7に調整します。

植付けの間隔は、普通は90～100cmのうね幅で、株間を40～45cmとする。

1株から5～6本の主枝が繁茂し、高性種では倒伏する心配があるので、ます目の大きいフラワーネットを使用します。

〈病 害 虫〉

主な病害虫は、アブラムシ、スリップス、白絹病等で、虫類は早めに駆除し、白絹病は土壌伝染するので、抜き取りを励行し、PCNB剤等を灌注します。



キ　ク

- ヨワイグサ
- キク科
- 開花期　7～11月

〈性　質〉

菊は耐寒性の宿根草で夏菊以外、短日性植物であり、日が短くなる9～11月に開花します。花後、開花茎は枯れて、株元より越冬芽(冬至芽)を何本も出して越冬します。この冬至芽が春から生長して秋に花をつけます。

菊栽培の歴史は古く、極めて種類が多い。我国で改良された秋咲菊を総称して和菊と呼んでいます。大輪種(花径18cm以上)では厚物、厚走り、管物、一文字などがあり、中輪種(花径9cm以上)では江戸菊、伊勢菊、嵯峨菊、肥後菊など地方独特のものがあります。小輪菊は多花性で鉢物、懸崖作りなどに多く使われています。一方、欧米で改良された菊を洋菊と呼び、切花用のスプレー菊、鉢物用のポットマムなど、色彩的に豊富であてやかなものが多い。その他、日照時間に関係のない夏菊や秋咲き菊の最晩性種である寒菊があり、切花用として作られています。

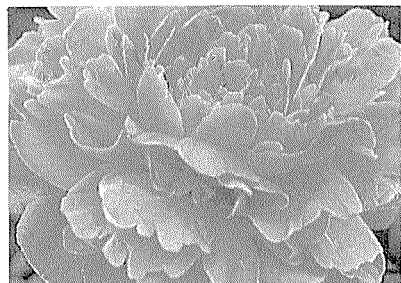
〈栽　培〉

4～5月にさし芽をして発根した苗を定植します。一方、夏菊は冬至芽を利用するとよい。日当たり・排水の良い所に植えますが、1㎡当たり堆肥2kg、化成肥料150g程度施して株間は15cmほどとします。

大輪菊や中輪菊(輪菊)は、定植後、摘芯を行い、そろった側枝を3～4本出させますが、懸崖作りなどでは、8月末までに4～6回位の摘芯を繰り返して側枝を多数出させるように仕立てます。また、輪菊は9月から側芽取りを行い、出蕾時には、側蕾を早めに摘み取ります。なお、繁殖は、株の老化をさけるため原則としてさし芽とします。

〈病　害　虫〉

かなり病害虫が多いので、防除をこまめに行うことが菊作りのポイントです。白錆病に特に注意が必要で、トリホリン乳剤などを予防的に散布します。



シャクヤク

- カオヨグサ、エビスグサ
- ボタン科
- 開花期 5～6月

〈性質〉

「立てば芍薬、座れば牡丹」といわれるように、シャクヤクの豊麗な花は美人にもたとえられ、古くから親しまれています。

耐寒性の宿根草ですが、根は肥大して塊根状となり、球根植物ともいえます。土質はあまり選びませんが、乾燥地では生育が悪く、充分保水力のある土地を好みます。日当たりはよいほどよく花をつけるので、栽培に当たっては、植え場所の選定が大切です。秋から新芽が生長して翌春開花し、花後地下部が生育肥大して夏に花芽を分化します。シャクヤクは花容に変化が多く、一重、八重、金しべ、翁咲き、冠咲き、手まり咲き、ばら咲きなどがあり、花色も、紅、桃、白のほか黄色種もあります。

〈栽培〉

シャクヤクは一度植え付けると4、5年すえおくので、透水性のよい土壌を選び、30～40cmまで深耕し、1株当たり堆肥3kg、化成肥料60g程度を施します。定植は、9月～10月が適期で、株間は50～60cmとし、芽の上に3～5cmの覆土を行います。非常に肥料食いなので、融雪直後に芽出し肥え、花後の6月にお礼肥えとして、株のまわりに化成肥料を約30g施します。また、花後、秋まで茂る茎葉を切らずに大切にするのがポイントです。なお、繁殖は、株分けによります。

〈病虫害〉

疫病や斑葉病、菌核病が発生しやすいので、4～9月の間は定期的に殺菌剤を散布します。

＊ お祝いに贈る花

- ◇新築、引越し祝い＝華やかな明るい感じの花を贈りたい。ただし、真紅な花は火事を連想させるという理由で嫌われることがあります。
- ◇銀、金婚式＝お祝いごと全般にバラの花が贈られますが、金、銀にちなんだ名前のものも喜ばれます。
- ◇長寿のお祝い＝紅白のバラの花束も一つのアイディア。お祝いの場合は奇数にして贈ります。



ミヤコワスレ

- アズマギク、ミヤマヨメナ
- キク科
- 開花期 5～6月

〈性 質〉

わび、さびの心を重んじる日本人には欠かせない花です。日本独特の花で、手に入りやすいこともあり、茶花としての需要が多い。また、切り花以外にも、鉢花、庭園、花壇などにも適しています。花色は白、紫、紅、桃等で、濃紫色が主体となり、4～6月に、20～60cmの茎の頂端に径3.5～4cmの可れんな花を3～5輪つけます。高性種はおもに切花用として栽培され、矮性種は鉢植えや花壇向けとなります。

〈栽 培〉

植え場所は水はけのよい半日陰を選び、西日の当たらない落葉樹の下などがよく、夏の高温乾燥に弱いので注意します。定植、植え替えは秋に行いますが、腐植質の多い弱酸性土壌(pH5.5程度)がよく、PH6～6.5になると生育が悪くなります。基肥を9月上旬頃まで有機質肥料を中心に施し、石灰質肥料(石灰窒素など)はさけます。

鉢植えも水はけのよい土を用いて秋植えとします。

株分けは秋に行い、すぐに定植します。さし芽は、5月上中旬に1節ごとに切って、砂、鹿沼土などにさします。

〈病 害 虫〉

白絹病は連作すると多発するので、連作をさけるとともに、PCNB粒剤6kg/aを施用します。高温下で発生するダニ類については、ケルセン、プリクトランなどの殺ダニ剤の交互散布を行います。

＊ お見舞いに贈る花

◇病氣見舞い＝刺激の強いものはさけて、やさしい風情の花がよい。匂いの強い花、散りやすい花、血を連想させる真赤な花は常識として贈らない。長期療養の人には、季節を感じさせる花もなぐさめになります。

◇おくやみ＝葬儀の日ばかりでなく、数日たってから、遺族をなぐさめる意味で花を贈るのも、思いやりの表し方とされています。



シャスターデージー

- キク科
- 開花期 5～7月

〈性質〉

アメリカの育種家ルーサー・バーバンクが、1920年頃作り出した園芸種で、カリフォルニアのシャスタ山の名がつけられました。

シャスターデージーは、高さ30cm～80cm、下部の葉は花期には枯れ、中葉は、倒披針形で鈍い鋸歯があり、上部の葉は細くて小さい。茎は、太くて耐久性があり、切り花、花壇用に用いられます。花は大きく白色であり、早春に花茎が伸び出し、5月から7月にかけて開花する長日植物です。

普通は、清楚で美しい一重咲きが主体ですが、花もちや新奇性をねらった二重咲き、八重咲き、丁字咲きなどもあります。

〈栽培〉

日当たりのよい壤土か粘質壤土地に適し、乾燥のはげしい場所はきらいです。性質は、強健で作りやすいが夏の高温にはやや弱く、また、連作をきらいです。大株は立枯れになりやすいので、春か秋に株分けして混みすぎないようにします。定植は、15～20cm×45cm株間の長方植えにするとよく、肥料は、基肥として、1㎡当り堆肥2～4kg、緩効性の化成肥料約100gを施します。その後生育状態をみて、追肥します。

繁殖は、株分けのほかに、さし芽、実生もできます。株分けは、株元に発生する新しい芽を1芽ずつかきとって植えます。また、腋芽を砂などにさしてもよい。種子は1㎡で300～400粒、発芽適温は15～20℃のため、早まきの場合は多少の保温が必要です。

〈病害虫〉

白絹病が発生しやすいため、株がむれるのを防ぐとともに、石灰を施し、連作を避ける。発生をみたら、直ちに病株を抜きとり焼却します。



スズラン

- キミカゲソウ
- ユリ科
- 開花期 4～5月

〈性 質〉

高原の森の中に、ひそやかに咲くスズランの花は、その快い香りとともにロマンチックな花として人気があります。幅広の葉の陰にかくれて、純白色ツボ状の小花が数輪垂れ下がって咲く姿はこのうえなく愛らしい。

半陰地性の宿根草で、群落状に植えるともっとも美しいので、午前中日の当るような庭木の根元などにたくさん植えておくと、自然風であり、花つきもよい。

スズランには、日本の中部以北の山地に野生する日本種とヨーロッパ原産のドイツスズランとがあります。日本種はやや小形で小輪、花数も少なく香氣もあまり強くありません。ドイツスズランは、大柄で葉は濃緑色、花は大きく花数も多い、香りも強くて、そのうえ、丈夫で栽培しやすいものです。また、この変種として、淡桃色のものや斑入葉種、あるいは八重咲種もあります。

〈栽 培〉

植付けは、一般に3～4月に行うが、植え場所は、排水のよい所を選び、腐葉土を多くまぜます。花つきをよくするためには、花後に株をよく太らせることが大切で肥料は花後から夏頃まで油カスや化成肥料(20g/m²)などを必ず追肥します。また、株の太りをよくするため、花後の葉を大切にします。葉を病害虫で傷めたり、夏の乾きで弱らせることもよくありません。敷わらをして乾燥を防ぎ、秋まで葉を青々と茂らせておきます。繁殖は株分けで行います。(11月あるいは3月ころ)

〈病 害 虫〉

葉を黒変枯死させる病気がでやすいので、敷わらを行いベンレートなどの殺菌剤を散布して防ぎます。



シバザクラ

- ハナツメクサ
- ハナシノブ科
- 開花期 4～5月

〈性質〉

春早くから5月頃まで、道路の縁や石垣などを一面にピンクや白の、サクラの花を小さくしたような、かわいらしい花がカーペット状に彩り、富山の水田ともよくマッチし、春の雰囲気を一層高めます。

茎葉は地面をはい、節から根を出して、株回り30～40cmくらいに広がり、濃緑色の葉が密生するもので、シバザクラの名は、この花の草姿にピッタリの感じです。寒さや暑さに強い常緑の多年草であり、丈夫で育てやすく、一度植えておくと年ごとに株を張り、花つきがよくなります。また、日当たりを好み、主に、石垣土手、花壇に植えられるが、芝生がわりのグラウンドカバーにも適します。

〈栽培〉

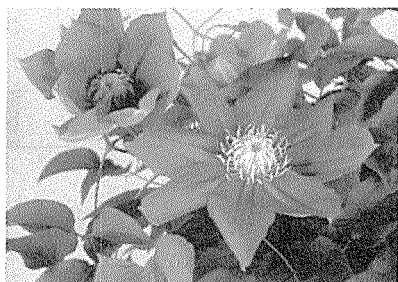
性質は強く、日当たりのよい場所であればどこでもよく育ちます。家庭では、春先に鉢苗を購入して定植しますが、数年後、株が大きくなってきたら、株分けして植え替えます。

繁殖は、株分けの他にさし芽もできます。秋に健全な茎を取り、4～5cmに切って水あげした後、発根ホルモン剤をつけて山砂やパーライトなどにさします。さし芽後は半日陰にして風を避け、湿度を保つと3～4週間で発根します。

さし芽や株分けで作った苗は、秋か早春に目的地に定植します。基肥として、㎡当たり化成肥料50～60g施しますが、追肥は、秋と早春、芽が出る前と、花後1回ずつ与えます。

〈病虫害〉

5～10月ごろまでは、ハダニがよく発生するので防除します。



クレマチス

- テッセン、カザグルマ
- キンポウゲ科
- 開花期 5～9月

〈性 質〉

クレマチスは一般的に園芸植物名として用いられていますが、植物学的にはキンポウゲ科クレマチス属の一群の植物をさし、世界に約300種、日本には約30種が自生しています。

ふつうクレマチスといわれる種類は、中国産のC.ラヌギノーサ、テッセン、日本産のカザグルマ、ヨーロッパ産のC.ピチセラ、C.インテグリフォリアなどを交配してヨーロッパで作られた四季咲種です。

日本では、古くからテッセンとカザグルマは栽培されていましたが、ヨーロッパのクレマチスが紹介されたのは明治から大正にかけてです。

生育適温は20～25℃で、日当りを好むが、夏は高温を避ける意味からも半日陰にしてやりたいものです。水分は多い方がよく、乾燥させるのは厳禁で、鉢植えの場合は灌水に注意し、できるだけ通風のよい場所に置きます。また、根元の乾燥をきらうところから、ことに夏は根元に敷ワラなどをして保護してやります。

用土は、保水性・排水性のよい有機質に富み石灰分を含んだものを用います。

〈栽 培〉

植え付けは、鉢植えの苗は冬期を除けばいつでもできますが、早春と晩秋に行うのがよく、1～2節深植えします。

剪定の方法は、品種により異なりますが、遅咲きの品種は早春に強剪定してもよいが、早咲きの一季咲き性の品種は前年枝にしか花芽がつかないので強剪定は禁物です。四季咲き性の品種は花後に開花枝を3～5節残して切戻すと60日ぐらいでつぎの花が咲いてくれます。

肥料は、3月と花後の5、9月に油かすと骨粉を等量混合したものなどを施すほか、生育期に液肥の1000倍液を2～3回与えるとよいでしょう。



アメリカフヨウ

- 宿根ヒビスカス、クサフヨウ
- アオイ科
- 開花期 7～9月

〈性 質〉

園芸的に扱われる草花の中で、もっとも大きな花を咲かせ、草丈が1～2mになる大型耐寒性多年草です。北米原産で、わが国へは昭和初年に渡来したといわれています。花は一日の寿命しかありません。

米国内には多数の変異系があり、分類が統一されていないとされており、園芸上アメリカフヨウ、フランスフヨウと呼ばれている種のほか、ソコベニアオイの交配種やモミジアオイの血の入ったものなどがあり、品種も数多くあります。

日本や中国などを原産とするフヨウは、高さ1.5～3mの半耐寒性落葉木で、アメリカフヨウと同じアオイ科ヒビスカス属で、スイフヨウもこのフヨウの変種の一つです。

〈栽 培〉

春に種をまくと8～9月には開花するので春まき一年草に分類する人もあります。株分けで簡単に繁殖することができ、発芽前の3月下旬～4月上旬に、茎を必ずつけて分けます。植え付けは、日当たりと通風がよく、夏にあまり乾かない場所を選んで、事前に堆肥を十分に混和しておき、40～50cm程度の大きな穴に根を広げるようにして植えます。

5月には萌芽してくるので支柱を立て、化成肥料を軽く1握りやります。その後も2週間に1度追肥をし、土寄せや敷ワラをしてやるとよいでしょう。夏の間の灌水は十分に行います。

鉢植えの場合は矮性種を選ぶとともに、C.C.Cなどの生長抑制剤を使用します。

〈病 害 虫〉

生育の盛んな梅雨期から9月にかけて、ハマキムシがよく発生します。この間は2週間に1度定期的にランネートなどの殺虫剤を散布します。また、予防策としてオルトラン粒剤などを株元にまいておきます。

根にネマトーダがつきやすいので植え替えは新しい場所を選ぶようにします。



ア ス チ ル ベ

- アワモリショウマ
- ユキノシタ科
- 開花期 6～7月

〈性 質〉

アスチルベと言われると「はてな、どんな花だったかな？」と思われますが、チダケサシ・アワモリショウマと聞くとピーンとくる人が多いと思います。アスチルベ属はチダケサシ属とも言われ、品種改良には日本原産種の血がかなり入っており、日本的な宿根草の一つともいえます。

アワモリショウマやアカショウマなどは古くから庭園に植えられており、栽培は容易です。日当たり・風通し・水はけのよい土地を好み、耐寒性もあります。種類によっては湿気のある半陰地に適するものもあります。

〈栽 培〉

3～4月に苗を購入して、腐葉土か堆肥を多目に混ぜた用土に植えます。肥料は化成肥料を開花前に2回、花後に1回程度施します。

株分けは3月ごろに行います。

鉢植えは、10月か3月ごろに3～4芽ついた株を5号鉢に植えます。用土は、赤玉土7：腐葉土3の割合で混合したものを用います。

〈病 害 虫〉

夏に株元から根にかけて白い糸がまつわりついたような白絹病が発生し、進行すると株は枯死してしまいます。連作をさけ、発病のおそれのあるときはPCNB水和剤(粉)を30g/m²施用して十分土に混和して植え込みます。また、発病初期ならば、株を掘り上げて罹病部位をPCNB水和剤液に浸漬後、新しい場所に植え替えます。

暖くなるとアブラムシやハダニが発生しますから、オルトラン粒剤や殺ダニ剤などを定期的に施します。

〈参 考〉

チダケサシは「乳茸挿し」の意味で、食用茸のチダケを採ったときこのチダケサシの茎にさして持帰ることに由来しています。



キキョウ

- キチコウ、オカトトキほか
- キキョウ科
- 開花期 6～9月

〈性質〉

シベリア、北部中国、朝鮮半島、日本に原産する1属(キキョウ属)1種の多年草で、古くから薬用や観賞用として栽培されてきました。

キキョウは秋の七草の1つに数えられ、万葉集の山上憶良の歌には「萩の花 尾花なでしこ 葛花 花瞿わみなえし花の花 女郎花ふじはかままた藤袴 朝貌あさがおの花」とありこの朝貌がキキョウだとされています。(朝貌はムクゲだとする説もあります。)

花色は青紫で形は鐘形で浅く5裂した星形合弁が基本ですが、花色、花形には多くの変種があります。また、鉢物としても栽培されており、極矮性のアポイギキョウや鉢物用に改良された矮性の園芸品種などもあります。

いけ花にする時は、水あげが悪いので、根元を碎き塩をもみつけていけるとよいといわれています。

〈栽培〉

一般的には、春まきにして苗を作り秋に植え込みます。3月下旬ころにポリポットなどに3～5粒ずつ種をまき、間引きをし1本立として秋まで育てる。秋に、株間25×10cm程度を目安として、有機質の多いやや粘質がかった用土の場所に植え付けます。

3～5年は植えたままでかまいません。株分けは10月中・下旬に行います。

肥料は、化成肥料を1㎡当たり100g 2回程度施します。

アブラムシやハダニがつきやすいので、予防を兼ねて定期的に殺虫剤や殺ダニ剤を散布します。

〈参考〉

鉢植えてコンパクトにつくりたい場合は、春芽が5cm程度伸びたら地上2cm程度のところでピンチを行い、4週間程して側芽が1cm程度に伸びたらBナインの200倍液を散布し、その後20日おきに2度300倍液を散布します。



シ ラ ン

- シケイ
- ラン科
- 開花期 5～6月

〈性 質〉

日本原産の植物で、本州の関東以南各地や四国九州に自生し、中国や台湾にも分布していて、古くから栽培されているいわば古典園芸植物の一つといえます。性質は強健で耐寒性もあり花も美しいので、外国にも紹介されて花壇や切花用として広く栽培されており、一時富山県から盛んに球茎が輸出された時期もありました。

陽地、半日陰いずれの場所でもよく生育しますが、用土はやや重いものがよいとされています。乾燥に弱いので夏場の水やりに注意します。耐寒性があるので富山での冬越しは容易ですが、出芽時に遅霜に合うと芽先が傷むことがあります。ただし、花には影響ありません。

〈栽 培〉

植え付けは、葉が枯れる直前の10～11月に行うのがよく、花壇に植えてある場合は、花数が少なくなってきたら全部掘り上げて、新しい場所に植えるか、用土を更新して植えるようにします。肥料はあまり必要でなく、基肥に消石灰と腐葉土を施用する程度とします。

鉢植えの場合は、用土に赤玉土や鹿沼土など排水のよいやや重いものを数種混合したものに腐葉土を30%程度入れます。夏場の水やりを忘れないように。

〈楽しみ方〉

シランは花壇や鉢植えで楽しむばかりでなく、切花としても楽しむことができます。12月に球茎を掘り上げて15℃ぐらいの温室に入れると50日くらいで花が咲いてくれます。なた、普通種のほか、白色のシロバナシラン、花は白色で唇弁に紅色の斑が入るクチベニシラン、紫紅色花とシロバナシランとの交配によるフクリンシランなどがあります。その他にもいろいろな変り花が知られています。



ジャーマンアイリス

- ドイツアヤメ
- アヤメ科
- 開花期 5月

〈性質〉

風薫る5月に咲き誇る多彩な花色は「虹の花」にもたとえられ、アヤメ属の日本の代表がハナショウブとすれば、欧米でそれに相当するものがジャーマンアイリスです。このジャーマンアイリスは欧米の冷涼な乾燥地で改良されてきたために日本の高温多湿な気候がやや苦手です。

〈栽培〉

植え付けは6月から9月までできますが、梅雨期を避けて秋に行うのが安全です。場所は、半日以上日が当たり、通風と排水のよい所を選び、葉を切りつめた株を株間30cmくらいとり、根茎の背部が地表に出るように浅植えします。植え付け後数日間だけ灌水をし、それ以後は乾いても行いません。

無肥料でも育ちますが、基肥として骨粉と硫酸カリだけを施すようにします。また、弱アルカリ性の土質を好むので消石灰なども混入します。

2年目からはマグアンプKなどの遅効性の化成肥料や骨粉、草木灰を施します。

ジャーマンアイリスは植えて2～3年でいや地といって微量要素欠乏症状などを起こし生育が悪くなったり、花つきが悪くなるので2年に1度くらいは花の後に掘り上げて株分けをし、できれば3～4年で新しい場所に移すようにしてやりたいものです。

〈病虫害〉

葉がつけ根から突然倒れ、根茎がどろどろに腐る軟腐病や葉の元がゆでたようになって腐りだしてやがて褐色のアワ粒様の菌核が見られ、周辺にクモの巣状に白い菌糸がはびこる白絹病などが発生します。前者には銅水和剤がダコニールの病部への塗布、後者にはPCNB剤の灌注などがありますが、どちらにしても古い葉や雑草を除き、いつも根元が清潔で風通しがよいようにしておくことが病気予防上大切です。害虫ではアブラムシやネキリムシ、ヨトウムシなどがつきやすいので、スミチオンやオルトランを定期的に散布します。



ツワブキ

- トウゴ タクゴ
- キク科
- 開花期 10～3月

〈性質〉

葉に光沢があってフキの葉に似ていることから、艶葉落^{つやはぶき}といわれ、それが転訛してツワブキとなったとされている常緑の観葉植物です。東北地方の中部以南に分布していて、古くから庭園の下草や根締めとして栽植されてきました。俳句の季語はサザンカとともに初冬の花としてよく詠まれています。

〈栽培〉

半日陰を好み、夏の直射日光が当たらない場所で腐植質が多く水はけのよい用土を選んで植え付けます。肥料は少な目の方がよく、遅効性の肥料を施します。

植え付け期は、春と秋に葉をつけた根茎をていねいに株分けして植え、4～5年に1度株分けをします。

〈品種〉

葉に黄金色の斑点のあるキンモンツワブキや葉縁が波状のシシバツワブキのほか、白斑点や黄斑点のものなど多くの園芸品種があります。

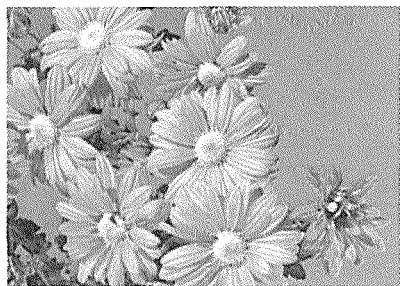
〈楽しみ方〉

ツワブキは古くから食用として利用されています。若い葉柄をキャラブキにしたり、乾燥して保存するほか、葉をあぶったりもんだりしたものがはれものや湿疹などの貼り薬として用いられています。

また、庭植え、花壇植え、あるいは切花用として、秋から初冬にかけて純黄の花と独特の光沢ある葉で親まれています。

＊花と家紋

主要な紋章の数は約300種といわれ、花の美しさや形のおもしろさが好まれたものなど、植物を図案化したものが最も多い。雑草としてのカタバミ、オモダカ、イタドリ、野草のセリ、ナズナ、ゴギョウ、また、スズナ、スズシロなども由緒ある家紋とされています。



シュウメイギク

- キブネギク
- キンボウゲ科
- 開花期 8～10月

〈性 質〉

日本原産の植物に思われがちですが、古く中国から渡来し、日本で野生化したもので、高さ50～80cmくらいの耐寒性多年草です。別名のキブネギクといわれるのは、京都府貴船山に多くみられたところからで、本州、四国、九州の山野、特に人里に近い郊外で農家やお寺の石垣などに自生しています。

性質はたいへん強く、やや湿った微酸性の土地の半日陰を好むが、あまり場所を選ばずよく生育しています。近年は一般の園芸鉢植えとして人気があり広く普及するようになりました。なお花卉のように見えるのは実はがく片です。

〈栽 培〉

一般的には、庭などに植えられていますが、半日陰のやや湿気の多い場所で、腐植の多い土地に適し、数年は株分けせずに栽培します。交配種は、夏に十分な灌水をすれば日当たりのよい場所でも作れます。

鉢植えの場合は、根の成長がとても活発なので、できるだけ大きな鉢に、赤玉土4、軽石4、腐葉土2など有機質を多く含んだ用土で植えます。

肥料は少なめがよく、植え付け時に緩効性の化成肥料(リン酸分の高い)を施し、春に油かすと骨粉などを追肥します。

株分けは、桜(染井吉野)が咲いたら、植え替えも兼ねて行います。また、露地植えの場合は地下茎が長く伸びて、思わぬところから新芽を出すことがあり、これを株分けする方法が簡単で確実です。

〈病 害 虫〉

害虫による葉の食害がよく見られます。新葉が出てから夏場にかけて定期的にマラソンなどを散布して下さい。また、シュウメイギクは冬期も葉を残して越冬しますが、融雪直後に庭木などに散布する石灰硫黄合剤をシュウメイギクにも併せて散布してやります。



ナ デ シ コ

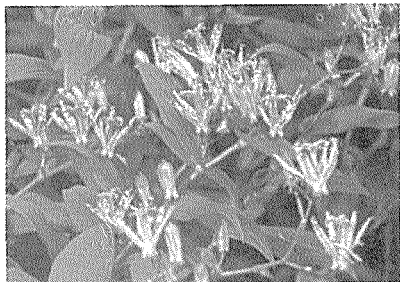
- ナデシコ科
- 開花期 5～10月

〈種類・性質〉

ナデシコは本来、日本の山野に自生するカワラナデシコ(ヤマトナデシコとも言う。)をさす名でした。セキチク(カラナデシコともいう。)が中国から渡来すると栽培種に名をとられてしまいました。江戸時代中期の園芸ブームの折、セキチクの四季咲き特性のものとしてトコナツ(常夏)が作出されました。また、セキチクとカワラナデシコの雑種をもとに伊勢松阪に住んだ紀州藩士^{つぐまつえいじ}継松栄二(1803～66)はイセナデシコ(ゴショナデシコともいう。)を作出しました。切花によく用いられるビジョナデシコ(ヒゲナデシコともいう。)は明治20年にヨーロッパから渡来した新参者です。花壇用ナデシコとしてタキイ種苗が育成した「テルスター」はビジョナデシコとセキチクの種間雑種F1です。タツタナデシコ(トコナデシコともいう。)も明治末にヨーロッパから渡来したもので、苗が長持ちするので石垣などに垂らすように植えてある姿をよく見かけます。

〈栽培〉

宿根ナデシコの各品種は、日本、中国、ヨーロッパの温帯に分布する野生種をもとに改良されたもので、気候によく合って丈夫なものです。繁殖は実生、挿し芽、株分けなどの方法があります。実生の場合、播種用土は赤玉土、鹿沼土の細粒でよく、育苗箱や5号平鉢を用いて2～3cm間隔にすじまきします。本葉4枚になったら移植し、株間を拡げハイポネックス2,000倍液を与えます。葉長7～8cmになったら8cmポットに鉢上げし、定植するまで株を養成します。春播きは90～100日で開花しますが、秋播きでは翌年の5月でないと花が咲きません。挿し芽用土はバーミキュライトの単用でよく、充実した側芽を切り取って水上げした後、発根ホルモンを切口に付けて挿し、湿度の保てる涼しい場所で管理します。20～30日で8cmポットに鉢上げし、定植まで養成します。肥料はI B化成S-1号がよく、1株につき3個ずつ月1回施してやります。アブラムシが付きやすいのでオルトラン粒剤で防除します。



ホ ト ト ギ ス

- ユリ科
- 開花期 7～10月(品種により花期は異なり、同一種の開花期間は20～30日)

〈種類・性質〉

ホトトギス属植物は東アジア～北インドに約20種が分布し、日本には12種あります。花は白地に紫色の斑点があって上向きに咲くホトトギス、ヤマホトトギス、ヤマジノホトトギス、セトウチホトトギス、花が黄色で紫褐色の斑点があって上向きに咲くタマガワホトトギス、キバナノツキヌキホトトギス、タカクマホトトギス、キバナホトトギス、チャボホトトギス、花が黄色の鐘形で下向きに咲くジョウロウホトトギス(別名トサジョウロウホトトギス)、キイジョウロウホトトギス、サガミジョウロウホトトギス(本種の地域変異種にスルガジョウロウホトトギス、カイジョウロウホトトギスがあります。)^{しのかめ}の3群に大別できます。育種改良は昭和初年より始まり、鈴木吉五郎氏がタイワンホトトギスとホトトギスの交配で作出した「^{へきうん}東雲」、「^{あまがわ}碧雲」が有名です。最近の交配種ではタイワンホトトギスと白花ホトトギスの組合せによる「^{とうげん}桃源」、「^{ふじむすめ}藤娘」、「^{せいりゆう}青龍」、キバナノツキヌキホトトギスと白花ホトトギスの組合せによる「^{あまがわ}天の川」などがあります。

〈栽 培〉

地植えにはホトトギス(濃紫色花のもの、純白花のものなど多数の品種があります。)、タイワンホトトギスとその交配種、タマガワホトトギスなど茎が直立して高さ40～80cmとなるものが適します。腐熟堆肥を20ℓ/㎡ほどすき込んでフカフカの植え床を作り、1芽ずつに株分けして縦横とも10cm間隔に植え込みます。鉢植えには茎から5～30cmの高さとなる矮性種、キバナノツキヌキホトトギス、ジョウロウホトトギス類といった茎が長く下垂するものが適します。用土は硬質鹿沼土、赤玉土の米粒～大豆粒大のものを混合して用い、矮性種は平鉢、下垂種は腰高鉢に植え込みます。肥料はI B化成S-1号を1芽に付き1個、月1回ずつ施します。ヨトウムシの食害があるのでオルトラン粒剤で予防します。



ハナショウブ

- アヤメ科
- 開花期 5～6月

〈種類・性質〉

ハナショウブの原産地は日本、朝鮮半島、中国北部、シベリアの他、北アメリカやヨーロッパ東部といわれ、日本では原種のノハナショウブが信州、東北、北海道に多く自生しています。

伝えられるところによると江戸時代の中ごろ、みちのくの安積の沼に花かつみという美しい花が自生していたのを改良したのが今日のハナショウブであるといわれています。現在では1,000以上の品種がありますが、便宜上これらを江戸、肥後、伊勢の3つの系統に分けて扱っています。その他、アメリカなどでは、江戸系と肥後系の品種の一部を親として新品種が育成され、外国系とよばれています。

〈栽培〉

ハナショウブは日当たりと排水がよく、適度の湿り気がある場所を好む多年草ですが、同じ場所で長年作り続けるとしだいに生育が悪くなる傾向があります。いわゆる連作障害といわれるものです。

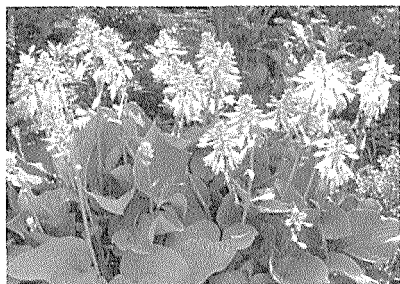
株分け、植え付けは開花後の6中～7月上旬に行います。株分けは2～4年に1回（鉢植えは2年に1回）、この株分けや植え替えをしないと芽ばかり増えて花が咲かなくなります。植え付けは浅く植えるのがコツです。

肥料は、基肥は入れずに植え付け後20日ぐらいたって根つき新葉が伸び出すころに乾燥肥料を月1回の割で与えます。また、敷ワラをなるべく厚く敷きつめると乾燥防止や夏の地温の上昇を抑え、雑草も少なくなるので必ず行います。

春先に発生するメイチュウ（ズイムシ）はオルトラン粒剤で予防します。

〈参考〉

アヤメ類の区別の仕方として、葉の中央に太い隆起のあるのがハナショウブ、隆起のないのがアヤメ、カキツバタ、イチハツ。葉の幅がせまく白粉をおびていればアヤメ。花の中央に縦に黄色の斑があればカキツバタ。さらに葉の幅が広く、花びらにとさか状の突起があればイチハツです。



ギボウシ

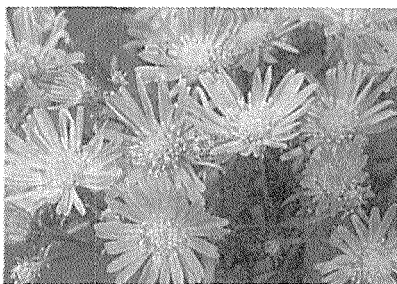
- ユリ科
- 開花期 5～10月(品種により花期は異なり、同一種の開花期間は20～30日)

〈種類・性質〉

ギボウシ属植物は日本、朝鮮、中国、ソ連沿海に38種が分布しています。江戸時代初めから庭木の根じめとして植栽されて来て、オランダ船でヨーロッパへ渡り、さらにアメリカ合衆国で種間交雑が試みられ現在では約1,000品数もあります。観葉物としては、大形(葉長30～60cm)のオオバギボウシ、トウギボウシ、トクダマ、中形(葉長15～40cm)のウナズギボウシ、ムラサギギボウシ、カンザシギボウシ、イワギボウシ、小形(葉長5～20cm)のコバギボウシ、ミズギボウシ、タチギボウシ、ヒメイワギボウシ、オトメギボウシ、ウバタケギボウシがあります。葉変わりが多く、覆輪、中透、縞などの斑入り品種が数多くあり、青葉であってもブルーを帯びるもの、粉白のもの、^{ちぢ}燃れ葉のもの、^{こうりゅうば}甲竜葉のものなどがあって、活花の葉物、観葉鉢物、グランドカバー等多用途に使うことができます。花物としては、早生で5月下旬～7月下旬咲きのキヨスミギボウシ、中生で7月中旬～8月下旬咲きのサクハナギボウシ、晩生で8月下旬～10月上旬咲きのハチジョウギボウシがあり、夜咲きの1日花ですが花の芳香が素晴らしいのがマルバタマノカンザシです。花色は淡紫がほとんどですが濃紫、純白の品種があります。

〈栽 培〉

鉢植えの用土は、赤玉土、硬質鹿沼土の米粒～大豆粒大のものを混合したものとし、株の大きさに合わせた鉢に植え込みます。地植えの場合は腐葉土を10ℓ/㎡程すき込んで平畦を作り植え込みます。肥料は5月と9月の2回、油粕と骨粉をねり合わせたものを3号鉢なら5g(2cm角の塊1ヶ)を、5号鉢なら20g、地植えでは200～300gを与えます。病害虫は春のアブラムシ、秋のネマトーダがあり、前者にはダイアジノン粒剤、後者にはバイデト粒剤を施して防除します。また、冬枯れた葉を取り除いて葉枯被害を予防します。



宿根アスター

- キク科
- 開花期 8～10月

〈種類・性質〉

宿根アスターは、添え花として重要な位置をしめてきたクジャクソウ(孔雀草)、古くから、一般家庭の庭先きに見られるユウゼンギク(友禅菊)、鉢物用としても人気の高いミケルマスデージー、最近話題のソリダスター(キリン草とアスターの交配種)と極めて多種です。これらは、開花期、花色、草丈そして草姿など、千差万別ですが、多くは、スプレータイプであり、小花が花径の頂点に多く開花します。耐寒性も強く、作りやすいので、今後、人気の出る花です。基本的には、短日植物であり、8～10月に開花します。

〈栽培〉

通常、4～5月定植としますが、ミケルマスデージーは秋植えが適します。本来、生育旺盛な宿根草であって、吸肥力は強く、とくに土地を選ばないものです。しかし、乾燥しすぎると、開花期に茎葉が黄緑色になるので注意します。

好適な土壌酸土は6～7ですが、石灰の与えすぎは禁物です。また、多肥栽培は、側枝の伸びすぎ、軟弱徒長となります。基肥として、化成肥料を60～100 g / m²程度施します。クジャクソウなどは、6月中旬に、地際部3 cmほど残すように刈り込み、生育をそろえ、強勢な枝を出させます。刈込み後、化成肥料を20～30 g / m²施すと効果的です。

〈病虫害〉

病虫害の発生が少ないことが特徴ともなっています。しかし、ウドンコ病、アブラムシ、ダニの発生がみられるので、早めに、殺菌剤、殺虫剤で防除します。



ミヤコワスレ



クレマチス



アメリカフヨウ



ハナショウブ



ジャーマンアイリス



シラン



アネモネ



クロッカス

スカシユリ





チューリップ



スイセン



グラジオラス



ダリア



ヒメシャガ



サギソウ



イカリソウ



フクジュソウ



ミヤマオダマキ

3. 球根草花

球根草花とは多年草のうちで茎、葉、根などが球状に肥大し、そこに翌年の生育のための養分と新しい芽を保持しているものです。一般に球根の形状と植え付け時期で、次のように分類します。

- ◇ 形状による分類：鱗茎、球茎、塊茎、地下茎、塊根、
- ◇ 植え付け時期による分類：春植え球根、夏植え球根、秋植え球根、

1. 植え付け、管理のポイント(共通的な)

- (1) 球根を選ぶ：大き目で硬く締まっている。病斑や傷がない、正しい品種。
- (2) 植え場所：日当たりがよい、耕土が深い、水排けがよい。
- (3) 畑づくり：植え付け10日ぐらい前に、予定の処に完熟堆肥 2 kg/m^2 、石灰 100 g/m^2 を与え、 $20 \sim 30 \text{ cm}$ の深さに耕す。数日後に化成肥料(N・P・K各 $10 \sim 12\%$) 100 g/m^2 を与えよく耕す。
- (4) 植え付け：ダリア、カンナ等大株になるものは後述しますが、チューリップ、ヒヤシンス、グラジオラスなど鱗茎、球茎等は、植え付けの距離、間隔を球根の直径の約2倍とし、球根の高さの約3倍覆土をします。
- (5) 追肥：春植え球根では、大株で花期の長いダリア、カンナなどは月1回化成肥料 $30 \sim 40 \text{ g/株}$ 、その他の中、小球の種類は茎葉にかけないようにして、開花前1～2回、花後1回 $20 \sim 30 \text{ g/m}^2$ 、秋植球根は雪どけ直後1回 30 g/m^2 (夏植球根もこれに準ずる)

2. 球根の掘取り

- (1) 寒さに弱く必ず掘り上げて $7 \sim 8^\circ \text{C}$ ぐらいで貯蔵するもの(ダリア、カンナなど)
- (2) 分球数が多く、毎年掘り取って植え替えるもの(チューリップ、グラジオラス、球根アイリスなど)
- (3) 分球と肥大が緩やかで、3～4年はそのまま栽培できるもの(スイセン、ヒヤシンス、ムスカリ、スノーフレークなど)



カ ン ナ

- ハナカンナ
- カンナ科
- 春植え球根
- 開花期 6～11月

〈種 類〉

カンナの野生種は熱帯アメリカ、アフリカ、熱帯アジアなどに分布し、これをもとにして園芸種が作出されました。高性種(草丈120cm以上)中性種(80cm前後)矮性種(60cm前後)や、緑葉種、赤葉種、斑入葉種などに分類されています。代表的品種としては、アメリカン・レッドクロス(赤花)アンアーファン(黄に赤小斑点)モンテイジン(紅赤、赤葉)タリスマン(黄に赤目)ホルトデイコック(朱紅色に中心部黄)などが知られています。

〈性 質〉

球根は地下茎の肥大したもので、枝分かれして広がりその先端から新芽を伸ばして生育し、次つぎに花をつけます。球根の耐寒性は弱い。

〈栽培・管理〉

- (1) 球根は傷のあるものや芽の欠けているものをさけて、大きくてみずみずしいものを選び、4月下旬から5月のうちに植えつけてやります。
- (2) 畑づくりは総論に準じます。球根の植えつけ間隔は60～70cmとし、図のように株分けした球根を、12～13cmの深さに穴を掘って平らに植えつけます。

追肥は総論に準じて行います。

- (3) 紋枯れ病の発生に注意し、病徴を見たらバシタック水和剤を散布し、葉にモザイク斑が現われる株はすぐに抜き捨てます。アブラムシ、ヨトウムシ、ズイムシなどにはスミチオンを散布します。

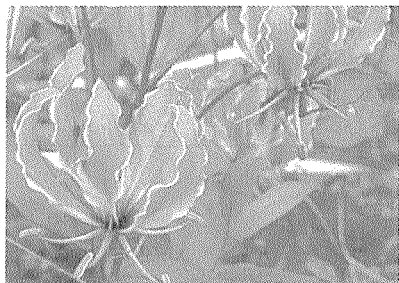
〈球根の掘り取りと貯蔵〉

晩秋になって薄霜に1～2度あったら茎を刈り取り、晴天の日に掘りあげます。2～3日乾燥してから土を落とし、発泡スチロールなどの箱に乾燥モミガラを十分に入れ、その中に埋め込みます。

冬の間8～9℃ぐらいのところに貯蔵して春を待ちます。

カンナの株分け





グロリオサ

- キツネユリ、ユリグルマ
- ユリ科
- 春植え球根
- 開花期 初夏から秋にかけて

〈種 類〉

グロリオサ・ロスチャイルディアナ(アフリカのウガンダ原産)は鮮橙紅色大花で花期も長く栽培も容易で、この属の代表として最も多く作られています。このほかにG・カーソニー(中央アフリカ原産)G・ルーテア、G・シンプレックス(熱帯アメリカ原産)G・スベルバ(熱帯アフリカ、アジア原産)などがあります。

〈性 質〉

球根は塊茎で、地上部は珍しく半つる性です。熱帯性のもので耐寒性が弱く、球根の越冬では保温に注意します。花は花卉の基部が細く切り込み後方に反転してユリの花を連想させます。球根は長さ5cm以上あれば開花し、大球では腐敗し易くなるので、5～15cmのものが適切とされています。

〈栽培・管理〉

- (1) 寒さを嫌うので、植えつけは霜の恐れがなくなってから行います。
- (2) 露地植えもできますが、一般に栽培管理の点から7号程度の鉢に2球植えます。植え終わったら直ぐに80cmぐらいの支柱をたてておきます。
- (3) 根は好気性で地表近くを伸び、乾燥害の心配もあるので、田土や赤土に腐葉土を容量の30～40%混合し、地表にも腐葉土や水苔を置くと効果的です。
- (4) 施肥は生育期間が長いので、効果の長い有機質肥料(練り肥えや乾燥肥料と言われるものであれば一層よい)や園芸用中粒の緩効性化成肥料がよい。

〈球根の保存〉

秋になって茎葉が黄色くなってきたら灌水をやめ、屋根下に入れて鉢土ともに乾燥させます。茎葉が枯れたらこれを切り取り、鉢共に3～5℃に保てる場所に春まで貯蔵します。また、露地植えや鉢植えでも量の多い場合は、地上部が枯れたら球根を傷つけないように掘り上げ7～10日間陰干ししてから、モミガラやオガクズと共に箱詰めにして3～5℃で春まで貯蔵します。

〈楽しみ方〉

鉢植えにしてのアンドン仕立て、鉢をフェンス沿いにしてこれにからませる。花壇一方にスクリーン状に仕立てるなど種々に利用する。



ダ リ ア

- テンジクボタン
- キク科
- 春植え球根
- 開花期 6～11月

〈種 類〉

ダリア属は、メキシコ、グアテマラの山地に12～15種が分布し、今日栽培されているものは、多くの原種の交雑で生まれたものです。一般に花径の大きさに巨輪(26cm以上)大輪(20～26cm)中輪(10～20cm)小輪(3～10cm)極小輪(3cm以下)などと呼び、また、花形によって、シングル咲き、オーキッド咲き、アネモネ咲き、コラレット咲き、ピオニー咲き、カクタス咲き、デコラティブ咲き、ボンボン咲きなどにも分類します。

〈性 質〉

根が栄養を蓄えて塊根と呼ばれる球根を形成したもので、塊根上部の茎のつけ根(クラウンと呼ぶ)に芽が集まっています。四季咲性で生長しながら次つぎに開花するが寒さに弱く、冬は茎葉は枯れ、球根も凍って腐ります。

〈栽培・管理〉

- (1) 総論に準じて畑をつくり、降霜がなくなれば、芽を付けて分割した球根を1球宛て、大輪種は90cm、中・小輪・ボンボン咲き種は60cm間隔に、12～13cmの深さで横にねかせて植え、芽の近くにしっかりした支柱を立てます。
- (2) 追肥は総論に準じて行います。
- (3) 整枝は、ボンボン咲きや矮性種以外は、茎が伸びたら、下から3節位残して上部の脇芽を全部かき取ります。すると1番花が咲く頃下から3～4本の花茎が伸びてきます。これをまたその基部2～3節残して脇芽をかき取ります。なお、切花をとるときは、その枝の下方2節ぐらいを残します。このようにすると、下方から必ず花茎が伸びて花数を確保することができます。
- (4) 葉がちぢれ草丈が伸びないウイルス病株は抜き捨てます。また、アブラムシ、シンクイムシはスミチオン乳剤の散布やカルホス粒剤の土壌施用を行います。

〈球根の掘り取りと貯蔵〉

晩秋、薄霜に合ったら茎葉を地際から刈り取り晴天の日に球根を掘り上げます。土を払い、株の胴乾燥モミガラと一緒に7～8℃を維持できる場所(屋内、いも穴など)に翌春まで貯蔵しておきます。



リ コ リ ス

- ヒガンバナ科
- 夏植球根
- 開花期 夏から秋にかけて

〈種 類〉

リコリスはヒガンバナの仲間で、日本・中国の原産で10数種が分布し、そのうち6種はわが国に野生しています。開花期の順に代表的なものをあげると次のようです。キツネノカミソリ(7月下旬～8月上旬開花)ナツズイセン(8月上旬)リコリス・インカルナータ(8月中旬) L・スプレングリ(9月上旬)シロバナマンジュシャゲ(9月上旬)ヒガンバナ(9月中旬) L・アウレア(10月上～中旬開花、ショウキラン、ショウキズイセンの別名あり)

このほか園芸用交配種も数多く育成されています。

〈性 質〉

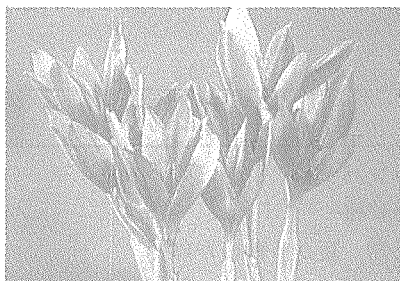
6花卉で強く反り返るものと、あまり反り返らないものがあり、基部が漏斗状に着いています。葉の出る時期は開花と同じか直後のものと、秋に花だけ咲いて翌春に出葉するものがあります。前者は耐寒性の弱いものがあります。また、その球根は葉の基部に栄養を蓄えた鱗茎です。

〈栽培・管理〉

- (1) 植えつけ場所は特に選ばないが、排水よく、開花期には強光、乾燥を避け、出葉期には日照と適湿が必要なので、落葉樹下などを選びます。
- (2) 植えつけは開花前の葉が枯れているうちがよい。浅植えでは球根の肥大が劣って分球が多くなり、開花も悪くなるので、球根の高さ程度の覆土をしてやります。
- (3) 出葉時期に少チッソの化成肥料($N_{10}-P_{15}-K_{15}$ のような)を、 m^2 当たり100g程度葉に触れないように与えます。チッソ肥料が多いと球根腐敗が多発するおそれがあります。
- (4) 分球と植え替えは2～3年に1度行います。球根は掘り上げてでもできるだけ速やかに植えつけて、これを乾燥させないように努めます。

〈楽しみ方〉

リコリスの仲間は花が美しく花茎も長いので、花壇や植込みには好適です。後方から前方へと開花期の順に数種類を植え込んでおけば、その美しさを長期間にわたって楽しむことができます。



コ ル チ カ ム

- イヌサフラン
- ユリ科
- 夏植球根
- 開花期 8月下旬～9月

〈種 類〉

約60種がヨーロッパから中東、とくに地中海沿岸に分布しています。春、秋、冬咲きの3系がありますが、一般にコルチカムとして出回っているのは、次のような秋咲きのものです。コルチカム・オートムナーレ(ヨーロッパから北アフリカ原産)C・スベシオースム(カフカス、地中海東部沿岸、トルコ原産)、また、唯一の黄花種としてのC・ルテウム(ヒマラヤ原産)などがあります。なお、市販には幾つかの交配種があり、特に八重咲きのウオーターリリーが有名です。

〈性 質〉

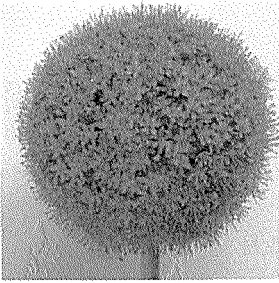
球根は茎の一部が変化して栄養を蓄えた球茎です。花は桃紫から白まで、中には唯一黄色種もあります。他の球根類と異なって、球根を掘り上げて乾燥したままでも秋には開花するので「土も、水も不要、室内で開花」と評判です。花後球根を植えておくと、翌春オモトのような大きな葉を出します。

〈栽培・管理〉

- (1) 花壇作りでは、その場所の選定や畑づくりは総論に準じて行います。
- (2) 植えつけは、8月下旬～9月上旬頃、球根の頂部から白く太い芽が見え始めたら、植えつけの間隔を球根の直径の2倍くらいとし、その上に10cmぐらいの覆土をしてやります。
- (3) 翌春大きな葉だけを出して生育しますが、病害虫の心配はほとんどありません。
- (4) 葉が黄色くなってきたら、晴れた日を選んで球根を掘り取ります。新球根は通常2個着いています。土をよく落として、球根の首の部分から2～3cm上方で葉を切り落とし、屋根下の日陰で通風乾燥して秋まで貯蔵します。

〈楽しみ方〉

室内での「土なし、水なし、球根のままでの開花」も趣のあるものですが、露地の自然光のもとで鮮やかな桃紫色の大花を開く花壇づくりがコルチカムの花の良さを最高に現すものです。



アリウム

- ユリ科
- 秋植え球根
- 開花期 4～5月

〈種類〉

アリウム属は北半球だけに約300種が分布し、大球性と小球性に分けられます。大球性ではフットボールのように大きく紫色の花房のアリウム・ギガンチューム、やや小さいA・ローゼンバックナム、葉が美しく矮性のA・カラタビエンセ、線香花火のようなA・シューベルターなど、小球性ではA・モーリーは黄色い花でニラ臭く、A・スファエロセファラムは和名で丹頂と呼ばれています。

〈性質〉

葉が変化して栄養を蓄える鱗茎と呼ばれる球根で、大小はあるがいずれも耐寒性の強いものです。

〈栽培・管理〉

- (1) 植えつけ場所の選定や畑づくりは総論に準じて行います。
- (2) 10月上旬～11月初旬に植えつけます。植付け間隔は、大球性のギガンチューム、やローゼンバックナム、シューベルターなどでは40cm、その他は20cm位とし、10～15cmの覆土をしてやります。また、小球性では球根の直径の3倍位の間隔でその上に球高の2倍程度の覆土を行います。
- (3) 病害虫の心配はほとんどありませんが、茎葉の葉縁が濃淡モザイク状になるウイルス病株は、伝染源となるので見つけ次第抜き捨てます。
- (4) 花を眺め終えたら花首から摘んで球根の肥大を図ります。刃物を用いるとウイルス病が伝染するので、手で折りとってやります。シューベルターは種を採って繁殖するので摘花しません。
- (5) 葉が枯れたら掘り上げて日陰で通風乾燥し、土を払い茎葉を除いて、秋の植えつけ時期まで物置きなどで乾燥貯蔵しておきます。

〈楽しみ方〉

花色の相違、草丈の高・中・低の変化など花壇用としておもしろく、また、矮性で葉に趣のあるカラタビエンセは、鉢植えやプランター植えに適し、スファエロセファラム(丹頂)は曲作りが楽しい。高性大輪のアフラチュネンセは乾燥花としても優れています。



シ ラ ー

- ユリ科
- 秋植え球根
- 開花期 4～5月

〈種 類〉

園芸上シラーと呼ばれているものは、スキラ属とエンディミオン属を含んだもので、欧州、アフリカ、アジアの温帯に80～90種が分布しています。

これらのうち代表的なものは、シラー・シビリカ(鮮紫、薄紫や白もある、鐘形、小花、草丈約10cm) S・チュベルゲニアナ(水色に青の中筋) S・ベルビアナ(濃紫、白色、小花数十輪が上向き傘状に着生、草丈約30cm) S・ヒアキントイデス(青紫、草丈50cm) S・ノンスクリプタ(青紫色、鐘形、草丈50cm) S・ヒスパニカ(別名S・カンパニュラータ、青、白、ピンク、鐘形、草丈40cm)などがあります。

〈性 質〉

いずれも耐寒性の強い球根(鱗茎)で、数年間は植放しに耐えます。S・ベルビアナ、S・ヒスパニカなど特に強健で栽培容易です。

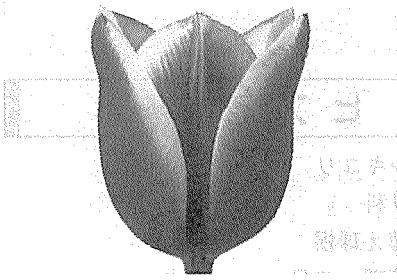
〈栽培・管理〉

- (1) 植え場所の選定、畑づくりなどは総論に準じて行います。
- (2) 植えつけ期は10月、大球で15cm間隔、中球10～12cm間隔、小球は8～10cm間隔に植え、覆土は球根の高さの2～3倍とします。
- (3) 数年間は植放しとするので、毎年雪どけ直後に化成肥料(3要素各12～15%のもの)50～70g/m²を、植物体に触れないように施してやります。
- (4) 病害虫の心配はほとんどありません。
- (5) 数年に1回、葉が黄ばみかけた頃に球根を掘り上げ、茎葉を除いて屋根下で乾燥を行い、秋期植込みまで貯蔵しておきます。

〈楽しみ方〉

S・シビリカ種は小形で石組みの庭や鉢栽培に適し、S・ヒスパニカ種は青、ピンク、白など花色が多く花立ちもよいので、リボン花壇や花壇の縁取りなどに好適です。

また、S・ベルビアナ種の鉢栽培や、S・ヒスパニカ種のプランター植えもまた楽しいものです。



チューリップ

- ユリ科
- 秋植え球根
- 開花期 4月上旬～5月上旬

〈種 類〉

チューリップ属は、おもに地中海東部沿岸から中央アジアにかけて約150種ほどが分布しています。園芸チューリップは約400年前に上記の種の一部がヨーロッパに伝えられ、主としてオランダで改良されて今日に至ったものです。

現在では、開花期、花形、草姿などで4大別し、それに属する15の小グループに分類しています。そしてこれに属する品種数は、オランダの最近のリストによれば約3,000に達しています。

〈性 質〉

球根は葉が変形してできた耐寒性の秋植えの鱗茎です。毎年、茎葉が枯死して球根を掘り取る頃には、数個の新球根に更新されています。

〈栽培・管理〉

- (1) 植えつける球根は、傷や病斑がなく、大きくてしっかりと重いものを選びます。なお、外側の栗色の皮がはがれないで着いていることが望ましい。
- (2) 植えつけ場所の選定、畑づくり、植えつけの要領、施肥(植えつけどき、追肥)などは総論に準じて行います。
- (3) 植えつけは10月～11月上旬が適期、花を見るだけが目的の場合は12月までは可能です。
- (4) 雪どけ直後3要素各15%位の化成肥料30 g/m²を株間に施すと効果的です。
- (5) 葉や花に油浸状の小斑点を生じ、やがて拡大して茎葉を枯らし、球根も犯す褐色斑点病(ボトリチス病)防除のために、適時マンネブダイセン600倍液を散布します。また、生育中茎葉が紫色になってくる球根腐敗病株や、花色が濃淡モザイク状になるウイルス病株は見つけ次第抜き捨てます。
- (6) 茎葉が枯れてきて球根外皮の1/3～1/2が栗色になったら掘り取ります。
- (7) 球根掘取後、茎葉、古皮等を取り除き、十分な通風乾燥状態で秋の植えつけ時期まで貯蔵しておきます。なお、この期間中に、腐敗その他の障害球を取り除きます。



ヒアシンス

- ニシキユリ
- ユリ科
- 秋植え球根
- 開花期 4月

〈種 類〉

ヒアシンスは地中海沿岸と南アフリカに約30種分布していますが、現在の園芸品種は、上記のうちヒアシンス・オリエンタリスがオランダに導入されて改良されたものが主で、ダッチヒアシンスと呼ばれるものです。一方フランスに入ったものはローマン・ヒアシンスと呼ばれ甚だ見劣りし、また、シリア原産のH・アズレウムは極小形でロックガーデンなどに用いられます。

〈性 質〉

耐寒性の秋植え球根で、葉の基部が肥厚して球根となった鱗茎です。

ローマン系はよく分球するがダッチ系は自然分球が困難で、人工繁殖処理を行います。また、ダッチ系は球根が大きく花穂長大、花色が豊富です。

〈栽培・管理〉

- (1) 使用する球根は、傷や病斑がなくてなるべく根盤部が小さく正円に近い形をしているもの、大球でしっとりと重みを感じるものを選びます。
- (2) 植え場所の選定、畑づくりは総論に準じます。
- (3) 植えつけは9月下旬～10月中旬、植えつけ間隔は球根の直径の2～3倍ぐらいとし、これに、球根の高さの2～3倍の覆土をしてやります。
- (4) 花の盛りが過ぎたら花穂をしごくように摘花して捨てます。
- (5) 6月半ば葉の2/3位が黄変して、地際で簡単に折れるようになったら球根を掘り上げ、日陰で十分乾燥します。球根の貯蔵中に黄腐病球の選別に努めます。

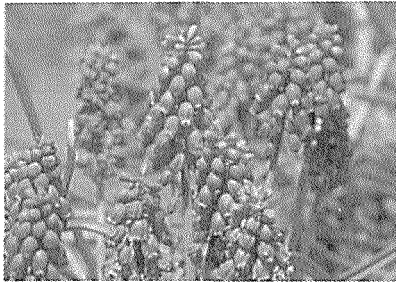
〈繁 殖〉

自然分球しないダッチヒアシンスは、7月上～中旬に人工繁殖処理(ナイフで球根底部から球高の2/3まで8分割するノッチング法や、球底の発根部の外周を一周し球根の中心芽を含めて円錐状にくり抜くスクーピング法など)を行い、秋の植えつけ期まで、傷口を上にして乾燥貯蔵を行います。

〈楽しみ方〉

花色の鮮やかさと草出来のそろいの良さは抜群で、模様花壇、リボン花壇などに好適、また、鉢植え、プランター植えにも良い。

最も水栽培に適し水栽グラスを用いたり水盤植えにしたり適応範囲は広い。



ムスカリ

- ユリ科
- 秋植え球根
- 開花期 4月

〈種 類〉

ムスカリは地中海沿岸地域から中近東にかけて約40種が分布しています。代表的なものには、ムスカリ・ボトリオイデス(ブドウムスカリとも言われ、青紫色の花、草丈約25cm、この変種で白花のM・ボトリオイデス・アルバも美しい)M・アルメニアカム(最も代表的なムスカリ、花色コバルトブルー、草丈約25cm、変種に八重咲きのブルー・スパイク、矮性種のカンタブがある)M・コモサム・ブルモーサム(ハネムスカリとも呼ばれ、藤紫色の羽毛状の花穂がユニークである)その他M・ラチフォリウム、M・モスカーツム、M・ネグレクトムなどがあります。

〈性 質〉

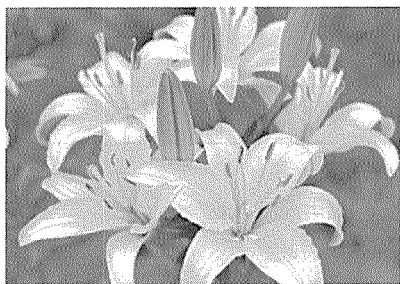
耐寒性の球根(鱗茎)で、植えつけるとすぐに葉を出してくる性質があります。繁殖は球根につく子球によって行います。

〈栽培・管理〉

- (1) 使用球根は、傷や病斑のあるものは避け、大きくて重いものを選びます。
- (2) 植え場所の選定や畑づくり、植えつけの要領や施肥などは総論に準じます。
掘り上げない年は融雪直後に化成肥料(3要素各12~15%のもの)50~70g/m²を、葉に触れないようにして施します。
- (3) 植えつけ時期は10~11月が適当、あまり早いと年内に葉が伸びすぎて、翌春の花壇が見苦しくなります。
- (4) 病害虫の心配はほとんどありませんが、連作ではネダニが発生するおそれがあります。
- (5) 草丈の低い花なので除草に努める必要があります。
- (6) 球根は毎年掘り上げる必要はなく、数年に1度、葉が黄ばんだ頃に掘り上げて日陰で乾燥し、秋の植付期まで貯蔵しておきます。

〈楽しみ方〉

鮮やかな青紫色で、他の種類の花色との組み合わせが面白く、また高性の花の下草として効果的、花壇の縁取り、リボン花壇等にも好適です。



ユリ

- ユリ科
- 秋植え球根
- 開花期 6～9月

〈種類〉

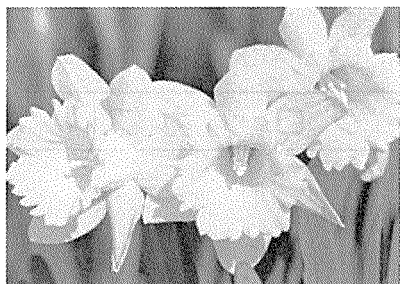
世界のユリ属は100種近くで、すべて北半球の亜熱帯から亜寒帯にかけて分布し、北米に25種、ヨーロッパに12種、アジアに59種あります。そしてその花形で、テッポウユリ系、ヤマユリ系、スカシユリ系、カノコユリ系の4つに分類しています。一方、ユリの品種改良は20世紀半ば以降急速に進み、英国王立園芸協会へ登録された園芸品種は2000を超え、これらは種間交雑が多く、アジアティック・ハイブリッド、オリエンタル・ハイブリッド、トランペット・ハイブリッドなどのグループに優れた品種が多く含まれています。

〈性質〉

葉の変形物で、幅が狭く厚い鱗片が瓦状に重なりあい、地中の短縮された茎に着いて球根(無皮鱗茎)を形成します。球根上部の地中の茎の節から栄養を吸収する上根を出し、また、その節に繁殖用の小球(木子)を着生する特異なもので、耐寒性の極めて強い球根です。

〈栽培・管理〉

- (1) 植えつけは10～11月上旬がよく、外皮のない球根なので、入手後できるだけ早く植えつけないと球根が消耗します。
- (2) 植え場所、畑づくりは総論に準じ、耕うんは深いほど(30cm位)よい。
- (3) 植えつけ間隔は大形種(球根の大きさ)で20cm、中形種15cm、小形種10cm程度とし、間隔と同程度の深さに覆土してやります。
- (4) 早春、葉が開かないうちに化成肥料(三要素各15%位)30g/m²を施して、軽く土寄せを行い、花が終ってからも同程度の追肥を行ってやります。
- (5) 葉がねじれたり、葉緑にモザイク状の濃淡が見られる株は、ウイルス病に犯されているので抜き捨てます。また、雨の後には早速とマンネブダイセン600倍液を散いて灰色カビ病の防除を行い、アブラムシを見つけたら、直ぐにスミチオン乳剤1,000倍を散布してやります。
- (6) 球根の掘り取りは、10～11月上旬なるべく次の植え場所を準備してから行いたいものです(無皮鱗茎は、掘り上げ後その儘では消耗が激しい)



スイセン

- ヒガンバナ科
- 秋植え球根
- 開花期 3～4月

〈種類〉

スイセン属は約30種で、その生れ故郷はヨーロッパとアジア(中国)にまたがっています。品種改良も大いに進んで1万数千種に達し、その花形、花色、草姿によって、ラッパ水仙群、大杯水仙群、小杯水仙群、八重咲き水仙群、トリアンドルス群、キクラミネウス群、ジョンキラ群、房咲き水仙群、ボエティカス群、原種および自然交雑群、スプリットコロナ群、以上に属さないもの、に分類され、これらに、それぞれ数多くの品種が所属している訳です。

〈性質〉

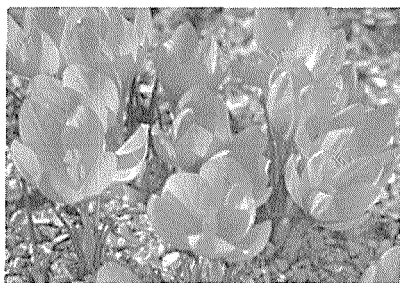
葉の基部が肥厚して球根(鱗茎)を形成するもので、分球性が高い。毎年掘りとり数年間には植え放しに耐え、分球、開花も順調、耐寒性は強い。

〈栽培・管理〉

- (1) 球根購入の際は、硬く締って重量感があり、傷や腐敗の無い無病株を選びます。また、1球1芽のものが大きく立派な花を咲かせます。
- (2) 植え場所、畑づくり、施肥などは総論によりますが、植え放しの場合は、雪どけ直後に化成肥料(3要素各15%程度)50～70g/m²を、株にかけないように施します。球根の植えつけ時期は9月末～10月中旬が適期です。
- (3) 3～4年毎に分球して植え直すのがよく、掘り上げは葉の1/3～1/2黄変したころに行い、数球宛て束ねてつり下げ、日陰で通風乾燥を行います。葉や根が完全に枯れたら取り脱し、植えつけ期まで屋内で乾燥貯蔵します。貯蔵中はときどき点検して、腐敗球など病球を取り除いてやります。

〈楽しみ方〉

- (1) 花形、花色、草姿などバラエティーに富み、品種数も多いので収集展示的栽培は興味を集め効果的でしょう。
- (2) 花壇用としての群植、庭の一隅やテラスの角、芝生の隅などに数株ずつまとめて小集落状に配し、自然風な味わいを楽しむのも趣きがあります。
- (3) 原種や矮性の種類をロックガーデン風に植栽するのもよく、また、各種、各品種を鉢、プランター、水栽培等種々工夫を凝らしてみたいものです。



クロッカス

- アヤメ科
- 秋植え球根
- 開花期 3～4月

〈種類〉

クロッカスは、おもに地中海沿岸からトルコにかけて約80種が分布し、開花期によって、春咲き系、秋咲き系、冬(寒)咲系に分類されていますが、園芸用として広く栽培されているのは春咲き系で、中でも品種改良が進み花色も豊富なダッチ・クロッカスと呼ばれるグループが代表的なものです。また、古くから知られるサフランは秋咲き系に属します。

〈性質〉

茎の変形して栄養を蓄えた球根(球茎)で耐寒性が強い。日照を好み、早春ほとんど葉を伸ばさずに開花し、花後に葉を伸ばします。

〈栽培・管理〉

- (1) 使用する球根は、花壇、庭植えは中球でよいが、水栽培には大球を用います。どの場合でも固く締まって重く、無傷、無病の球根を選びます。
- (2) 植えつけは10月中旬に、水栽培は10月中旬～11月上旬に始めます。
- (3) 植え場所はとくに日当たり(日溜りと言えるようなところでき麗に咲きそう)のよいところを選びます。畑づくり、施肥などは総論に準じ、植えつけ間隔は球根の直径の2～3倍、覆土は球根の高さの3倍ぐらいとします。
- (4) 球根はネズミの好物なので食害されないよう、注意が必要です。
- (5) 球根を腐らせる軟腐病、乾腐病の発生を抑えるためチッソ多用をさけ、病球の抜き捨てや、貯蔵の病球選別に努めます。
- (6) 葉が黄ばんだら球根を掘り上げ、干からびた母球と葉を除き、日陰で通風乾燥を図ります。子球(木子)が数多く着くので繁殖球として用います。

〈楽しみ方〉

花壇植えとしても用いるが、庭の一隅にビッシリと植え込んだり、庭石の基部や踏石の角に数球、あるいは芝生の中に点在させるのも趣きがあります。水栽培グラスによる栽培や、ワイングラス、果物皿などのガラス容器での水苔栽培も趣きがあります。

鉢栽培、水栽培などは初めから暖かい室内に入れず、自然低温に2カ月ぐらいあわせて、根も十分に伸びてから取り込むとスムーズに開花します。



球根アイリス

- アヤメ科
- 秋植え球根
- 開花期 4～5月

〈種 類〉

球根アイリスには約80種もありますが、スパニッシュ・アイリスやイングリッシュ・アイリス等を含むキシフィウム節のグループ、I・レーティクラータやI・ダンフォーディアエ等を含むレーティクラータ節のグループ、そしてI・プカリカやI・ブラーニフォリア等を含むジュノーのグループがおもなもので、これらにはそれぞれに数多くの園芸品種があります。なかでも、オランダで改良作出されたダッチ・アイリスは、キシフィウム節のスパニッシュ・アイリスに幾つかの野生種を交配、育成したもので、花色の豊富さ、草姿の良さ、品種数の多さから、球根アイリスの代表として知られています。また、近年ミニアイリスとして知られるI・レーティクラータが、わが国でも栽培されています。

〈性 質〉

耐寒性の秋植え球根(鱗茎)で、多数着生する木子で繁殖します。

〈栽培・管理〉

- (1) 使用球根は、傷球、病球を除き、大きくて重さを感じるものを選びます。
- (2) 植えつけ場所の選定や畑づくり、施肥などは総論に準じて行います。
- (3) 植えつけは10月中～下旬がよく、植えつけ間隔は球根の直径の3倍程度とし、球根の高さの2～3倍の覆土を行います。
- (4) 栽培期間中、茎葉の葉縁にモザク状の濃淡が現われるウイルス病株、地際部が暗緑水浸状になり軟化する白絹病株を抜き捨てます。花後摘花します。
- (5) 茎葉が黄変したら球根を掘りとり、茎葉を着けたまま日陰で通風乾燥を行い、十分乾燥後茎葉と根を除きます。木子は散逸しなすように注意します。
- (6) 球根貯蔵中に、傷球、病球、とくに白絹病(白く細い絹糸状の菌糸がはびこる)のついた球根は徹底して除き、残った球根はPCNB剤を粉衣します。

〈楽しみ方〉

草丈がかなり高いので寄せ植え花壇の中心近くや、境栽花壇の後方に植え込むのもよく、また、庭の一隅に無雑作に群植しておくのも趣きのあるものです。



アネモネ

- キンボウゲ科
- 秋植え球根
- 開花期 4～5月

〈種類〉

アネモネの仲間は約120種もあるといわれていますが、その多くは宿根草で、球根性のアネモネはヨーロッパ南部から地中海沿岸に自生しているものが多いようです。一般には花色鮮麗で大輪のアネモネ・コロナリアから生まれたデ・カーン(一重又は二重咲きで大輪、花色は赤、青、白、桃、白赤覆輪と豊富で、草丈高く切花にも適する)や、セント・ブリジド、種は違うがアネモネ・フルゲンスなどがよく知られています。

〈性質〉

耐寒性の強い秋植え春咲き球根(塊茎)、数年間は植え放しでよく、繁殖は種まきによって行います。

〈栽培・管理〉

- (1) 球根養成が目的なら秋に種子をまきますが、一般に花を楽しむ栽培では球根を買います。球根は小さな円錐形でかなりしわがより、干からびた感じですが、傷ついたり、カビがついたり、腐敗などしていないものを選びます。
- (2) 耕土深く、日当たり排水の良好な場所を選び、植えつけ7～10日前に㎡当たり石灰100～150g、完熟堆肥約2kgを全面にまき、20～30cmの深さによく耕やします。数日後に化成肥料(3要素各15%程度)約100gを全面に施し、十分に打ち混ぜます。数日後に10～12cm間隔で深さ5～7cmに植えつけます。
- (3) 植えつけ時期は10～11月中旬、数年間植え放しにするので、翌年度以降は、早春に化成肥料を㎡30～50g葉にかけないようにして施してやります。
- (4) アブラムシがつき易いのでよく注意して、発生すればすぐに、スミチオン乳剤1,000倍液やDDVP乳剤1,000倍液を散布して防除します。

〈楽しみ方〉

A・コロナリア系やA・フルゲンス系は、花形優れ花色も多彩で花壇に群植するとよく映え、素朴な花形、色彩のA・ブランダは内地のニリンソウに類似し、ロックガーデンの植え込みに好適です。

アネモネは開花後そのままにしておくとしづきが実り、自然にこぼれて次つぎに芽生え、自然に繁殖して開花するので楽しみなものです。

4. 山 野 草



ヒトリシズカ

- センリョウ科
- 宿根草
- 開花期 4～5月

〈性 質〉

日本、朝鮮、中国(中北部～東北部)、樺太に分布し、疎林下など明るい半日陰を好みます。花卉は退化してなく、白色の花の主体は糸状に長く伸びた雄蕊の葯隔(3本、長さ3～5mm)で、両側の雄蕊の外側に1個ずつ計2個の葯を付けます。花は展葉時に咲き出し、芽出し時から5月末まで楽しめます。葉は上部2節にまとまって付き、あたかも4枚の葉が輪生しているように見えます。茎は始め赤紫色で後に緑色となり、花後に伸びて高さ15～30cmになります。稀に始めから緑色のものがあってアオジクヒトリシズカ(青軸一人静)と言ひ、昭和天皇がお好みになりました。短く横走する根茎で殖え、1株から多数の茎を上げます。

〈栽 培〉

地植えの場合は、まず排水のよい半日陰地を選び、腐葉土を20kg/m²程すき込んで幅60cmの畦を作り、5～7本立ちを1株として分割した株を30cm間隔に2条植えします。鉢植えの用土は赤玉土、硬質鹿沼土の米粒大を混合したものでよく、5本立ちで4号浅鉢、7本立ちで5号浅鉢に植え込みます。まずは2年間作り込んで芽数多く丈低くなるようにし、その後順次鉢を大きくしていきます。肥料を好みますので月2回ハイポネックスの2,000倍液を与え、さらに春秋の2回、芽を伸ばして欲しい部分に油粕と骨粉をねり合わせたものを5g/株程置いてやります。丈夫な植物なので株分け移植はいつでもできます。

〈近 縁 種〉

フタリシズカ(二人静)は日本全土の低山に分布し、花は展葉後の5月に咲く遅咲きです。葉は上部2節に付きますが、節間が離れていて完全な対生です。花卉は退化してなく、白色の雄蕊の花糸は合着して雌蕊を包んで長さ2～4mm、花穂に白色の花が点々とへばり付いているように見えます。茎は高さ30～60cm、長くて丈夫なので茶花としてはヒトリシズカよりも実用的です。



エビネ

- ラン科
- 宿根草
- 開花期 4～5月

〈種類〉

園芸的に「エビネ」と言えば日本産の常緑で春の新葉展開時に花を付ける一群をさし、エビネ(ジエビネともいう)、キエビネ、キシマエビネ、ニオイエビネ、サルメンエビネの5つの原種と、これらの自然交雑種であるタカネ(エビネ×キエビネ)、ヒゴ(キエビネ×キシマエビネ)、イシヅチ(サルメンエビネ×エビネ)、コオズ(ニオイエビネ×エビネ)、スイショウラン(ニオイエビネ×キシマエビネ)を総称します。

〈栽培〉

地植えをする場合は、半日陰の林下などを選び、ひゅうが土の大豆粒(青袋)20ℓ/㎡、腐葉土4ℓ/㎡を庭土に混合し、畦幅60cmの平畦とし、株間を縦横ともに20cmとり、1～2芽ずつに株分けして根を拡げて植え付け、十分に灌水しておちつかせます。鉢植えの用土はひゅうが土、硬質鹿沼土、焼赤玉土の大豆粒～隠元豆大のものを等量混合したもの、または「スーパーらん」の大豆粒～隠元豆大のものとします。鉢の大きさは1芽の株なら5号深鉢、3芽の株なら7号深鉢が適当です。肥料は油粕と骨粉をねり合わせたかたまりを用い、花後と初秋の2回、1芽当たり10gずつ与えます。病虫害では花時のアブラムシ被害、秋に発生するトクナガハムグリバエの新芽食入がありますのでオルトラン、ダイシストン、エカチンなど浸透移行性殺虫剤の粒剤を定期的に施用します。

〈近縁種〉

夏咲き温帯性の種類として、ナツエビネ、キソエビネ、キンセイランがあり、冬は0℃でも大丈夫ですが、夏に暑がるので25℃以下に涼しくします。夏咲き亜熱帯性の種類として、ダルマエビネ(ヒロハノカラン)、ツルラン、オナガエビネ、リュウキュウエビネがあり、耐寒性がないので冬は5℃以上に保温します。熱帯性のものは10℃以上を保つ必要があり、「カランセ」と称して洋蘭として扱います。



チゴユリ

- ユリ科
- 宿根草
- 開花期 4～5月

〈性質〉

日本、朝鮮、中国に分布し、山野の林下にごく普通に見かけます。地下に根と同形の細い根茎があり、匍枝を伸ばして殖えます。茎は高さ15～30cm、日本海側のものは大柄でよく枝分かれをします。花は茎頂に1～2個、横向き～下向きに付けて白色、ユリを小さくしたような形なのでチゴユリ(稚児百合)の名があります。

〈栽培〉

丈夫な草で土質を選びませんが、水はけのよい所を好みます。若葉色の葉が観賞のポイントなので明るい半日陰を選びます。地植えとする場合は腐熟堆肥を10kg/m²程すき込み、幅60cmの平畦とし、1芽ずつに株分けして縦横ともに10cm間隔に植え込みます。鉢植えの用土は赤玉土、ひゅうが土、硬質鹿沼土の米粒大を混合したものとし、3号鉢なら1芽、5号浅鉢なら3芽を植え込みます。植えかえの時期は11月～4月の落葉時期です。単に殖やすだけなら毎年植えかえをして株を植え抜けていきますが、ボリューム感を出した観賞用鉢物としたい場合は2年程植えかえをしないで作り込みます。肥料は油粕と骨粉をねり合わせたものとし、花後と9月に1芽当たり3gずつ与えます。病害虫は新葉展開時のアブラムシ、夏～秋の根腐線虫の被害がありますので、ダイシストンとバイデートの粒剤を定期的に施用します。

〈近縁種〉

ホウチャクソウ(宝鐸草)は茎の高さ30～60cmと大きく、花は白色に緑を帯びます。キバナホウチャクソウ(黄花宝鐸)は茎の高さ40～80cmとさらに大きく、花は黄色で枝分かれをして沢山付けます。アマドコロ(甘野老)は茎の高さ30～80cm、葉腋ごとに1～2花を付けます。ナルコラン(鳴子蘭)やナルコユリ(鳴子百合)と誤称して切花薬物によく用いられるのはこのアマドコロの斑入品種でナルコユリは別種として存在し、茎に角稜がなく、葉が細く花は数花を下垂することで識別される。ユキザサ(雪笹)は高さ20～70cm、茎頂に円錐状に付く白色の小花が美しいものです。



ウラシマソウ

- サトイモ科
- 宿根草(球根植物)
- 開花期 4～5月

〈性 質〉

立ち上がった偽茎の下端に球茎(球根のように見えるものが真の茎です。)を付ける球根植物で、平地～低山の野原、林縁、林下に生えます。夏草の伸長や樹木の新葉が展開することにより梅雨期以降は半日陰になります。自生地は腐植質が多い軽くて良質なものです。葉は1球に1枚ずつしか付けず、鳥足状に11～17の小葉があります。花卉のように見える仏炎苞は葉身より下に位置し、黒紫色をしています。花序の付属体は長くて仏炎苞の外に伸び出し、浦島太郎が釣糸を垂らした様に見立てられてこの名があります。球茎(球根)の分球率が高く、開花球となればかなり多数の子球(ラミート)を付けて、1株のみで単生するということはありません。

〈栽 培〉

土がいつも湿っていて排水はよいという相反する条件を満たさないと栽培ができません。地植えとする場合は、半日陰の風通しのよい場所を選び、ピートモス20ℓ/㎡をすき込んで幅60cmの平畦を作り、球茎(球根)の径が12mm以上のものを親株とし、親球1個に子球が数個付いているという単位に分けて1株とし、縦横ともに30cm間隔に配置し、親株の大きさの3倍の深さに植え込みます。鉢植え用土は、赤玉土、ひゅうが土の米粒大と、ピートモスを混合したものとし、親球の大きさの2倍の深さに植え込みます。5号鉢で親球を1～3個、7号鉢で5～7個を植え込み数の目安とします。肥料は油粕と骨粉をねり合わせたものを用い、春の展葉後と9月の2回、親球1個につき5gずつ施します。葉は早落性なので、夏秋に水切れさせないように気を付けます。

〈近 縁 種〉

ユキモチソウ(雪餅草)、ヒメウラシマソウ(姫浦島草)、ムサシアブミ(武蔵鐘)、ニオイハング(臭半夏)などが栽培されます。この仲間はテンナンショウ(天南星)と称する薬草ですが、茎に蛇紋があるために好まれず、園芸価値が高いものの栽培されることが少ないものです。



ヒメシャガ

- アヤメ科
- 宿根草
- 開花期 5～6月

〈性 質〉

北海道西南部～九州北部の山地の乾いた疎林下に生えます。北陸産(特に富山県西部のもの)は葉幅が太く花は丸弁で、関東産(特に秩父武甲山のもの)は葉幅が細く花は細弁です。花は径4cm程で淡紫色、花茎に2～3個付け、葉は淡緑色で長さ20～40cm、幅5～15mmで先が垂れ、冬は落葉します。

〈栽 培〉

地植えとする場合は腐葉土10ℓ/㎡をすき込んで幅60cm、高さ30cmの平畦を作り、1株5～7芽に分けた苗を縦横ともに20cmの間隔とし、芽の先が土から顔を出す程度に浅植えします。鉢植えの用土は、赤玉土、硬質鹿沼土の米粒大～小豆粒大の混合とし、花後かまたは落葉後に、5～7芽に分けた株を3号鉢に植え込みます。1年間作り込んで鉢に根が廻ったなら5号深鉢にゆるめ、さらに1年間作り込んで鉢内が根で一杯になったら、3年目の秋は根を土ごと1/3に切りつめて6号浅鉢に植え付けます。4年目の春は根切りのショックで一斉開花し、展示会出品にもってこいの姿となります。毎年秋の落葉後、枯葉を取り去り、浮き上がった芽を寒さから保護するために目土を入れますが、芽の先が土からちょっと顔を出すように薄くやります。目土の質は植え込み用土と同じものを用います。肥料は、花後と9月初めに油粕と骨粉をねり合わせたものを5g/株ずつ、さらに週1回ハイポネックス2,000倍液を灌水代わりに与えます。病害虫は何といても白絹病が大敵で、予防的にコブ粉剤を芽出し時、梅雨期、秋雨期に散布します。排水が悪いとき、雨垂れ水が掛かるときに病気が発生し易いので雨の日に見廻って様子を見てやります。枯葉の除去も大切です。

〈近 縁 種〉

西日本のエヒメアヤメ(愛媛綾目)、中国北部のアンザンアヤメ(鞍山綾目)、朝鮮のキンカキツバタ(金杜若)、ヨーロッパ東部～ソ連西部のナンキンアヤメ(南京綾目)など小型のアヤメ類は同様の栽培法です。



ミヤマオダマキ

- イトクリソウ
- キンポウゲ科
- 宿根草
- 開花期 5～6月

〈性 質〉

本州中部以北、北海道、南千島、樺太、朝鮮北部の高山草地に生えます。自生地は砂礫地で、日当たりと風通しがよく停滞水がない場所で雲や霧がよくかかって十分な水分が供給されています。花は紫色、萼片が大きく発達して距があり、5枚の花弁と5枚の萼片からなる花形が糸繰りの際に用いる糸巻き「むだまき苧環」に似ているのでこの名があります。草丈は10～30cmの小形です。

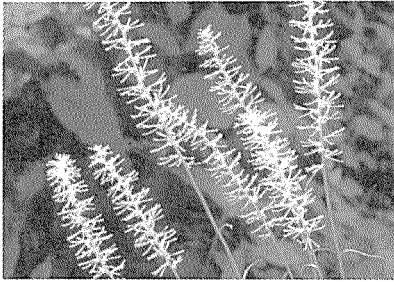
〈栽 培〉

地植えとする場合は、日当たりのよい場所を選び、庭土を50cm程掘り下げて排水用の有孔パイプを敷設し、径20mm程の栗石、割瓦、鉢カケなどを入れて20cm埋め戻し、その上にひゅうが土、硬質鹿沼土の大豆粒～米粒大のものを混合した用土を30cm厚に入れて植え床(この形式をスクリーベッドと称します。)を造ります。なお、排水パイプの末端は水が抜けるようにしておきます。株間を縦横ともに10cmとして植え付けますと即席のお花畑の出来上りです。鉢植え用土もひゅうが土、硬質鹿沼土の米粒大を混合したもので、3号鉢なら1芽、5号浅鉢なら3芽、7号浅鉢なら7芽を植え込みます。嫌地が起き易い植物なので種子が実れば必ず採り播きをして苗の交代維持に努めます。肥料はI B化成S 1号がよく、葉のある期間中は月1回1芽につき1粒ずつ与えます。

〈近 縁 種〉

ヤマオダマキ(山苧環)は日本、朝鮮、中国北部、シベリア東部に分布する大形の種類で、草丈は30～70cm、茶花に好まれます。南方型のキバナヤマオダマキ(黄花草山苧環)は花が淡黄色、北方型のエゾヤマオダマキ(蝦夷山苧環)は花が帯紫褐色です。

ルリオダマキ(カンミンゴン ベクトーサン瑠璃苧環)は朝鮮北部の冠帽峰、白頭山などに分布し、草丈は30cm程、花が上品な青紫色をしているので好まれ、戦前に導入されたものが今も植え継がれています。



シライトソウ

- ユリ科
- 宿根草
- 開花期 5～6月

〈種 類〉

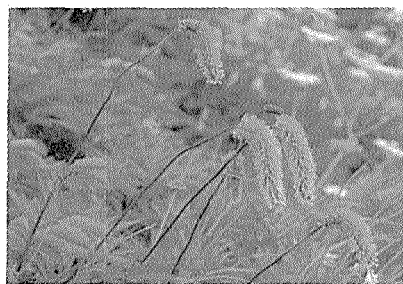
シライトソウは本州(秋田県以南)～九州、朝鮮南部に分布しますが、地域差がはなはだしく、北陸のものは大柄で根生葉の長さ12～20cm、花茎の高さ30～70cm、花被片は長さ12～15mmです。屋久島のチャボシライトソウ(矮鶏白糸草)は極小型で根生葉の長さ2～6cm、花茎の高さ12～20cm、花被片は9～12mmです。関東地方にはアズマシライトソウ(吾妻白糸草)、岐阜県にはミノシライトソウ(美濃白糸草)、静岡～愛知の県境にはミカワシライトソウ(三河白糸草)、佐賀県にはクロカミシライトソウ(黒髪白糸草)といった変種があり、草姿が微妙に異なります。北陸産の大型種は茶花に用いるために地植え、屋久島産は小鉢によるミニ仕立てという具合に観賞上の都合で使い分けをします。

〈栽 培〉

地植えとする場合は腐熟堆肥を10kg/m²程すき込んで幅60cmの平畦とし、縦横ともに20cmの間隔に植え付けます。疎植にすると分株するばかりで花が付かないので、葉がふれ合う程の密植とします。鉢植えの用土は赤玉土、ひゅうが土、硬質鹿沼土の混合したものでよく、根出葉の径の倍の間口の鉢に植え込みます。産地により株の大きさが違うので株の大きさを見て鉢サイズを決めます。水が好きなので乾燥させないようにこまめに灌水します。特に地植えの株、鉢植えの株では小鉢や浅鉢のものの水切れに注意します。施肥はマグアンプKの大粒を月1回3粒/株程ずつ与えます。

〈近 縁 種〉

ショウジョウバカマ(猩々袴)も根生葉を付けてよく似ていますが、花は濃紫紅～淡紅～白色で4～5月咲きです。同様に地域差が大きく、北陸産は大型、太平洋側のものは中型、南関東～四国に点々と分布するシロバナショウジョウバカマ(白花猩々袴)、九州のツクシショウジョウバカマ(筑紫猩々袴)は小型です。栽培方法はシライトソウに準じます。



カライトソウ

- バラ科
- 宿根草
- 開花期 6～10月

〈性 質〉

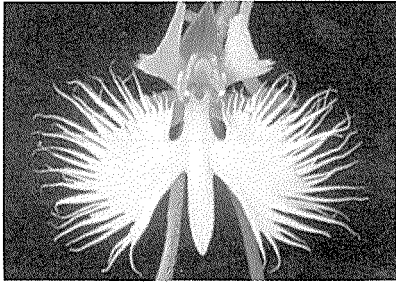
本州中部の日本海側の高山～亜高山の高茎草原に特産し、特に白山、大日岳、白馬岳に多く自生する多雪地特有の植物です。変種のコウライカライトソウ(高麗唐糸草)^{チヤンベクサン ベクトーサン}が朝鮮の長白山、白頭山などに分布して対応しています。吹き溜り、雪崩道などの湿った高茎草原に生え、水切れと停滞水は大敵で常に新しい水を欲しがります。根茎は太く、長さ30～60cmの葉を根生し、高さ40～80cmの茎を立て、長さ4～10cmの淡紅色の花穂を付けます。昔中国から輸入していた絹糸の房に花穂の美しさをなぞらえて唐糸草の名があります。

〈栽 培〉

地植えは造成用の赤土か田畑の黒土がよく酸性のままとして石灰施用は禁物です。10kg/m²の腐熟堆肥をすき込んで植え床を作り、縦横ともに30cmの間隔に植え付けます。鉢植えの用土は赤玉土、硬質鹿沼土を混合したものとし、小苗なら5号鉢、中苗なら7号鉢、大株ならば尺鉢を用います。根株の太さが5mmで長さ10cm以上あれば開花株ですが、大株である程花数が多いので小割りにしない方が無難です。肥料を好みますので春秋に各々10g/株の油粕と骨粉をねり合わせたものを与えます。梅雨頃に葉の表面が白くなって株を弱らせるウドンコ病が発生するので、モレスタン水和剤を散布して防除します。

〈近 縁 種〉

ワレモコウ(吾亦紅、吾木香)の花穂は長さ1～2.5cmで暗紅色ですが、枝分かれして多数付けます。ナガボノシロワレモコウ(長穂乃白吾亦紅)の花穂は長さ2～7cmで名の通りの色の花を付けます。この仲間は草丈があるので切花に適し、逸話に因んだ茶花、形を活かす現代挿花などに好まれます。



サギソウ

- ラン科
- 宿根草(球根植物)
- 開花期 7～8月

〈性質〉

前年の走出枝の先に楕円形の球茎を付ける球根植物で、日本(本州～九州)、台湾、朝鮮、中国、東シベリアの低地の湿原に分布します。各国ともに低湿地を開拓して農地を開発しているため、自生地はどんどん少なくなってきました。草丈は15～40cm、3～5枚の葉があって、1～5個の白色で径3cm程の白鷺が羽根を拡げた形の美しい花を咲かせます。

〈栽培〉

湿原の植物で日当たりを好みますが、高温を嫌うため風通しをよくします。水分を好むが、水やりは早朝とし昼の高温時にはやらず、腰水は禁物です。乾くようなら日没後涼しくなってから水を補います。鉢栽培とし、地植えはしません。用土は水苔単用、または硬質鹿沼土の米粒大にピートモスを混合したものとし、3号鉢なら3球、5号鉢なら10球を植え付けます。肥料はハイポネックスの1,000倍液を週1回灌水代りに与えます。植えかえは2～3月に行い、葉腐病予防のためにベンレートTの白濁液(200～500倍液)に30分間浸漬して消毒します。

〈同様の管理をするもの〉

トキシソウ(朱鷺草)は横走する地下茎により増殖し、淡紫紅色(朱鷺色)の花を付けます。サワラン(沢蘭)はアサヒラン(旭蘭)とも言い、緑色の偽球(バルブ)により越冬し、鮮紫紅色の花を付けます。タイリントキシソウ(大輪朱鷺草)はタイワントキシソウ(台湾朱鷺草)とも言い、紫褐色～紫色の偽球により越冬しますが、5℃以上に保温する必要があります。ハクサンチドリ(白山千鳥)は紡鐘形の球茎(球根)で越冬し、紅紫色の小花を穂状に付け美しいもので、プラスチック製の4号深鉢に植え付けると調子よく出来ます。湿地性のランは水を好むため、乾きやすい素焼き鉢は不向きで、水分がこもりぎみとなるプラスチック鉢とか釉薬^{うわぐすり}のかかった鉢の方が栽培が楽です。



オミナエシ

- アワツブバナ
- オミナエシ科
- 宿根草
- 開花期 7～10月

〈性 質〉

日本、朝鮮、中国、シベリア東部の日当たりのよい草地に生える「秋の七草」の一つです。茎は高さ60～100cm、多数の黄色の小花を平らな集散花序に付け、これを粟飯(あわめし)即ち女飯(おんなめし)に例えてオミナエシの名が出たと言われています。地下茎が横走して新株を作り、今年花を付けた芽は枯れてしまいます。新株の栄養葉は全縁ですが、開花芽の葉は羽状に深裂します。

〈栽 培〉

草姿が大きいので地植えに適します。耕地整理をする前は畔草として生えていた所もある程で湿地でも育ちますが、溜り水は苦手なので転換田に作付けする場合は幅60cm、高さ30cmの畦を作り、株間20cmの2条植えとします。鉢植えの用土は、赤玉土、鹿沼土など手近かにあるものでかまいません。鉢の大きさは4号鉢なら1株、6号鉢なら3株を植込みます。肥料は春の芽出し時、7月の梅雨明け、第1回採花後に各々10g/株の油粕と骨粉をねり合わせたものを与えます。植えかえは2年毎(1年おき)に行ない、こまめに株分けをして嫌地や株絶えをさせないようにします。花を長く咲き続けさせるため、咲き揃った枝を次々に切り取って切花などに用い、種を成らさないように気をつけます。

〈近 縁 種〉

ハクサンオミナエシ(白山女郎花)はコキンレイカ(小金鈴花)とも言い、本州(北陸～東北地方)の山地岩場などの向陽地に生えます。花は6～8月咲き、1番花を刈り取った後の2番花は9月咲きです。茎は高さ20～60cm、根切りをして浅鉢に植えるか石付けにした場合は10cm前後の高さで咲かせることができる鉢植え向きの種類です。

オトコエシ(野郎花)はアジアの山野開墾地に広く分布します。花は白色で、草姿はオミナエシと同じです。白米の男飯(おとこめし)が名の由来です。



サラシナショウマ

- キンボウゲ科
- 宿根草
- 開花期 8～10月

〈性 質〉

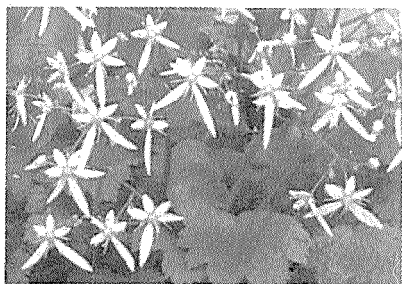
若芽はゆでて水で晒して食べる山菜、根茎は発汗、解熱、解毒剤となる漢方薬です。東アジアの冷温帯～亜寒帯の草原～疎林に広く分布し、富山県下では八尾町以東の山間の林道沿いなどに多く見かけます。茎は高さ40～200cm、葉は3回3出複葉(3枝27葉)、花は白色で20～80cmの穂状花序をなしブラシ状です。花の少ない時期に咲き出すため、一番花は茶花の最高級品となり、鶴首などに一種活けにします。また形が好まれて現代活花にも用いられます。

〈栽 培〉

寒冷地の植物なので夏涼しい場所で育てます。地植えの場合は、半日陰の風通しのよい場所を選び、腐熟堆肥20kg/m²をすき込んで土をフカフカにし、幅60cm、高さ30cmの畦を作り、30cm間隔に1列植えをします。鉢植えの用土は、赤玉土、硬質鹿沼土、ひゅうが土の小豆粒～米粒大を混合したものとし、尺鉢(10号鉢)に1株植えとします。肥料は5月、9月の2回、油粕と骨粉をねり合わせたものを10gずつの塊として1株につき5～7個与えます。夏の暑い時に葉枯れし、株元がムレてくると株ごと腐ってしまいます。夜に涼風があれば病気も出ずに簡単に育てることができますので、環境を第一に考えます。採花をこまめに行ない種を付けさせないことが、花数を多くし、花期を長引かせるコツです。

〈近 縁 種〉

イヌショウマ(犬升麻)は薬用にも食用にもならぬために付いた名ですが、鉢植えに好ましい種類です。本州の特産で、主に関東～近畿の太平洋側の暖温帯の樹林下に分布します。茎は高さ60～90cm(鉢植えで20～40cm)、葉は1回3出複葉(3小葉のみ)、花は白色でサラシナショウマを小型にした姿です。鉢植えとするため、赤玉土、硬質鹿沼土、ひゅうが土の混合用土で、5号鉢に1株植え、肥料は1株につき1～2個の塊と小量におさえておきます。



ダイモンジソウ

- ユキノシタ科
- 宿根草
- 開花期 7～11月(品種により異なる)

〈種 類〉

ダイモンジソウの名は「大」の字形の白い小花を付けることに由来し、東アジアの温帯域(日本、朝鮮、中国、ソ連沿海州、樺太)の海岸～高山の湿った岩上に広く分布して、変異の幅が非常に大きい植物です。富山県下に自生しているものはナメラダイモンジソウ(滑大文字草)の特別大柄なタイプで、葉に光沢があり、9～10月咲き、花茎が長いので茶花に適します。カエデダイモンジソウ(楓大文字草)は葉の切れ込みが深いタイプで、9～10月咲きです。イズノシマダイモンジソウ(伊豆乃島大文字草)は葉の毛が多く、10～12月咲き、房総半島南端部と伊豆諸島に分布します。ナチヒメダイモンジソウ(那智姫大文字草)は紀伊半島南部に分布する小型のタイプで、葉は3～5裂状となって10～11月咲き、草丈が低くて葉が密生するので浅鉢に植えて盆栽の添えなどに用いられます。ヤクシマダイモンジソウ(屋久島大文字草)は屋久島産の矮性種で、葉は5裂状で10～11月咲き、花が葉に比べて大きく鉢植えに好まれます。ウラベニダイモンジソウ(裏紅大文字草)は石灰岩地帯に分布する葉裏が紅色となるタイプで、9～10月咲き、葉色がよいので好まれます。ミヤマダイモンジソウ(深山大文字草)は高山型で、7～9月咲き、夏に暑がりますが早咲きなので好まれます。他にも変異品種をあげればキリがないほど多数あります。

〈栽 培〉

湿った岩地に生えるため、水を好み乾燥は大敵ですが、停滞水も嫌います。夏に暑がるので日陰にして涼しくします。鉢植えとし、赤玉土とひゅうが土の米粒大を等量混同した用土を用い、葉張りの2倍程の間口の浅鉢に植え込みます。肥料はハイポネックスの2,000倍液を週1回灌水代わりに与えるだけです。長梅雨の場合、^{そうかびよう}瘡癰病が発生しますのでダイファースとダコニールを合わせて各々1,000倍となるようにした液で防除します。



イカリソウ

- サンシキウヨウソウ
- メギ科
- 宿根草
- 開花期 4～5月

〈種 類〉

東アジア～南ヨーロッパ、北アフリカに約20種が分布し、日本にはイカリソウ、トキワイカリソウ、キバナイカリソウ、バイカイカリソウ、オオバイカイカリソウの5種が自生します。地域変異が大きく、自然交雑種ができ易いため自生種を集めても楽しめます。また、近年出廻るようになった改良種は花色、花形ともにバラエティーに富んだものとなっています。

〈性 質〉

落葉広葉樹の林床～林縁に生える多年草で、横走する根茎で宿根します。根茎は細く硬く、多数の根が生えます。根茎の先端部に葉を付け、地上茎はありません。葉には細く硬い葉柄があって、イカリソウ類では1～3回に3出して3、9、27枚の小葉を付け、バイカイカリソウ類では1～2回に2出して2、4枚の小葉を付けます。別名の三枝九葉草はこの細い葉柄が分枝する姿によるものです。

〈栽 培〉

林下の植物なので半日陰の水はけのよい適湿の地を好みますが、水やりをしっかり行えば日なたでも十分に育ちます。繁殖は株分けにより、3月初め～4月上旬、9月中旬～11月末の春秋に行ないます。1芽ずつ分けて2.5号鉢に植える小作りをしても花は見るのですが、花を沢山咲かせるには20芽程を一かたまりとして5～7号平鉢に植え込むのがよいでしょう。鉢植え用土は赤玉土、硬質鹿沼土、桐生砂などの米粒～小豆粒大を用います。庭植えの場合は腐葉土を10ℓ/㎡程すき込んで平畦を作り、5～7芽に割った株を30cm間隔に植え付けます。イカリソウは酸性土壌を好みますので石灰施用は禁物です。肥料は5月の花後と9月の2回、油粕と骨粉をねり合わせたかたまりを1株に付き10gずつ与えます。なお、植えかえの間隔は鉢植えで2～3年に1度、庭植えで4～5年に1度とし、株を作り込むと花がよく付きます。



フクジュソウ

- ガンジツソウ
- キンポウゲ科
- 宿根草
- 開花期 1～4月

〈性 質〉

東シベリア、中国東北部、朝鮮、日本に分布しますが、北方の植物であるために南になる程自生量は少なくなり、石灰岩地帯に限定的に生育するだけとなります。花期は自然状態で3～4月、融雪直後から開花を始め、葉の展開とともに伸び上がりながら開花を続けます。花は晴天の日中のみ全開し、夜間や悪天候時は閉じたままです。地上部は5月末に枯れますが、根株は9～10月に花芽分化をして春に備えます。

江戸時代の中頃に土室^{つちむろ}に入れて促成する方法が開発され、正月に花を咲かすことができるようになりました。この促成した芽を室芽^{むろめ}と言い、芽の皮は黄緑色です。これに対して促成していない掘り取っただけの芽を生芽^{なまめ}と言い、芽の皮は白色で、加温しても2月にならないと花が咲きません。室芽は促成した手間の分だけ値段が高く、生芽の2～3倍にもなります。

〈栽 培〉

落葉樹の疎林に生える植物なので、冬は日当たりがよく、5月の新緑の頃から半日陰になるようにします。植えかえは11～12月、掘り取った株は3～5芽ずつとなるようにドライバーなどでこじって分けます。株分けの際に根を切りつめると株が弱りますので、根は切らないように気を付けます。鉢植え用土は赤玉土の細粒7に腐葉土をフルイでこすって砕いたもの3を混合したものとし、3芽の株なら5号鉢、5芽の株なら6号鉢、7芽の株なら7号鉢と大きめの鉢にゆとりをもって植え込みますと2～3年はそのまま楽しめます。肥料は開花期間中にマグアンプKの大粒を鉢1号に付き1個の割合で与えます。

〈同じ管理をする近縁種〉

ミスミソウ(三角草)は一般名をユキワリソウ(雪割草)と呼ばれフクジュソウと同じ正月の縁起物です。ほかにセツブンソウ(節分草)やオウレン(黄蓮)、ニリンソウ(二輪草)などがあります。



サクラソウ

- ニホンサクラソウ
- サクラソウ科
- 宿根草
- 開花期 4月

〈性質〉

日本、朝鮮、中国東北部に分布します。日本では中部以南は高原地帯、関東以北では平地の原野に生えます。湿った土地を好み、夏にはヨシ、ナツトウダイなどの雑草に埋もれます。花は淡紅色の桜形をして「我国は草も桜を咲きにけり一茶」とも言われ、江戸時代より荒川周辺のもの栽培されてきました。葉は柔らかく焼け込み易く、5月中旬に地上部が枯れてしまうことがありますが、根は丈夫で生き残っていますので水切れさせないように管理します。

〈栽培〉

春先は日光を好みますので十分に陽に当てます。花後はできるだけ葉を長持ちさせるように半日陰にとり込みます。葉のある間はハイポネックス1,000倍液を週1回与えて肥培に努めます。鉢植用土は赤玉土、硬質鹿沼土、腐葉土の粒径3mm程のものを等量ずつ混合し、5号鉢に3芽ずつ巴状に芽先を向け合わないよう配置して植え込みます。株分けのほか実生も繁殖や育種改良のために行なわれます。5月中旬～6月上旬に採種し、できるだけ新鮮な状態で種子を播きます。種子を乾燥保存すると休眠が深くなって発芽が揃わなくなってしまうので、播種用土は水苔をフルイにこすり付けて粉にしたものを平鉢に3cm程入れるか、ピート板を用いるかします。本葉3～5枚の時に鉢上げをし、順次鉢替えをしていきますと2年目に花を見ることができます。

〈近縁種〉

サクラソウ属植物は北半球の温帯～寒帯に広く分布し、約600種があります。日本産のものではシコクカッコウソウ(四国郭公草)、クリンソウ(九輪草)、コイワサクラ(小岩桜)、ユキワリコザクラ(雪割小桜)、オオサクラソウ(大桜草)などが栽培されています。ほかにも、中国～ヒマラヤ産、ヨーロッパアルプス～コーカサス産の野生サクラソウも沢山出廻っていて、春先に園芸店の山野草コーナーをのぞくと種類の多さに驚かされます。



ス ミ レ

- スモトリバナ
- スミレ科
- 宿根草
- 開花期 4～5月

〈種 類〉

全世界の温帯気候下に500種以上あり、日本には59種自生し、約3種が帰化しています。富山県内には25種あり、オオタチツボスミレ、タチツボスミレ、ツボスミレ(ニョイスミレ)、スミレ(狭義の)、アリアケスミレ、マキノスミレ、フモトスミレ、ミヤマスミレ、オオバキスミレ、スミレサイシンなどの自生量が多いようです。スミレ類は地域変異、生態変異が大きい上に、自然交雑種ができやすい特徴を持っています。スミレ類の改良といえばヨーロッパ産の原種を用いたパンジーが代表的ですが、アメリカ合衆国では北アメリカ産の原種を、日本では日本産の原種を用いて改良が進み、多種多様な品種が作られつつあります。現在のところ山野草と園芸植物の中間に位置していると言えるようです。

〈栽 培〉

弱酸性の土壌を好むので、用土は赤玉土、硬質鹿沼土、桐生砂など酸性のものをベースにします。林下に生えるものには腐葉土を、特殊地帯に分布するものには各々に応じて蛇紋岩、石灰岩、富士砂、エゾ砂などを配合します。嫌地が起き易い短命な宿根草なので、実生(種まき)、株分け、葉挿し、根伏せなどで繁殖し、株の維持に努めます。肥料はマグアンプKの大粒を用い、鉢1号に付き1個を月1回ずつ施用します。病虫害は多く、春の芽出し時にナメクジ、ヨトウムシ、アブラムシ、5～7月には瘡癰病^{そうかびよう}、秋には根瘤線虫^{ねこぶ}の被害が出ます。ナメクジは捕殺(消石灰を入れた容器に捕えて入れるだけでよい)、ヨトウムシ、アブラムシにはダイシストン、オルトランの粒剤を、瘡癰病にはダイファーとダコニールの水和剤を混合したものを、根瘤線虫にはバイデート粒剤を、各々定期的に施用して防除します。いくら防除をしても嫌地を起こして古株は枯れてしまいますので、植えかえと苗の更新をこまめに行います。

5. 室内鉢花観葉類

鉢花や観葉植物は、花、苞、茎、葉などの形や色彩の美しさを鑑賞するものです。鉢植えにすることでより美しく、より長い期間楽しめるもので、洋らん類、1・2年草、宿根草、球根類、観葉植物、花木等非常に多くの種類があります。

1. 鉢植えに向く草花。

- (1) 草花が矮性で整っており、花が大輪か、小輪多花性で美しいもの。
- (2) 花もちが良いものや、開花期間が長期間にわたり長く鑑賞できるもの。

2. 鉢花を長もちさせるコツ。

- (1) 購入する際の選び方
 - ・健全な下葉がついているもの。・節間や葉柄が短く葉色の濃いもの。
 - ・花や蕾が多く、花色の鮮明なもの。・病気や虫害のないもの。
- (2) 開花期間中の手入れ
 - ・かん水を十分行います。花に水滴がつくといたみが早まることが多い。
 - ・日あたりや通気に心がけ、室内に長く置かない。
 - ・花がら摘みを行う。
 - ・花期の長いものは、薄い液肥や少量の化成肥料を施す。
- (3) 開花後の手入れ
 - ・宿根性や半低木性で花の咲く位置が高くなるものは、切りつめる。
 - ・木本性のものは花後に、直ぐ植え替える。
 - ・球根類は緑葉を大切に管理し、黄変すればかん水を控え目にして、枯死したら掘りとり乾燥する。
 - ・1年草は種子ができ次第に枯れるので、株をぬきとる。

3. 夏、冬管理のポイント

- (1) 夏の管理
 - ・熱帯、亜熱帯原産のものは、水やりと施肥を十分に行い、直射日光を好むものは屋外で育てます。葉焼けをおこしやすいものはしや光します。
 - ・温帯原産のものは、衰弱するので、風通しが良く涼しく明るい日陰におきます。また施肥は行いません。
 - ・害虫、病気の発生に注意して、早めに防除します。
- (2) 冬の管理
 - ・寒さに弱い種類は、保温します。家庭では最低6～7℃に保ちます。1日の温度差を10～15℃以内にします。ガラス越しの日光にあてます。
 - ・かん水は鉢土の表面が乾いた時に行い、やりすぎは根腐れを起こすので禁物

です。

4. 上手なかん水

- 鉢土全体にゆきわたらせます。
- 回数は季節や育ち方により加減します。時刻は暖候期は午前10時頃までに寒候期は正午頃に行います。
- 1回の量は鉢底から水が流れてるまでたっぷり与えます。
- 水は清潔なものをうい、水温は常温であれば良い。
- 花には水をかけないように注意します。

5. 生長調節剤の使い方

栽培目的にかなった方向へ育てる補助的な手段として、最近さかんに利用されています。

- 休眠の打破……ジヘレリン500～1,000ppm：球根類、つつじ類、ミヤコワスレ
- 発根の促進……インドール酪酸(IBA)、ナフタレン酪酸(NAA)、ナフタレンアセチルアミド(NAd) 5～100ppm。
- 生長の促進……ジベレリン50～100 ppm：キク、ミヤコワスレ
- 生長の抑制……B-9、0.2～1.0%、アンシミドール1～2%、CCC0.1～0.5%：ポットマム、ハイビスカス、シコンノボタン
- 花芽分化促進……B-9、CCC：アザレア、ブーゲンビレア
- 摘心摘蕾……アトリナール：アザレア
- 開花促進……カーバイト：アナナス、パイナップル

生長を抑制するわい化剤の使用について表4を参照して下さい。

6. 用土の三原則

- 鉢物用土は、保水性、通気性、保肥力をもつよう配合します。
- 鉢花の種類によって、三原則を加減します。通気性を好む種類は、土の中に空気を増すよう配慮します。
- 土の粒子が細かいほど保水性、保肥性に富みますが通気性は乏しくなり粒子が荒いほど逆になります。

図1を参照して下さい

7. 鉢物用土の種類とおもな特徴

種 類	主 な 特 徴 と 用 途
赤 玉 土	火山灰土の下層の赤褐色の粘土で弱酸性である。 有機質、病原菌を含まないので、さし木用土や鉢花の基本用土として使用できる。
田 土	水田の土で病害虫が少なく培養土材料や基本用土に最適、保水力保肥力に富み鉢花用土としては最高であるが、地域によっては砂の多いところもある。しかし、田土だけで使用することは少ない。
川 砂	山の母岩の性質によって粒形や大小に差がある。用土として使用するには円粒よりも角の多い粒子(川の上流がよい)で細かいものより大粒(直径2～3mm)のものがよい。空気を保つ力はあるが乾燥しやすい。 さし木用、鉢花用土として欠くことのできないものである。
鹿 沼 土	栃木県の鹿沼地方から産出される黄褐色、多孔質の土である。保水、通気性共に富み、さし木用土として、あるいはさつき用土や鉢花に欠くことのできないものである。
ピ ー ト モ ス	極寒地の湿地で植物(おもに根)がたい積したもので、酸性が強い。一般にピートとよばれ保水性に富む。細かい種子の播種用土として、あるいは鉢花用土の配合材料として用いられる。
腐 葉 土	闊葉樹の落葉を積んで腐らせたものが最上ですが、最近は粗悪なものが多い。適当に保水性、通気性があり、肥料としての効果もある。 草花の用土として、特に大輪菊の栽培に欠くことのできない用土である。
水 苔	山の谷にはえる草の一種で保水性が高くまた通気性も大である。洋ラン、観葉植物に欠くことができない。
バーミキュライト	ひる石を700～900℃で焼成加工したもので、茶褐色で金属性の光沢がある。膨軟で、保水、通気性があり全く無菌なので、さし木用土や鉢花に適する。
バ ー ラ イ ト	真珠岩を900～1200℃で焼成加工したもので多孔質である。梱包材料としても使用される。保水、通気性に富みバーミキュライトに準ずる。
石 川 ラ イ ト	石川県金沢市牧町に産する軽石の一種で粒子が荒く、多孔質である。保空気に富み、好気性の洋ラン類に最適である。
そ の 他	くん炭(もみがらをむし焼きにしたもの)、パーク(樹皮を粉碎したもの)オスマンダ(熱帯性シダ類の根)山ごけ、人工水苔(ポリエステル繊維加工)などがある。

8. 鉢の種類と用土

- おもな鉢の形には下記の図のようなものがあります。



- 材質は土鉢(素焼鉢、塗り鉢、飾り鉢)とプラスチック鉢があります。

1) 素焼きばちとプラスチックの長所と短所の比較

種類	長 所	短 所
素焼 きばち	• 通気性がよく根の発育によい。 • 水もよく蒸発するので、過湿になりにくい。 • 夏は、はち土の温度があがりにくい。	• 重く扱いにくい。 • 乾きやすい。 • 表面にそう類がつきやすい。 • こわれやすい。
プ ラ ス チ ッ ク ばち	• 乾きにくく水やり労力が少ない。 • 軽くて扱いやすく、こわれにくい。 • 表面にそう類がつかず、汚れもかんたんととれる。 • 冬ははち土の温度が高い。 • 比較的安価である。	• やや過湿になりやすい。 • 夏は、はち土の温度があがりやすい。 • 草たけがのび、重心がうえになるものはたおれやすい。

2) 鉢の号数と内径および容積

規格号数	内 径	容 積	規格号数	内 径	容 積
2.5号ばち	7.0cm	約 180ml	4.5号ばち	12.5cm	約 1,100ml
3 ♫	8.5 ♫	♫ 280 ♫	5 ♫	14.0 ♫	♫ 1,500 ♫
3.5 ♫	9.5 ♫	♫ 420 ♫	6 ♫	17.0 ♫	♫ 2,400 ♫
4 ♫	10.5 ♫	♫ 700 ♫	7 ♫	20.0 ♫	♫ 3,000 ♫

3) おもな鉢物の用土配合例

種 類	田 赤 玉 土	腐 葉 土	ピートモス	川 砂	積 み 肥
シクラメン	4	2	1	1	1
プリムラ類	4	2	—	—	—
ポインセチア	4	1	2	—	—
ゼラニウム	4	2	—	—	—
ペコニア類	4	1	1	1	—

表1 鉢花の種類による肥料の要求量

区 別	種 類
肥料の要求量の少ないもの	アジアンタム・アザレア・アンスリウム・フリージア・カトレア・デンドロビウム・プリムラニオプコニカ・グラジオラス・ツバキなど
肥料の要求量の中位のもの	エクメア・ガーベラ・アフエランドラ・アネモネ・シクラメン・グロキシニア・バラなど
肥料の要求量の多いもの	ポインセチア・ハイドランジア・セントポーリア・カーネーション・キク・ランタンキュラスなど

表2 鉢花に適するおもな種類

	鉢 花 名
1 年 草	アゲラタム、アサガオ、トルコギキョウ、ニチニチソウ、ペチュニア、カルセオラリア、シネリリア、インパチェンス、パンジー、ワスレナグサ、ハボタン
宿 根 草	ポットマム、ゼラニウム、ペラルゴニウム、ベゴニアセンパフローレンス、エラチオールベゴニア、ガーベラ、スズラン、セントポーリア、クンシラン、ストレプトカーパス、プリムラ類
球 根	グロキシニア、シクラメン、ロードヒポキンス、カラジウム、アンスリウム、チューリップ、ランタンキュラス、アネモネ、ヒアシス、アマリリス、カラー
花 木	アザレア、ハイドランジア、ポインセチア、ハイビスカス、ブーゲンビレア、ゲンペイカズラ、サンタンカ、アフエランドラ、デブラテニア、のぼたん、ランタナ
多 肉 植 物 サ ボ テ ン	カランコエ、シヤコバサボテン、イジヤクサボテン、ロケヤ、ハナキリン
洋 ラ ン	カトレア、デンドロビウム、シンビジウム、フアレノプミス、オンシジウム、パフィオペイルム、シルトニア、パンダ

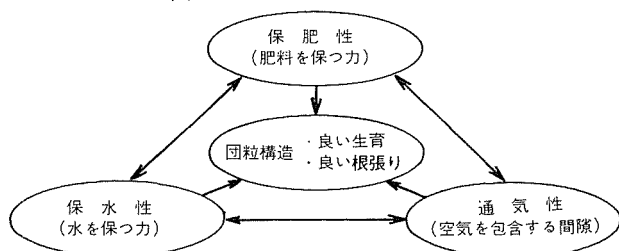
表3 日光が少くて良い鉢花

・半日くらい日光が必要な鉢花	・反射光くらいでよい鉢花
カルセオラリア、球根ベゴニア、クンシラン、リーガースベゴニア	セントポーリア、フアレノプシス

表4 生長調節剤による抑制処理

	植 物 名	希 釈 率	適 期、 処 理 方 法
B I 9 処 理	ア サ ガ オ	200～300	摘芯10日後。さらに15日後。茎葉に散布
	ア ザ レ ア	200	摘芯40日後。茎葉に散布
	カランコエ	200～300	摘芯20日後。茎葉に散布
	キ キ ヨ ウ	200～300	摘芯10日後。さらに20日後。茎葉に散布
	キ ク	200～300	摘芯 5 日後。さらに20日後。茎葉に散布
	コ リ ウ ス	200～300	摘芯10日後。茎葉に散布
	ス ト ッ ク	200～300	草丈 5 cmのころ。茎葉に散布
	ダ リ ア	200～300	草丈15cmのころ。さらに15日後。茎葉に散布
	ハイドランジア	200～300	摘芯20日後。さらに春芽が伸びたころ。茎葉に散布
ス リ ー ト ー ン 処 理	ポインセチア	200～300	摘芯 2 ～ 3 週間後。茎葉に散布
	ラナンキュラス	300～500	発芽30～40日後。さらにつぼみが見え たころ。茎葉に散布
	キンギョソウ	50～100	摘芯20日後。鉢土に灌注
	クレロデンドロン	100	側枝の長さ約 5 ～ 10 cmのころ。鉢土に 灌注
	ゼラニウム	100	摘芯20日後。鉢土に灌注
	ブーパルジア	100	摘芯 7 日後。鉢土に灌注
	ホクシア	100	摘芯30日後。鉢土に灌注
	ポインセチア	100	摘芯 2 ～ 3 週間後。鉢土に灌注
	ユ リ	100	発芽し始めたころ。鉢土に灌注
	リーガース・ベゴニア	150	摘芯20日後。鉢土に灌注

図1. 鉢花用土の三原則





シンビジウム

- ラン科
- 非耐寒性常緑多年草
- 開花期 種により異なり周年

〈性質〉

洋ランのなかで、最も家庭に普及しているランです。日本趣味に合った美しさと、洋ランの持つ豪華さを兼ね備え、花と葉のバランスもよく、鉢物として贈答用に最もよく使われています。栽培は容易で、低温に強く、温室がなくても栽培できます。

〈購入上の注意〉

シンビジウムは一つの花茎につばみが20個前後ついていて、下から上に向かって咲いて行くもので、これが6～7分咲きのころに購入すると長く楽しめます。この時注意することは、葉にハダニやスリップスのあとがなく、カイガラムシなどがついていないかどうかを確認ことです。

〈管理〉

開花株はできるだけ暖かい室内に置きますが、暖房器の近くには置かないこと。室内が乾燥したときは霧水を与えますが、花にはかけないようにします。

花は2ヶ月以上楽しめますが、鉢で1ヶ月観賞したら株が弱らないように切り取って、あとは切り花として観賞するようにします。

- 温度……花を咲かせるには12℃以上を必要としますが、枯らさずに越冬するだけならば3℃程度に保ってやります。
- 水……春から秋までは生長期のためよく乾くので、毎日1回与えますが、特に夏は夜間を涼しくするために、周囲の地面にも散水します。
- 肥料……油粕と骨粉を等量に混ぜた置き肥を5月上旬、6月上旬、7月上旬の3回与えます。このほか液肥を4月下旬～9月上旬まで月3回与えます。冬は与えません。
- 植え替え……鉢からバルブが外にはみ出るようになれば植え替えをします。鉢いっぱいに生育した株は鉢から抜いて、ひとまわり大きな鉢に植え替えます。株分けをする場合には少なくとも3バルブ以上を基準に植えます。シンビジウムの新芽は1バルブから1芽を原則とします。



カトレア

- ラン科
- 非耐寒性常緑多年草
- 開花期 種により異なり周年

〈性質〉

カトレアは洋ランの代表として、最もよく知られており、その花の豪華さと美しさから花の女王と呼ばれています。現在栽培されているカトレアはレリア、ソフロニティス、プラサボラなど、類似の属との間で作られた属間交配種が多く、おびただしい数の品種が作り出されています。

〈購入上の注意〉

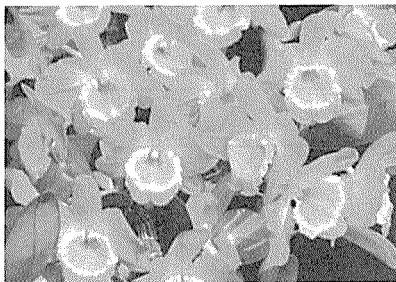
一年中鉢花として出回るようになってきたが、量として多いのは秋から冬の間です。加温室があり10℃以上保てるなら、花の咲いている時期に花の良否やウィルスの程度などを判定して購入できますが、保温できない場合は春から夏に購入します。

〈管理〉

開花株を購入したら、なるべく暖かい室内に置きますが、暖房器具のそばとか、温風の当たる場所は、湿度不足で花が早くいたむので避けます。弱光線を好む性質なので、常時窓辺に置く必要はありませんが、2日に1度くらいはガラス越しの光(レースのカーテン越しの)に当ててやります。

5月中旬から9月下旬までは戸外で管理すると生育がよく、50パーセント程度のしゃ光をし、風通しのよい場所に吊して夏を涼しく過ごさせます。

- ・温度……越冬するだけなら10℃、開花させるなら15℃は必要です。
- ・水………植え込み材料(コンポスト)の表面が乾ききったときに鉢の底から水が流れ出るまで、たっぷりと与えます。梅雨時はそのまま雨に当ててよく、梅雨明けから9月中旬頃までよく乾くので、毎日1回必ず与えるようにします。
- ・肥料……施肥は生育期のみとし、ほかの時期に与えません。油粕と骨粉を混ぜた置き肥は5月と6月に与え、ハイポネックス等の液肥は10日に1回くらいの割合で与えます。
- ・植え替え……株が鉢いっぱいになった時や、植え込み材料の水ゴケが腐ったときには植え替えますが、およそ2～3年に1回の割で行ないます。



デンドロビウム

- ラン科
- 非耐寒性常緑多年草
- 開花期 種により異なり周年

〈性 質〉

原産地はヒマラヤ、インドから東南アジア、オーストラリアにかけてで、日本に自生するセツコクも同属の植物です。

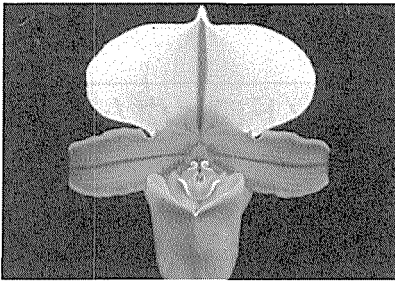
〈購入上の注意〉

ノビル系、デンファレ系(ファレノプシスタイプ)いずれも鉢物として購入する場合は、半分くらいが未開花のものをさがすと長く観賞できます。

〈管 理〉

ノビル系のギンギアナム、モニリーフォルメなどは低温で越冬できますが、デンファレ系は高温に管理する必要がある、管理の方法が異なります。梅雨ときは根の成長を悪くするので室内で育てますが、一般的に5月から10月までは戸外に出して直射日光に当て、充実した株に育てます。

- 温度……ノビル系は7～10℃が最適で、2～3℃の低温でも水やりに注意をすれば十分に越冬します。デンファレ系は最低5℃を保てば越冬できるが、失敗の危険は大きく、10℃以上を保つようにします。
- 水………夏は生育期で、十分な水やりが必要ですが、常に湿っているのはよくないので、少し乾いたら十分に与えるという方法を繰り返します。9月中旬以降はバルブの成熟期になるので、水を控えめにして、表面が乾いてから3～4日して灌水します。秋は乾きぎみにして低温に当てることが花芽をつけるコツです。
- 肥料……他の洋ランに比べて、少なめに与えます。ノビル系は油粕と骨粉を混合した置き肥と液肥を併用し、8月上旬頃には打ち切って、その後花が終るまで与えません。
- 植え替え……植え替えの時期は、開花直後が適しており、株分けを兼ねて2年後に行なうのがふつうです。古いコンポストを半分くらい取り去り、新しいコンポストに植えます。また早くふやしたい時は、花の終わった茎を切り取り、これを節ごとに輪切りにして水ごけにさしておきます。



パフィオペディルム

- ラン科
- 非耐寒性常緑多年草
- 開花期 種により周年

〈性 質〉

日本人向きの渋みのある、おちついた色彩と特異な花形で、愛好家の間に人気があります。原産地は熱帯～亜熱帯ですが、日差しの少ない湿地帯や石灰岩の岩肌などに根を張って育成しているので、日本の夏の暑さは苦手とします。系統により、耐寒力には差がありますが、比較的栽培は容易な部類に入ります。

〈購入上の注意〉

根がいたんでいる株はいかによい花を咲かせていても、葉につやがなくなっています。こうした株は花が終ると同時に株がいたみだし、回復するまで花が咲きません。

〈管 理〉

日陰を好む植物なので、一年中屋内で育てることができます。戸外で直射日光に当てると葉が黄色くなり、株も衰弱して花が咲かなくなります。また湿気を好むので過湿にならない程度に、一年中根に湿りを与えておきます。

- 温度……比較的低温に強く、5℃以上あれば冬を越すので、温室がなくても栽培できますが、適温は10～25℃です。斑入り葉系は冬期温度10℃以上を必要とします。
- 水……十分な空中湿度を保つことと、過湿にならぬ程度で水をたっぷり与えます。一年中コンポストが乾かないように注意し、鉢の表面が乾きかけたころにたっぷりと水を与え、鉢中の古い水や空気を入れかえます。
- 肥料……肥料が多すぎると、根腐れを起こしたり、葉が軟弱になって病気にかかりやすくなります。置き肥えは5月上旬と6月中旬に与え、液肥はハイポネックス2000倍液を5月～10月まで、月に2回くらい与えます。
- 植え替え……温室では花後に行ない、家庭では4月～5月に行ないます。水苔で植え替える場合は、カトレアのように硬く植え込まずに、多少軟らかめにしします。またその時、カイガラムシ等がついていないかどうかを確認します。



カランコエ

- ベンケイソウ科
- 非耐寒性多年草
- 開花期 冬～春

〈性 質〉

この属には、大型のものから小型のものまで約100種に及び数多くの多肉状の種が含まれています。一般にカランコエで知られているものは、葉が肉厚で乾燥に強く、コンパクトな草姿であり、花は冬に咲き、長もちするという利点もあって、古くから鉢花として人気があります。

〈購入上の注意〉

育てやすい草花ですが、よく枝分かれした茎をもつ株を選んだほうが花数も多く楽しめます。カイガラムシなどの害虫もついていないかどうか確かめて選びます。

〈管 理〉

春から秋までは戸外の風通しのよい所に置きます。冬は室内で2日に1度はガラス越しの日光に当てないと株が弱ります。

戸外栽培の場合の日当りは、春と秋は西日を除いた直射日光に当ててもかまいませんが、夏の日中だけは弱光線の下に置きます。

- ・温度……最低温度5℃で生育をつづけ、15℃以上で花芽を分化します。開花させるには8℃くらいの最低温度で十分です。
- ・水………多肉植物ですから、鉢土が常にぬれていると、根腐れを起こします。特に高温多湿の夏の間は、鉢土の表面がかわいてもすぐ水を与えないで、2～3日に1回くらいにします。
- ・肥料……濃い肥料をきらいますから液肥を使い、10日に1回の割合で与えます。置き肥をするのは避けたほうが安全です。
- ・植え替え……同じ鉢に長く植えたままにしていると、育ちが悪くなるので、2年に1回は新しい土で植え替えます。植え替えの適期は春か秋です。

〈繁 殖〉

種まきは5月頃に行な、さし木は春の終り頃に行うと、よく発根します。



シクラメン

- サクラソウ科
- 非耐寒性多年草
- 開花期 11月上旬～4月上旬

〈性質〉

シクラメンの名はギリシャ語で「円形」を意味し、花の終わった花梗が、らせん状に巻いて輪を作ることに由来しています。

〈購入上の注意〉

第一に下葉や葉冠の一部が黄変していないもの、葉をかき分けてみて生長点部の葉やつぼみが黒変して硬く乾いたようになっていたり、葉が反転しあるいは萎縮しているもの、葉の一部が黒ずんだり、葉柄や花梗の一部が軟らかく腐っているもの、カビが生じているものなどは避けます。

〈管理〉

冬の間は、室内の日当りのよい場所で十分に日光浴をさせます。夜、ストーブの近くに置くと、乾燥しすぎたり、暖房がきれたときの温度差が大きすぎて、株をいためる原因となります。

- ・ 温度……適温は、昼温18℃以下、夜温4～7℃と涼しい気候を好みます。
- ・ 水……過湿はさけ鉢の表土が白く乾いてきたらたっぷりと与え、次からも同様にいきます。
- ・ 肥料……開花期から花が終るまでは月に1～2回くらい薄い液肥を与えます。
- ・ 夏越し……花が終ったら、初夏の頃から夏一杯は、なるべく涼しい戸外で強い日光に当てないようにしながら、休眠に入らないように9月まで管理します。
- ・ 植え替え……9月に入ったら用土は田土と腐葉土を半々くらいに混ぜたものを用意し、ひとまわり大きな鉢に球根を半分出して植えてやります。

〈開花促進剤の活用〉

シクラメンの花を年内に咲かせるためには、10月上旬頃にベンジルアデニン液剤の200～300倍液を、葉をかきわけて、小さなつぼみにスプレーで2～3回散布します。この薬剤をかけることにより、小さなつぼみを早く肥大させ、自然開花より30日くらい早く花を咲かせることができます。



グロキシニア

- イワタバコ科
- 非耐寒性多年草
- 開花期 4～10月

〈性質〉

グロキシニアは、春から初夏にかけて華やかな釣鐘状の赤、紫、白などの大輪花を咲かせる。この植物はブラジルを中心に約30種ほどが認められ、塊茎を有する球根植物ですが、実生や葉ざしで簡単に栽培できるために、特殊なものの以外は、実生で1年草的に栽培しています。

〈購入上の注意〉

葉に傷みがない、花蕾や葉数が多くて、株がぐらつかないものを対象とし、あとは鉢としての美しさ、好みの色を選びます。

〈管理〉

直射日光にはとても弱く、特に夏の強光線に当てると、葉が日焼けを起したり、高温障害で花が咲かなくなったりします。直接日の当たらない、明るい室内で育てます。

- ・温度……20℃前後の温度を必要とするため、一般の家庭では5月に入ってから購入し、育てるようにします。
- ・水……やや多湿を好みます。鉢土がかわいてきたら、葉にかけないように注意して、たっぷりと水を与えます。ときどき霧を吹いて、空中湿度を高めます。
- ・肥料……薄い液肥を1ヶ月に2回くらいの割合で与えます。休眠期(花が終わったあと)は、水と肥料を徐々にひかれ、鉢ごと乾燥させるようにします。芽が動き出したら植え替えて肥料を与えます。
- ・植え替え……時期は4～5月で、球根がわずかに隠れるほどの浅植えとします。芽が出たら良い芽を1つ残してかきとり、かきとったものは、川砂などにさしておけばふやすことができます。

〈繁殖〉

種をまく場合は、10月か2～4月にまいて温室で育てます。葉ざしでふやす場合は、6、7月に葉柄をつけて砂にさします。花後、冬越しした球根が大きい場合は、いくつもの芽が出ているので数個に切り分けてふやします。



ノボタン

- ノボタン科
- 常緑広葉低木
- 開花期 6～10月

〈性質〉

熱帯アメリカ原産の植物です。花色は鮮やかな紫紺色ですが、株によっては赤みを帯びるものもあります。一つ一つの花は短命で、1日で散りますが、毎日のように次々と咲き続けます。魅力的な美しさとともに育てやすい鉢物といえます。

〈購入上の注意〉

花屋さんに売っている鉢は、わい化剤処理をしてあるため、あまり伸びていませんが、購入後、わい化剤が切れてくるとぐんぐん伸びるので、葉の色のよい、よく枝分かれした、しっかりとした株を選びます。

〈管理〉

直射日光を好むので、4月～9月頃までは戸外に置いて育てます。日照不足では花が咲かないことがあります。冬は寒さに弱いので室内で育てます。枝を切りつめ、水やりを控えて乾燥ぎみにし、日当りのよい窓辺で冬越しをさせます。このとき枝を強く切りつめると、翌年、花の咲くのがおくれます。

- ・温度……冬の間も花を見るには、最低20℃以上は必要ですが、冬を越すだけなら3～5℃で十分です。
- ・水……夏は毎日たっぷり与え、冬は控えめで5日から1週間に1回の割で与えます。
- ・肥料……肥料は少なめに与えます。特に窒素肥料が多すぎると株が徒長し、花がつきにくくなります。
- ・植え替え……4月下旬に新しい土で植え替えます。用土は赤玉土と腐葉土を混ぜたものでもよく、また田土でもかまいません。古い根は切りつめます。

〈繁殖〉

株分けもできますが、普通はさし木でふやします。5～6月に、充実した枝をとってさします。用土は川砂や赤土、バーミキュライトなどを用います。



ポインセチア

- トウダイグサ科
- 非耐寒性低木
- 開花期 11～12月

〈性質〉

中南米の高地原産で、クリスマスを彩る鉢物として有名であり、11月初旬にはもう店頭にならびます。最近の改良種は春まで葉や花が落ちず、長く楽しむことができます。

ポインセチアは短日植物で、日長が12時間半を下まわるとなると花芽分化を始める植物ですが、観賞に供される美しい部分は苞で、花は頂部に小さく咲きます。

〈購入上の注意〉

茎が太く、花苞が大きく、がっちりした株を選びます。花苞の中央に並んだ小花が2～3個開いてきたときに購入適期です。購入する時、株元が黒ずんでいたりと、花苞や葉がたれさがっているものはさけたほうがよいでしょう。

〈管理〉

耐寒性の強いものでは、居間などに置けば、冬中、十分に観賞できます。日中は窓ぎわや縁側に置いて、できるだけ日光に当てます。夜は室内に置きますがストーブの近くには置かないようにします。

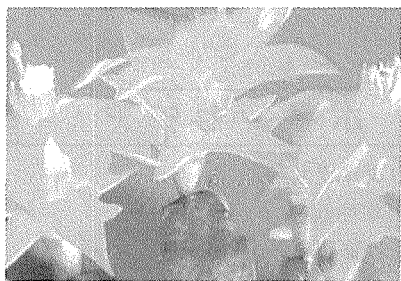
- ・温度……10℃程度は保ちたいが、5℃でも耐寒性の品種は大丈夫です。
- ・水……生育期は十分に与えるが、観賞期は少しひかえめとし、鉢の表面が乾いてきたら与えます。
- ・肥料……10日に1回くらいの割合で水やりを兼ねて、液肥を与えます。冬は与えないか、1ヶ月に1回液肥を与える程度にします。

〈繁殖〉

さし木で行ないます。6月中～下旬に伸びた茎の頂部を10センチくらいに切って、切り口を水につけ、白い汁液を洗ってから、川砂かパーミキュライトにさします。

〈病害虫〉

さし木をして根が出たものを鉢に植えますが、その時、高温であれば地ぎわから枯れることがある。これはリゾクトニアによるもので、ポマゾールFやオオソサイドを水に溶かして鉢の中へ注いでやります。



シャコバサボテン

- クリスマスカクタス
- サボテン科
- 非耐寒性常緑多年草
- 開花期 11～12月

〈性 質〉

ブラジル原産で長さ4センチ、幅2センチくらいの莖節を連ね、その先端に花をつける。側縁の突起が鋭い形態のものをシャコバサボテン、丸みを帯びたものをカニバシャボテンといい、シャコバサボテンは比較的早く開花することから、クリスマスカクタスともいわれています。

〈購入上の注意〉

次々につぼみが出てきて咲くというのではなく、今、ついているつぼみが咲ききると花は終りなので、つぼみの多い株を選びます。

〈管 理〉

5月から9月いっぱいには戸外で育てます。真夏の日中は半日陰の所に置き、強光線をさけて育てます。秋になってからは、よく日に当てます。9月下旬頃から小さなつぼみが見え始めますが、この時、置き場所を変えたりして環境が急に変わるとつぼみが落ちることがあります。

短日植物で、日が短くなると花が咲きます。室内に置いてある場合、電灯の明るさに感じて花芽ができないことがあるので注意します。また、つぼみの小さい頃に空気がかわきすぎていると、つぼみが落ちてしまうことがあるので、ときどき霧吹きで、葉にもつぼみにも十分湿りけを与えます。

- 温度……花のつく前は夜温を13℃、つぼみが見えたら16～20℃、日中は20℃以上を保ちます。冬は3～5℃でよく、室内の暖かい所に置けば越冬します。
- 水……春から夏にかけては、葉水も兼ねてたっぷり与えます。8月は水やりを控えて乾燥ぎみに育てると、花つきがよくなります。低温になるにしたがって、水やり回数を減らし、冬の間は乾かさないう程度に与えます。
- 肥料……生長期の5～7月には油粕に骨粉を混ぜたものか緩効性肥料を1ヶ月に1回置き肥として与え、また2週間に1回液肥も与えるようにします。
- 植え替え……3月下旬から4月に、ひとまわり大きい鉢に植え替えます。根は過湿をきらうので、排水のよい土に植えます。



セントポーリア

- イワタバコ科
- 非耐寒性多年草
- 開花期 周年

〈性 質〉

東南アフリカに約11種の自生をみる、温室性の多年草です。

〈購入上の注意〉

葉がそろっていて枚数が多く、つやのあるものを選びます。下葉がたれていたり、徒長的なものは避けます。鉢土がぬれているのに葉先がたれているのは、根腐れの心配があります。

〈管 理〉

セントポーリアは薄日を好む草花です。夏はレースのカーテン二重越しくらいの日光に当て、冬でも晴れている日は、レースのカーテン一重越しくらいの薄日にします。夏に風通しの悪い場所に置くと、軟腐病が発生します。

- ・温度……18～25℃が理想的ですが、四季のはっきりした日本の気候では、夏と冬が最も注意して栽培する必要があります。冬は室内に置いても5℃以下になると枯れるので、ワータンケースなどに入れて保護します。
- ・水……鉢土の水分はほどほどにし、温度を高めるとよく咲きます。根元への水やりは、葉の先端が少したれてしおれるようになってから行ないます。冬は暖房により空気が乾くので、夜間1～2回葉に霧をかけます。水やりは、冬は午前10時頃、夏は朝早くか、夕方がよいでしょう。
- ・肥料……肥料は油粕のような窒素質の肥料はやめ、ハイポネックス等の液肥を月2～3回与えます。場合によってはマグアンプKやI B化成等の緩効性の化成肥料を4号鉢で2～3g程度鉢土の表面に置いてやります。
- ・植え替え……2年以上たった株は大きくなるため、春に植え替えます。用土は腐葉土を主体に軽くて水はけのよい土を用います。

〈繁 殖〉

葉ざしが最も簡単で、必ず葉柄の一部をつけ、川砂かバーミキュライトにさします。繁殖の適温は20～22℃で、湿度を保つことが大切です。



ゼラニウム

- フウロソウ科
- 非耐寒性多年草
- 開花期 周年

〈性質〉

園芸上ゼラニウムと呼ぶのは、南アフリカ原産のペラルゴニウム属のインクイナンスとゾナレ、および交配種のホルトルムなどで、ゲンノショウコやフウロソウを含む植物学上の分類の属とは区別されます。

四季咲き性が強く寒さにも強いことから、最近ではよく花壇、ベランダの装飾に利用されています。

〈購入上の注意〉

葉が大きすぎず、しまった感じの株を選んで購入します。葉が黄ばんでいたり、根元が黒くなっているものは避けます。

〈管理〉

夏季の高温多湿をきらい、乾燥には比較的強いが、過湿には弱く、根腐れを起こします。落した花がらが葉についたままになっていると、そこから灰色かび病などが発生することがあります。咲き終った花や枯れ葉は、そのつど取り除きます。

- ・ 温度……冬期の生育温度は8～10℃であるが、凍らさない程度にすれば十分越冬します。
- ・ 水………比較的乾かし気味の方が生育がよく、過湿になると腐りやすい。梅雨の時期は雨に当てないようにとくに冬は乾燥気味に保ちます。
- ・ 肥料……生育の旺盛なものなので十分に与えるが、水をやる量が少ないために分解も少ないので、置き肥よりも液肥として与えます。
- ・ 植え替え……植え替えは毎年行ない、根と地上部のバランスを考えて切り詰め、毎年同じような鉢の大きさに保ちます。

〈繁殖〉

種子をまいてふやすこともできますが、さし芽でよく発根します。4～6月、9～10月が適期です。葉を3～4枚つけて節のすぐ下で切り、下葉を落して、川砂、鹿沼土、パーミキュライトなどの清潔な挿床にさします。



クジャクサボテン

- サボテン科
- 非耐寒性常緑多年草
- 開花期 春～夏・冬

〈性質〉

クジャクサボテンはエピフィラム属で代表されるものが多く、園芸的に多くの属の交配によって作られています。エピフィラムの名は、「エピ(着生)」と「フィロン(葉)」の二語からなります。開花期は、春のものが多く、中には冬のものもあり、昼咲きと夜咲きのものに区別されます。

〈購入上の注意〉

買う時には、葉(葉状茎)の多い、大きな株を買います。あまり小さな株では、開花に必要な大型の葉を出す力がありません。長く厚みのある葉が5～6枚以上あれば、来年も花を見ることが出来ます。

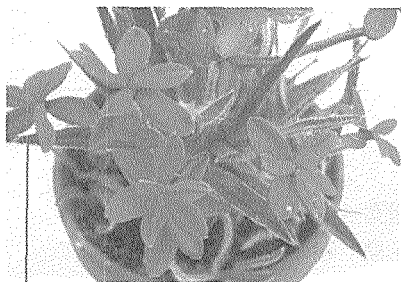
〈管理〉

株の高さは60センチくらいで止めます。50センチくらいに伸びた葉は、先端を摘みとって、伸びを止めます。この葉から出る芽は、先のほうに出るものは1センチくらいを残して先端を摘みとり、株元から出る芽は伸ばします。株の形を整えるばかりでなく、株を充実させるために、 unnecessary 芽は取り除きます。

- ・ 温度……夜温10～13℃、昼温20～22℃を目標とし、冬期の夜温はつぼみのつきをよくするために低めに保ちます。
- ・ 水………4～8月中旬までは十分に水を与え、8月下旬～9月下旬までは翌年の花つきをよくするために、全く与えません。冬は極力灌水を控えます。
- ・ 肥料……2週間に1回、薄い液肥を与えます。花が咲き終わってから8月までは月に1回ほど、油粕を水で練って置き肥として与えるのも効果があります。
- ・ 植え替え……2～3年以上たつと、鉢が根でいっぱいになるので植え替えをします。ベニクジャクサボテンは4～7号鉢に、月下美人は高さが1.5メートル位になるので7～10号鉢に植えます。4～5月頃が適期です。

〈繁殖〉

初夏から夏にかけて茎節を10センチくらいの長さに切り、切り口の乾燥を待って(普通3～4日ほど放置する)川砂にさします。



ロードヒポキシス

- アッツザクラ
- ヒガンバナ科
- 非耐寒性多年草
- 開花期 4～6月

〈性 質〉

属名のロードヒポキシスは、バラ色の花の咲くキンバイザサ属ということの意味します。一般にはヒガンバナ科に入られているが、キンバイザサ科に独立して分類されることがあります。俗にアッツザクラの名で呼ばれているが、アツ島には関係がなく正しい呼び方ではありません。南アフリカ・ナタール産の一属一種の植物です。

〈購入上の注意〉

特に問題はない。

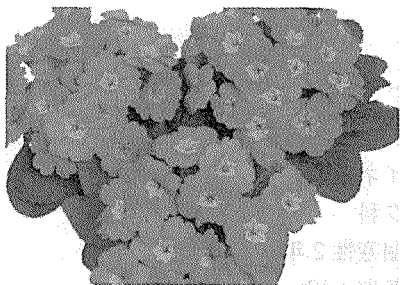
〈管 理〉

生育期間中は十分日光の当たるところで栽培すると、開花時の姿がコンパクトになり、分球も旺盛になります。葉が枯れたあとも鉢植えの状態で、土が湿気を保つように管理し、翌春植えかえます。

- ・温度……冬は休眠して葉が枯れているが、鉢や箱植えの場合は凍らぬように注意します。
- ・水………根部は球茎をしており、過湿は禁物で、特に真夏の高温時は湿らせすぎるとよく腐るので、乾かし気味とします。また休眠期は水やりを中止します。
- ・肥料……春から夏の生育期には毎月1回油粕の置き肥か、固形の化成肥料を与えます。なお、真夏の時期は少しひかえめとします。
- ・植え替え………素焼き鉢でもプラスチック鉢でもよいが、3号か4号の平鉢を用意し、3号鉢に5～6球植えとします。あまり深植えとはせず、球の先が少し出る程度に植え込みます。

〈繁 殖〉

分球による。春に分球した小球は、トロ箱やプランターに植えて養成するとどんどん大きくなり、ふえてくれます。1年の培養で開花株となるから楽しみです。



プリムラポリアンサ

- ポリアンサス
- サクラソウ科
- 非耐寒性宿根草
- 開花期 1～3月

〈性質〉

プリムラは、ラテン語のプリマ(最初)からつけられた属名で、早春に咲き出すことにちなんでいます。英名のポリアントゥスの名でも親しまれている本種は、ヨーロッパ原産の3つの種が交雑されてできた園芸種で、古くから花壇用として利用されることが多かったが、バシフィック・ジャイアント系が育成されてからは、鉢物としての需要が増大し、現在に至っています。

〈購入上の注意〉

花茎が太く、花茎数が多く、葉数が多く、濃い緑をした輝きのある葉をもっているものがよい。もちろん、花数が多く、花が正形で大輪、色彩の鮮明なものを選びます。

〈管理〉

日中は、日のよく当る窓辺や、縁側などに置きます。この仲間はプリムラのうちでも寒さに強く、かなりの低温でも育つが、年末から花を咲かせるためには秋おそくフレームに入れて加温してやります。

- ・温度……夜温3℃以上の条件のところには置けば大丈夫です。しかし、反対に夏の蒸し暑さには弱く、7～8月は日陰の涼しい場所に置きます。
- ・水……十分に与えるが、冬期で凍る心配があるときは正午前後に与えます。受け皿に水をためておくと根腐れの原因になります。
- ・肥料……花の時期が長いので、2週間に1回、薄い液肥を与えます。濃すぎると肥料まけします。
- ・植え替え……7月～9月初めの暑い間は、植え替え、株分けをひかえます。

〈繁殖〉

春の花が終ったら半日陰の地に鉢を抜いて植え、秋の彼岸のころに株分けをして、日当りに出します。



シネリア

- サイネリア
- キク科
- 非耐寒性2年草
- 開花期 12～4月

〈性質〉

わが国にこの花が伝えられたのは、明治10年(1877)で、別名をフウキギク(富貴菊)と呼ばれ、以来ずっと西洋草花の代表的な花として親しまれています。また「シ」という音が縁起が悪いので「サ」と読み変えられ、一般にはサイネリアといわれています。

〈購入上の注意〉

草姿が低くまとまり、植物として徒長していないもの、葉が枯れていないもの、つぼみの数が多く、花の形のよいものなどに注意し、あとは花色が多いので好みにあった色を選びます。

〈管理〉

日当りの悪い室内に長く置くと、徒長したり花色があせてくるので、日中はできるだけ日当りのよい窓辺に置きます。

- 温度……比較的寒さに強い植物ですから、高温にする必要はなく、5℃あれば十分です。0℃以下にならなければ枯れる心配はありません。
- 水……葉が大きいので、水分の蒸散量も当然多いので、水やりは1日1回鉢の底から流れ出るくらい与えます。
- 肥料……窒素成分が不足すると生育は悪くなり下葉が黄変します。一方、多すぎると軟弱となり葉が大きくなりすぎるので、月に2回ほど液肥を与えます。

〈病害虫〉

葉に褐色のややくぼんだ斑点が出るのは褐斑病で、小斑点から同心円斑に拡大するのが輪紋病です。どちらもマンネブダイセンかオーソサイドで予防します。

育苗中および開花の前後のころにアブラムシがよくつきますが、ダイジストンかオルトラン粒剤を鉢内にひとつまみ入れれば、約1ヶ月間防除できます。



リーガースベゴニア

- シュウカイドウ科
- 非耐寒性多年草
- 開花期 秋～春

〈性 質〉

リーガースベゴニアはエラチオールとも呼ばれ、最近話題の系統で、西ドイツのオット・リーガーの作出です。エラチオールの特徴は葉が厚く、葉の先が鋭角的であり、球根ベゴニアに草姿が似ているが、花もちがよく多花性です。

〈購入上の注意〉

ハナベゴニアの類では、葉辺から枯れ込みの入っているものはつぎつぎと枯れることが多いから、まず除外し、茎部の病徴のない咲きはじめの株の多いものを選びます。管理しだいでかなり咲き続けるものですから、健全なものを第一とします。

〈管 理〉

戸外、室内を問わず、日当りのよい所で育てます。

- 温度……冬季は5℃以上に保温した方が安全です。夏の高温時には50%程度のしゃ光をして、涼しくします。
- 水……鉢の表面が白っぽくかわいたら水を与えますが、冬はさらに2～3日してから与えます。与える時は鉢底の穴から流れるくらいたっぷりと与えます。
- 肥料……培養土は有機質に富んだ多孔質のものがよく、水はけが悪く鉢土が過湿になると下葉が落ちるので注意します。

生育中の株には、2週間に1回くらいハイポネックス等の液肥を稀釈法の2倍くらいにして与えます。

- 植え替え……田土と腐葉土を半々くらいに混ぜた用土に植え替えますが、リーガースベゴニアは他のベゴニア類よりも酸性を好むので、pHを4.5～6.5の範囲とします。

〈繁 殖〉

葉ざし、葉芽ざしともさし床を20℃前後に保温し、換気に注意して行ないます。



ガ ー ベ ラ

- キク科
- 非耐寒性宿根草
- 開花期 5～11月

〈性 質〉

南アフリカの原産でキク科に属し、長く伸びた花茎につややかな色彩の花を春から秋まで開花しつづけます。わが国のセンボンヤリの仲間であり、和名はオオセンボンヤリ、ハナグルマなどと呼ばれています。

〈購入上の注意〉

葉は濃緑で厚くしまっており、花茎は太くて短いものの中から、花を確かめて選びます。

〈管 理〉

原産地の気候は冬暖かく、日照と降雨に恵まれ、夏はあまり高温にならない場所なので、これに少しでも近い場所で栽培します。日照不足になると葉ばかりがたくさん繁って徒長し、花芽がつきません。

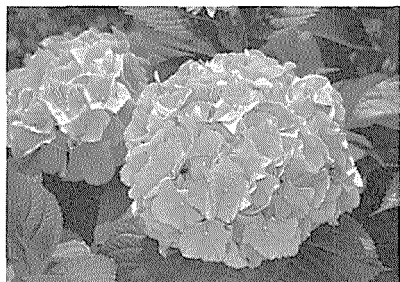
花が終わったものは花がら摘みを行ないます。花茎を持って左右に振るように引っぱると抜けます。

- ・ 温度……20～25℃を生育適温としますが、比較的寒さに強く、地上部は枯れても休眠して越冬します。
- ・ 水……土に湿りけが多いと、根が腐るので、水やりはやや控えめに行ないます。
- ・ 肥料……緩効性の大粒の化成肥料で、リン酸、カリ分の多いものを2ヶ月に1回、5～6粒与えます。
- ・ 植え替え……用土は赤玉土に堆肥か腐葉土を3割ほど混ぜ、カリ分の多い緩効性化成肥料をひとつまみ基肥として入れて植えます。

ガーベラは中性に近い土壌を好み、酸性土壌では葉がちぢれたり、黄色や紫色に変色して生気がなくなり育ちません。このため土壌酸度を6.0～7.0に調整する必要があります。

〈病 害 虫〉

高温乾燥期にハダニが発生するので、殺ダニ剤(ケルセン、モレスタン、エイカロールなど)を散布します。



ハイドランジア

- 西洋アジサイ
- ユキノシタ科
- 落葉低木
- 開花期 5～7月

〈性 質〉

鉢物として最近人気を呼んでいるハイドランジアーは、アジサイがヨーロッパで改良されて、再び日本へ導入されたものです。花色は鮮明で、美しく、青、赤、白等があります。

〈管 理〉

葉が大きく蒸散作用が盛んなので、かん水を十分行います。真夏の強光線をさけて、日陰に置くか、寒冷砂をかけます。

摘芯は7月中旬までに行います。摘芯が遅れると、秋に花芽が形成されません。早すぎると枝側が伸びすぎて鉢物としての草姿が乱れます。摘芯後、2～3cm伸びた時B-ナインの300倍液を葉面散布して茎の伸長をおさえます。

肥料はかん水量が多く成分が流亡しやすいので、多めに施します。

土壤条件により花色が変化しやすく、青色系の品種は土壌が酸性(PH5)の時に美しい青色となり、赤桃系品種は中性からアルカリ性の土壌で良い色となります。

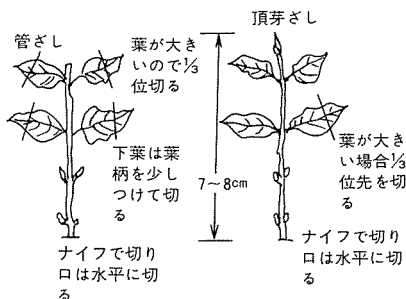
真夏以外、特に花芽のできる9月から10月は、必ず日当りの良い所に置きます。また通風にも気をつけます。

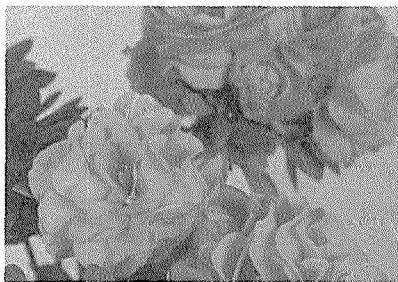
病気はウドンコ病(モレスタン、トップジンM等)、害虫はアブラムシ(エカチンTD、スミチオン等の散布)ハマキガ、コガネムシ(カルホスの散布)ハダニ(プリクトラン、モレスタン、ケルセン等の散布)が発生しやすいものです。害虫の予防剤としてオルトラン粒剤の施用も効果があります。

〈繁 殖〉

6月頃さし木を行います。さし木には頂芽ざしと管ざしがあって、(図参照)用土は赤玉土、鹿沼土、パーミキュライト等とします。

さし穂の作り方





アザレア

- 西洋ツツジ
- ツツジ科
- 常緑低木
- 開花期 12～5月

〈性質〉

初春の鉢花として、年末から初春にかけて店頭にでまわっています。ツツジやサツキと同じ仲間で、中国原産のツツジがヨーロッパへ渡り、ほかの種類と交配改良された園芸種です。系統はベルギー系とアメリカ系があります。

大部分の品種は、日のあたる場所におきますが冬季間は室内に入れます。

〈管理〉

肥料は苗養成中は油粕の置き肥を1～2ヶ月に1回の割合で施します。油粕の代わりに粒状化成肥料を施します。仕上げ鉢への鉢あげは5月に行い元肥を施し、7月油粕を追肥します。

摘心は軽く行い新梢の発生をそろえます。この時アトリナール60倍液で処理をすれば、発生する芽数が増加し、株張りも良くなります。

また、わい化と花芽分化促進のためB-ナインの250倍液を2回散布します。1回目は新梢が3cm生長した時、2回目は1回目の処理後2～3週間後に行います。この2回の処理により新梢をコンパクトにします。

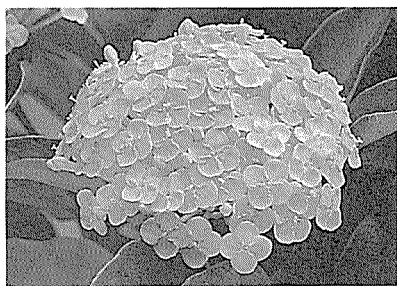
花芽は休眠し、その後低温にあい休眠が破れて開花します。また低温のかわりに、ジベレリン400 P P mを株全体に噴霧してもよく、この処理は早くても9月上旬以降に行います。開花促進のためには、低温処理(株冷蔵)を行うか、上記のようにジベレリン処理を行います。

害虫はゲンバイムシ(スミチオン剤等散布)やハダニ(モレスタン等散布)が発生します。

〈繁殖〉

さし木で行います。時期は5月～6月が、本年伸びた枝の先を5～7cmに切って鹿沼土にさします。

苗養成の用土は鹿沼土とミズゴケをこまかくしたもの(またはピートモス)を同量混ぜたものを使います。仕上げ用土は鹿沼土3、ピートモス1の割合とします。



サ ン タ ン カ

- イクソラ
- アカネ科
- 非耐寒性常緑低木
- 開花期 5～8月

〈性 質〉

熱帯産の小型花木で、樹高が低く、その頂部にオオデマリに似た花が咲きます。花色は朱赤色、橙赤色が多く、黄色、白色もあって、鉢花として親しまれています。栽培環境は、夏の間は明るい日陰におき、秋から春にかけては、十分に日光にあてます。生育適温は18～22℃です。

〈管 理〉

越冬は5℃以上が必要で、10℃以上を保つことができれば、落葉しません。

鉢土は田土または畑土3、腐葉土2、川砂1の配合土が適します。

肥料は基肥として、緩効性のマグアンプKやハイコントロール等を施し、追肥として、液肥かI B粒状化成肥料を5月～10月頃まで月1回の割に施します。

鉢土は常に少し湿り気味の方がよく、一度過乾燥にすると根いたみが激しく回復が困難です。

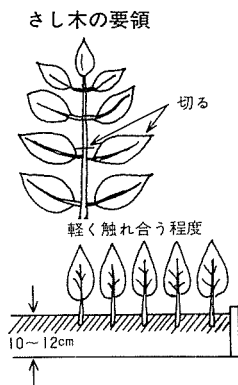
秋に入り低温となるにしたがって、かん水を、次第に控え目にします。

また秋の低温にあうことによって花芽分化が順調に行われると言われていますがサントンカの花芽分化期は10月下旬頃で、これが確実にされるには、側枝が4節以上に伸びた株が、約40日間10～15℃にあうことです。

病気はあまり発生しませんが、害虫ではカイガラムシ(冬季から早春に竹べらなどでカイガラをかき落とし、幼虫発生期の6～7月にスプラサイドを10日おきに数回散布)、ハダニ(モレスタン、エイカロール等殺ダニ剤を交互散布する)アブラムシ(鉢土にオルトランを少量まく)がつくのでカッコ内のような処置をします。

〈繁 殖〉

繁殖は6月頃、枝の先端を5～10cmの長さに切り、それぞれの葉を半分程切りつめ、水あげを十分してから、鹿沼土か川砂にさし木します。その後、1ヶ月位は日陰状態で湿度を高くして管理します。発根は1ヶ月位です。(図参照)





ハイビスカス

- ブッソウゲ
- アオイ科
- 非耐寒性常緑低木
- 開花期 6～9月

〈性質〉

ハイビスカスは、フヨウやムクゲと同じ仲間で、ハワイや沖縄で親しまれています。花色は紅、桃、橙、黄、白等があり、花の咲き方も一重、半八重、八重等があります。品種も多くありますが、大別すると、在来系(沖縄の民家等にある赤い花)、ヨーロッパ系(オランダ、ベルギー等で栽培され樹高は低くよく分枝し、花色は赤、黄、橙等)ハワイ系(花は大きく、色も華やかで、市販のものは大部分がこの系統です。)があります。

〈管理〉

日照と温度さえあれば、年中花をつける熱帯花木で、日陰では徒長して、花は咲きません。冬季越冬させるだけならば5℃以上で、花を咲かせるには15℃以上が必要です。

鉢土は、田土か赤玉土7に、腐葉土3、の割合とします。生育期間中4回ほど油粕と骨粉を置き肥えとして与えます。

矮化剤としてのCCCは1000倍液で新芽が5cm位伸びた頃葉に散布します。また徒長防止、葉色を良くするため、2回目は800倍液を散布します。スリートンは1鉢当たり1CCを灌注すると効果的です。

害虫は新芽が伸びる頃発生するアブラムシにはエカチン、スミチオン散布、夏に発生するハダニにはケルセン、モレスタン等を散布して対応します。

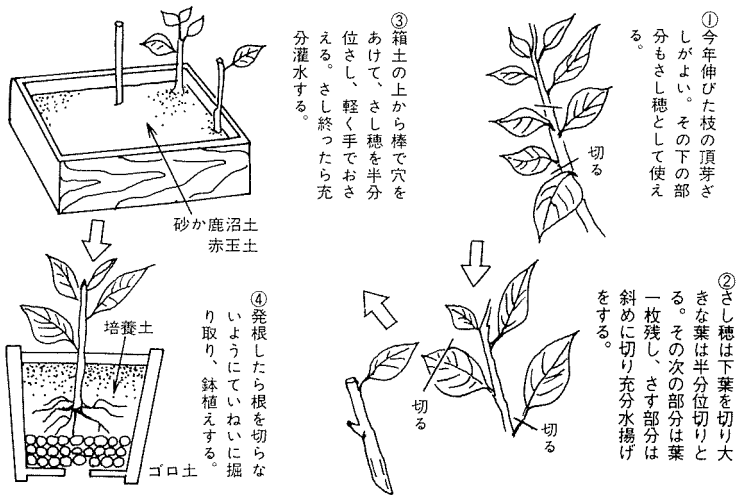
生長が旺盛なので鉢では根づまりを起こすので、ひと回り大きな鉢に植えかえるか、5月頃から日当たりと土壌の良い場所へ植え込み、10月には枝を半分位に刈り込み鉢あげして室内に入れます。

〈繁殖〉

さし木を行います。枝を10cm位の長さに切り、葉をそれぞれ約半分に切り除いたさし穂を川砂、鹿沼土、パーミキュライトに、十分水あげをして発根ホルモンをつけてさしつけます。(図参照)

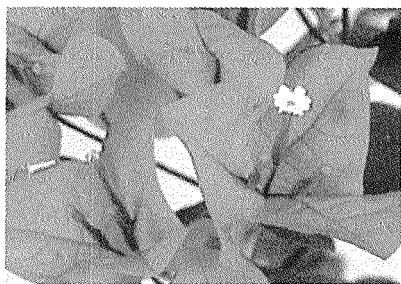
時期は、初夏、秋で20℃以上の温度が必要です。

ハイビスカスのさし木



＊花の格言・名言より

- ◇青は藍より出でて藍より青し＝弟子が先生よりすぐれ、子が父にまさることをいう。
- ◇朝顔の花一時＝栄えている期間の短いことをいう。
- ◇桜に百年の樹少なく、松に千年の緑多し＝華やかな花を咲かせるサクラの木が、マツよりも寿命が短いように、人の世も、繁栄を極める家は数代と続かず、質朴を守る家は子々孫々長く続くものである。
- ◇桜は三月・菖蒲は五月＝ものにはいちばんよい時期があるということ。
- ◇手にとるな、やはり野におけれんげ草＝野の花は野に咲いていてこそ美しく見えるのであって、人にもそれぞれ、その人にふさわしい場所がある。
- ◇十日の菊、六日の菖蒲＝菊は9月9日の重陽の節供に、菖蒲は5月5日の端午の節供に供えるべきもの、十日や六日では一日遅い。物ごとが間に合わないことのたとえ。



ブーゲンビレア

- オシロイバナ科
- 非耐寒性半つる性植物
- 開花期 5月～9月

〈性質〉

ハイビスカスとともに良く知られている熱帯花木です。一般に花といわれている部分は苞で、花は苞の内側にあります。色は濃桃色が知られており、他に赤、白、橙色があります。また一重咲と八重咲があります。

開花は日光と温度に影響され、一般に一定の大きさに達した株が気温15℃以上で十分な日照のものとよく開花します。

〈管理〉

生育適温は25℃くらいで、越冬には3℃以上が必要です。低温期は灌水を控えます。

用土は肥えた土が良く、赤玉土5、腐葉土3、川砂2とし、クロロシスが発生しないよう、やや酸性にします。

仕立て方は柱状仕立てにするのが一般的です。開花をそろえるため、開花3カ月前から1カ月間くらい(摘心後新芽が伸び始めた頃より)かん水を控えると着花数が増し、そろって開花します。

肥料は鉢あげや鉢がえの時基肥を施しますが、春から夏の生育期間中は、油粕の置き肥を3回位施します。

害虫はアブラムシが新梢と花に発生するので、エカチン、スミチオン等を散布します。

室内で花が落ちやすいのは光線の不足です。とくに、一重咲の系統は環境が急変すると花梗の部分に離層ができやすく一時に落花します。落花を防ぐため、2.4D 4万倍液か、 α -ナフタレン錠20PPMを花に散布するとある程度効果があります。

〈繁殖〉

さし木で行います。5～6月に若い緑枝より、やや褐色になった充実した枝を8～10cmに切りさし穂とします。発根ホルモンを溶かした水で3～4時間水あげし、鹿沼土、赤玉土、バーミキュライト等にさします。



シクラメン



クジャクサボテン



ゼラニウム



ハイドラングア



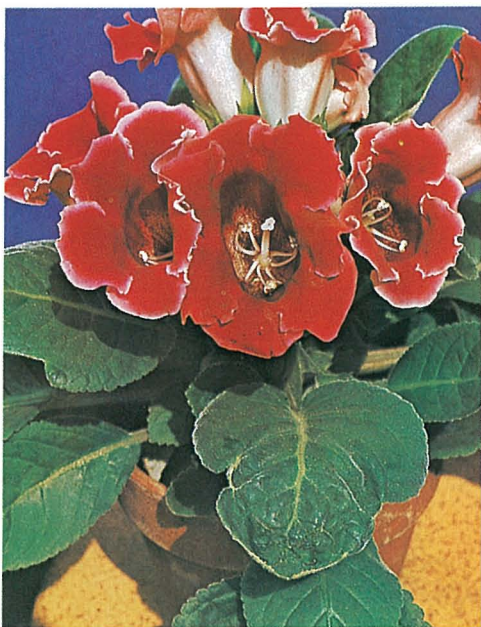
デンドロビウム



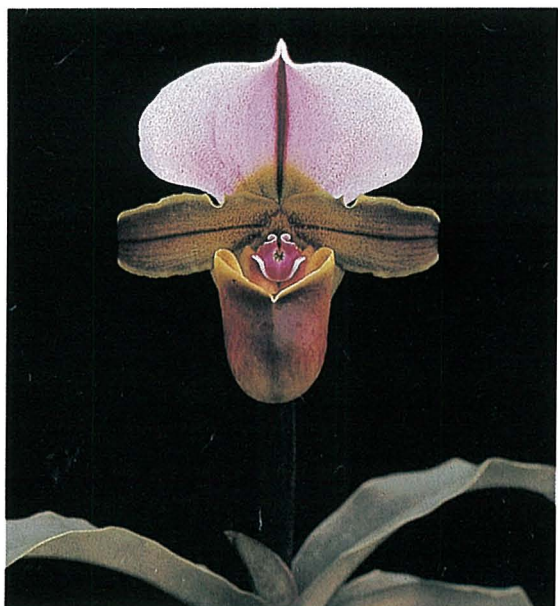
ポインセチア



リーガスペコニア



グロキシニア



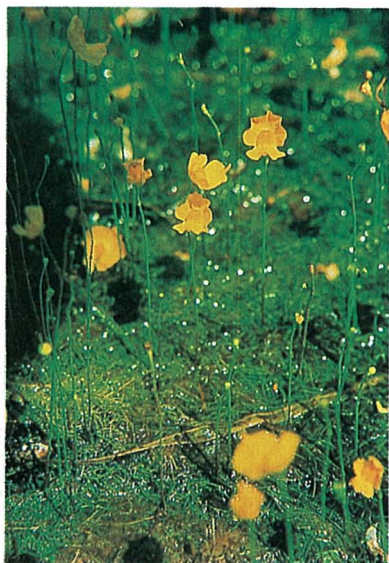
パフィオペディラム



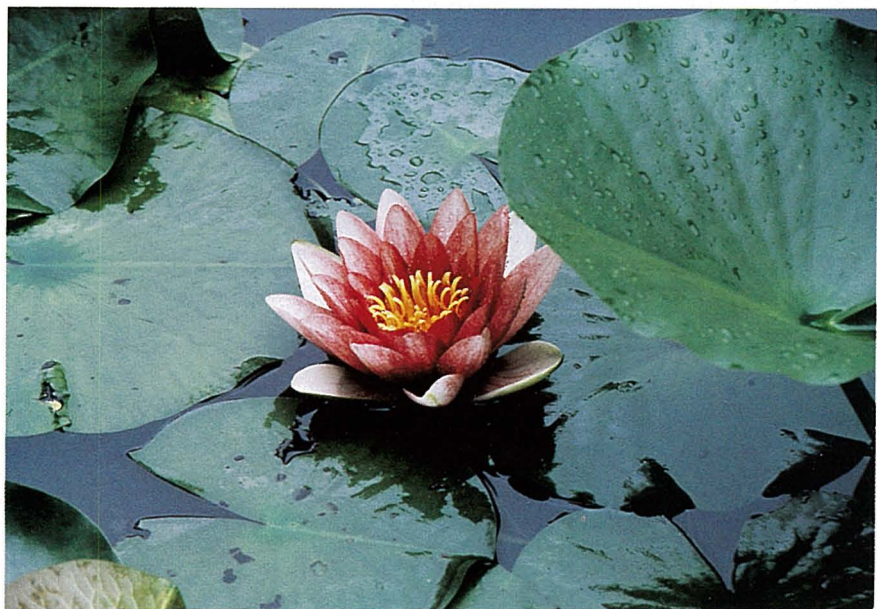
カトレア



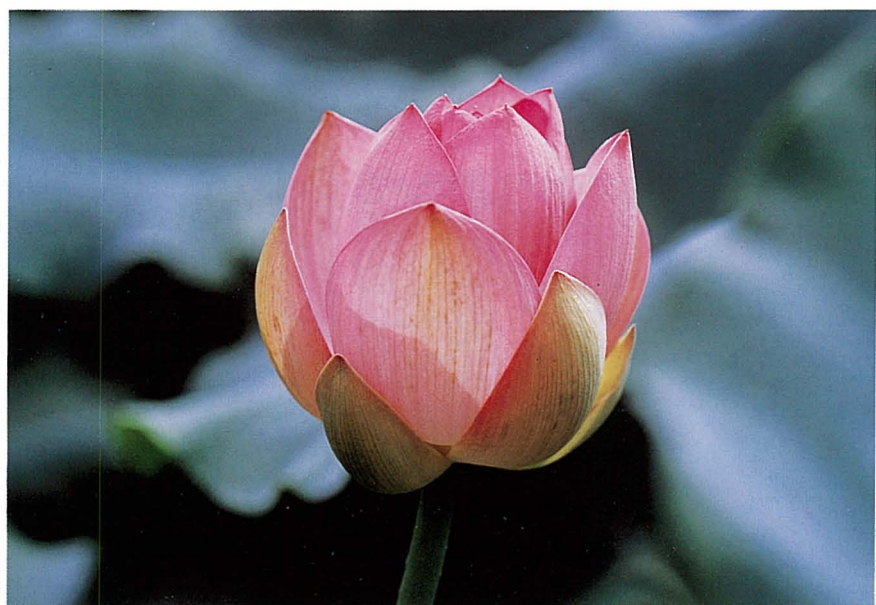
ミズバショウ



タヌキモ



スイレン



ハス

6. 新 し い 花



スパシフィルム

- サトイモ科
- 中南米コロンビア原産
- 開花期 4～9月

〈性 質〉

近年人気が高まっており、5月から10月まで園芸店で多くみかけます。花名は属名です。

葉は濃緑色で、葉だけでも鑑賞できますが、白い花は花卉でなく苞です。ミズバショウやカラーと似ており、手入れがやさしく花の長もちする春植えの常緑多年草です。

〈栽 培〉

日陰が好きな植物と思われがちですが、(耐陰性が強いので)本来は好日性で、薄日が長くあたる環境を好みます。しかし直射日光を嫌います。

急激な温度変化は絶対にさけ、冬でも10℃位の温度を保ちます。根張りが良いので年1回の植えかえが必要で、時期は5月から7月に行い株分けもします。

用土は水苔、腐葉土、ピートモスの混合か、赤玉6、腐葉土3、パーライト1の混合したものでよく、肥料は緩効性の化成肥料を基肥とし、液体肥料(リン酸分の多いもの)を追肥として春から秋にかけて週1回施します

かん水は十分行います。特に気温の高くなる時期はたっぷり与えます。



へーへ

- ゴマノハグサ科
- ニュージーランド原産
- 開花期 4～6月

〈性質〉

昭和40年代にニュージーランドから日本へ導入された。へーへは属名で、ニュージーランドには、この仲間が100種以上あるといわれています。

常緑性の低木で、春から初夏にかけて開花します。用途は、鉢花が主体ですが切り花の利用もあります。

主な種類として、グリーンフラッシュ(葉は光沢のある濃緑色で、花は純白)と、エクランテ(花は濃桃色)ミッド・サマービューティ(紫色)などがあります。

〈栽培〉

さし木で簡単に殖やせます。時期は5月～6月に行います。仕立は小苗時に摘芯して、わき枝を出しコンパクトな樹形とします。日当りの良い場所を好みますが、夏は日除けが必要です。寒さには強く、秋から冬へかけて低温にあわすことも必要です。

鉢は育苗時3～4号鉢、仕上げ時は5～6号鉢を用い排水のよい用土を使います。肥料は緩効性の化成肥料を与えます。

Q&A

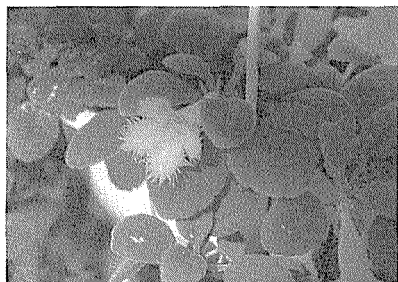
花づくりこんなときどうする？

Q デンドロビュームの花が終わったのですが、その後の手入れのしかたがわかりません。花が終わった茎は切り取ったほうがよいのでしょうか。

A デンドロビュームには、ノビル系のものでファレノプシス系のものであり、それぞれ性質が異なります。

ファレノプシス系のデンドロビュームは、一度花が咲いた茎のさらに上部の節位から、その後2～3年にわたり、新しい花茎を伸ばしてきます。そして次々と花を楽しむことができるわけですから、古い茎は切りすてずに育てます。

ノビル系のデンドロビュームは、一



アルソピア・ディアンティフローラ

- イワタバコ科
- 中米原産
- 開花期 5～10月

〈性 質〉

イワタバコ科の仲間にエスピシアという属があり、このエスピシアはメキシコ南部から中米、ブラジルにかけて広く自生しており、現在約9種が確認されています。最近になって、このエスピシア属の見直しが行われ、ディアンティフローラと他1種が新しい属、アルソピアに移りました。

このアルソピア属はメキシコから中米にかけて分布しており、森林に生育し、ランナーを伸ばし、その先端に子株を生じて、樹上に着生する植物です。アルソピア・ディアンティフローラの葉は小さくて丸い緑色で、脈部は暗赤色を帯び、花は白色で先は細かく切れ込んでいて、優雅で美しい。

〈栽 培〉

エスピシアは寒さに弱く最低15℃が必要でしたが、このアルソピアはかなり低温に耐え、冬期室内で育てれば十分越冬します。高温に強い植物なので、真夏でも盛んに生育し、かわいい花を次々と咲かせてくれます。夏場は戸外の半日陰下で栽培するとよく生育しますが、一年中室内で栽培するのもよい。つり鉢栽培がいちばん適しています。

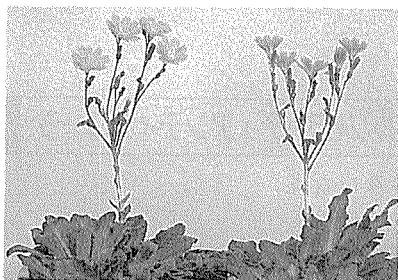
〈繁 殖〉

ランナーに生じた子株を切り取って、さし木で殖します。発根する場所は節部からなので、節部は必ずさし木用土の中に埋め込みます。さし木の時期は、秋に行い、すっきりとした姿で越冬させます。

一般的に一度花が咲いた茎からは花が咲きません。しかし、茎の下の方だけに花が咲いて上部に咲かなかった場合は、次の年に花が咲く可能性がありますので、茎を切り取ってはいけません。また、花の咲かなくなった古い茎は、新芽を伸ばすための栄養補給源という大切な役割をもっているのです。2～3年

は切らずに残しておくようにします。

なお、ノビル系のデンドロビウムの花付きをよくするためには、できるだけ日光によく当て、8月～9月にかけてリン酸分の肥料を少し与えます。そして秋の気温が低下してきた頃には、十分低温に当ててやるのが花芽分化を起させる条件です。



レウイシア

- スベリヒユ科
- 北米原産
- 開花期 4～5月

〈性 質〉

レウイシアは大正時代に日本に導入されたが、日本的な花でなかったためか、あまり人気が出ず、今日まで最小限の栽培しかされていなかった。ところが最近になって山野草として扱われるようになり、ようやく花の可愛らしさと珍しさで人気急上昇中です。

このレウイシアは、北アメリカ西部に約16種類が自生しており、欧米では山草愛好家がよく栽培している。比較的日本でよく栽培されているものは、コチレドン、ネバデンシス、レディビバの3種類ですが、コチレドンの中に変種で鋸歯のようになったヘックネリや、葉の幅が狭くて波打っているハウエリーがあります。

〈栽 培〉

夏の高温には強く、日当りを好み、暑さに強い山野草の一つと言われていますが、多湿には弱くて、排水が悪ければたちまち根腐れを起こします。鉢植え栽培のコンポストは排水のよい軽石や日向土がよいでしょう。

肥料は液肥で与えたほうが無難で、1ヶ月に1回程度ハイポネックスの1000～2000倍液を与えます。

〈繁 殖〉

実生、株分け、さし木で殖せます。新しい種をまくとすぐ発芽するので、種を取ったら保存しないで、その日のうちに種まきします。

7. 水 辺 の 花



ミズバショウ

- サトイモ科
- 宿根草
- 開花期 3～5月

〈性 質〉

本州(兵庫県以北の日本海側)、北海道、カムチャッカに分布し、湿原や水湿林に生えます。北方では草原の中に純群落を造ることもあります。南限地の兵庫、福井、岐阜、富山などではアシなどの丈の高い草と混生して夏には日陰になります。水を好みますが、流水であって停滞水では育ちません。花は雪解けに始まり、成葉3枚につき1個の仏炎苞があって、葉の展開に従い順次咲き進んでゆきます。仏炎苞が茶色に枯れてから約2カ月で果実が実り、緑色のままで悪臭を放ちながら崩れて種子を放出し始めます。種子はゼリー状のもので包まれていて水に浮き、新たな場所に水の流れによって運ばれていきます。

〈栽 培〉

根が深く、生えているものを掘り取ることは不可能です。このため、種子から育てるか、小苗を譲り受けるしか入手方法はありません。播種床は赤玉土の米粒大7にバーミキュライト3を混ぜて浅鉢に入れたものとし、深さ2～3cmの腰水をして毎日水を替えながら管理します。採り播きの場合は15～30日で発芽が始まります。ちょうど梅雨明けとなりますので、半日陰の涼しい場所で管理し、ハイポネックス2,000倍液を週1回灌水代りに与えます。秋には植え替えて、赤玉土の米粒大7にバーク堆肥3を混ぜたものを5号浅鉢に入れ、3cm間隔に植え付けます(30株/鉢程度)。2年目は5cm間隔に植え上げ(8～9cmポリポットに1本植え)、3年目は4～5号浅鉢に1株植えとし、順調であれば4年目の春に花が見られます。2年目の鉢上げ以後は魚肥を主体とし、春の展葉期、梅雨時、旧盆明け、9月下旬の4回、煮干しを3本/株ずつ土にさし込みます。病害虫はこれといってありませんが、葉焼けさせること、水を腐らせることが大敵なので、鉢の置き場所に気を付けて腰水をしていながらも水は毎日替えることが肝心です。地植えする場合は3年苗を用いて流水のある水湿地に植え込みます。



ス イ レ ン

- スイレン科
- 宿根草
- 開花期 6～9月

〈種 類〉

本来「睡蓮」の名は東アジア～ヨーロッパ、北インドに野生するヒツジグサ(水草、花は白色で未の刻・午後2時頃に花が開くことから付いた名。)に充てていたものでしたが、明治時代にフランスのマリリアクが改良した一連の品種が導入され、栽培が楽で花数が多く大輪で朝から夕まで開いている鑑賞価値の高いこれらの改良種に名を奪われてしまいました。園芸品種は野外で越冬ができる耐寒性スイレンと、冬季に保護して水温を15℃以上に保つ熱帯性スイレンとに大別できます。一般によく栽培されるものは耐寒性スイレンで、赤花の「アトラクション」、桃花の「ロゼア」、白色の「アルバ」、黄花の「サンライズ」などが代表的です。

〈栽 培〉

生育期間(水温が5℃以上となる期間)が150日以上あればどこでも育ちます。まず、池や水槽など植える場所を準備し、7～10号鉢に1株ずつ田土で植え込み、水深を10～30cmにして管理します。肥料は煮干し、身欠きニシンなどの魚肥がよく、春4月に水がぬるんだなら10～20g/株を土中に差し込んでやります。水中には金魚やメダカなどを飼えばボウフラや害虫などを食べてくれます。水替えをできるだけ多くしますと、花数が多くなります。

〈近 縁 種〉

コウホネ(河骨、川骨)は日本、朝鮮に分布し、池や沼などに生えます。花は黄色(末期に朱色となる)で、5弁、径4～5cm、6～9月咲です。水深10～80cmと適応幅が広く、深水ならばどこでも育ちます。根茎は太く、色白で動物の骨のようにも見え、浄血、補精(婦人の)薬として用いる和漢薬です。浅水ならば空中に葉は立ち上がりますが、中水ならばスイレンのように葉を水に浮かべ、深水ならば水中葉だけの形態となります。肥料を好みますのでこまめに与えます。



ハ ス

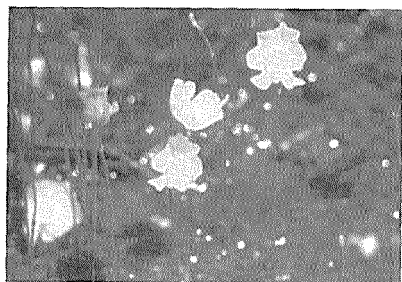
- スイレン科
- 宿根草
- 開花期 7～9月

〈種 類〉

ハスはインド、中国、日本、オーストラリア北部の広い範囲に分布します。^{おお}大賀蓮は1951年に大賀一郎博士が千葉県検見川の2,000年前(縄文時代)の泥炭層から発見された種子を発芽させたもの、^{ちゅうごくこだい}中国古代蓮は中国遼寧省大連市普蘭天の1,000年前の地層から出た種子を発芽させたもので、種子の寿命が極めて長い植物です。種子は栗のような味で美味、中国湖北省武漢市周辺、台湾西部において種子を食用、薬用とする品種が分化しています。地下茎(蓮根)を食用とするための栽培が盛んですが、現在の主力品種の加賀種、備中種ともに明治～大正時代に^{かんじん わじょう}中国江蘇省、安徽省から蓮根用品種の種子を導入して育成したものです。花を鑑賞する品種は^{しろうくん しこぼす しやうだい じあわばす どうげんぜん じ}仏僧が中国から種子でもたらしたものが多く、鑑真和尚が753年に来朝された際の白君子小蓮(招提寺青蓮)、^{ろ ざんはく せいじんばす そくひ おしやう}道元禪師が1223年に帰朝された際の盧山白(聖人蓮)、^{みようれん たとうれん}即非和尚が1,657年に来朝された際の^{そくひれん}即非蓮などがあります。妙蓮(多頭蓮)は1茎に数花を付けて花卉数5,000枚に達するボリューム豊かなもので、滋賀県守山市の田中家、金沢市の持明院、福野町の安居寺に伝承を現わすものとして古くから伝えられています。

〈栽 培〉

地植えの場合は水田に植え付けます。3～4月に稲と同様に荒起し、代かきをした後、芽先の2～3節を母株とし、石灰乳50倍液に30分程浸漬して消毒した後、芽の向きを揃えて80cm間隔に植え、次列は3m離れて植え出していきます。鉢植えの用土は田土を用い、^{ちやわんはす}矮性の茶碗蓮系の品種なら径30cm深さ20～30cm、中形の誠蓮などならば径50cm深さ40cmの容器(鉢、洗面器、タライなど)に植え付けます。^{まことばす}肥料は魚肥がよく、煮干し、身欠きニシンなどを4月と5月の2回、各々50～70g/株施用します。お盆の切花で仏花に用います。花や葉は水上げが悪いので「水上げポンプ」で水を圧入してやりますが、この時STS剤などの延命剤を用いるとさらに花保ちがよくなります。



タヌキモ

- タヌキモ科
- 宿根草
- 開花期 7～9月

〈性質〉

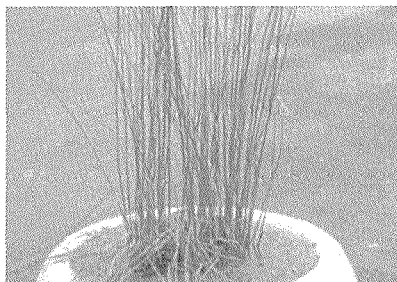
北半球の温帯の湿原、沼沢などに広く分布します。根がない浮遊性の水草で、茎は分枝して長さ50cmにまでなり、多数の捕虫葉を付けてミジンコなどの動物性プランクトンや水生昆虫の幼生などを捕えて窒素源とします。花は黄色、水上に総状花序を立てて数個の小花を付けます。水質は弱酸性で、よく澄んで底まで光が透って明るいこと、いつも新しい水の供給があって水温が一定なことなどが生育の条件です。

〈栽培〉

径40cm、深さ30cm以上の容器(水蓮鉢、金魚鉢、タライなど)に水を入れた後、長さ10cmに切った稲ワラまたは麦ワラを浸して沈めます。数日を経てワラのアクが出て水が茶色っぽくなれば栽培によい水質となったので母株を入れます。水は毎朝新しいものを注ぎ入れて全体量の2割以上を更新します。この際に蓮口を用いていますと水滴が水面を走り廻ることをもって良好な水質であると判断します。水質が悪化して水を注ぐとアワが立つようになるとアオミドロやアオコなどの緑藻が生え始めます。これらの雑藻が生えたならすぐに鉄明礬てつめいばんを入れ、稲ワラを補給し、水質を保ちます。稲ワラ、麦ワラがなければエノコログサ、ヒエなどイネ科(カヤツリグサ科はダメ!)の茎葉であれば何でもよいので、生のまま短かく切って入れます。アオミドロの発生量が多いならハシなどを用いてからめ取るとよいでしょう。肥料は稲ワラの補給だけでよく、他は施してはなりません。施用時期は、早春、梅雨、盆過ぎ、秋の4回を目安とし、株の状態や水質がおかしいならいつでも施します。浮遊性の水草なので移植は新しい容器に水を入れて水質を整えて株を入れるだけでよく、いつでもできます。

〈種類〉

普通のタヌキモのほか、イヌタヌキモ、シャクジイタヌキモ、コタヌキモ、ヤチタヌキモ、フサタヌキモ、ヒメタヌキモ、ミカワタヌキモ、など多数の種があります。花色は全て黄色ですが花形、草姿はずいぶんと違います。



フ ト イ

- カヤツリグサ科
- 宿根草
- 鑑賞期 5～10月

〈性 質〉

アジア～ヨーロッパの温帯域の池沼などに広く分布する水草で、根茎は太く横走して伸び拡がって浅水域を埋める程になります。茎の断面は円形で高さは1～2 m、葉は退化してなく、茎が葉の代りをしています。茎の断面は丸く、先端に小穂が付き、果実は7～10月に熟します。昔、茎を刈り取ってイグサやアンペラのような敷き物を作っていました。

〈栽 培〉

水草なので水切れは禁物です。湿地に生える場合の地下水位は5 cmより浅く、水中に生える場合は水深10 cmよりも根茎を沈めないようにして、一定の量の水と空気を確保しているようです。日照不足では葉色が悪くなりまた病気が出易くなります。鉢植え用土は赤玉土の米粒大を用い、茎3～5本立ての株で3号鉢、10～15本立ての株で5号平鉢に植え、深めの鉢皿を用いて2～3 cmの腰水をしながら育てます。地植えの場合は、水田状態として水をあてて育てます。植え付け密度は3～5本立ての株を用いて縦横ともに20 cm間隔とします。肥料は油類と骨粉をねり合わせたものを用い、4月と9月の2回、3号鉢なら5 g (2 cm角を1個)、5号鉢なら15 g (同3個)、地植えなら100 g / m²程を施用します。株分け移植はいつでもできます。古茎は黄色くなったら刈り取り、なるべく新しい茎を出させるようにします。7月と9月に切花葉物としての需用期があるので、全面刈り取りをして良品のみを出荷するという方法が生産地では行なわれているようです。古株は茎上がりが悪いので、2～3年に1度植えかえをします。病虫害はメイチュウの被害があるので、定期的に防除します。

〈近 縁 類〉

サンカクイ (三角蔕) は、フトイによく似ていますが、茎の断面は三角形で高さ50～100 cmとやや小さく、池や川のほとりにあって水中にまで侵出しない点で違います。古名をシリクサ (知草、尻草) と言い、昔敷物を織りました。

● 押し花で楽しむ四季の花 ●

時が過ぎれば枯れてしまう花を、美しいままに残しておくのが押し花です。

1. 採取は花が咲ききる前に

花の採取は咲始めがよい。できたら午前10時頃までがよいとされています。遠方に出かけて花を採取し、持ち帰って押し花にするような場合は、花を入れたポリ袋の中に、ティッシュペーパーを3cmぐらいに丸めて、オキシフルをたっぷりしみ込ませ、これを一緒に入れて密閉しておけば、24時間はしおれさせないで保つことができます。

2. 用意するもの

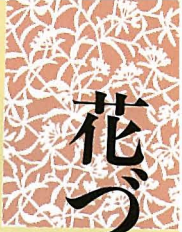
厚紙、新聞紙、乾燥剤（ゼオドライ）、半紙（和紙）、重し、はさみ、ピンセット、カッターナイフ

3. 押し花の手順

- 1) 厚紙の上に新聞紙を二つに折って敷き、その半分の上に新聞の文字が見えなくなるぐらいに乾燥剤をのせ、平らにならす。
- 2) その上に二つ折りした半紙をのせ、花を置く。大きな葉や、混み入った花は茎からはずして、半紙を閉じ、上に乾燥剤を平らにのせる。
- 3) 花をはさんだ半紙と乾燥剤を繰返し3～4回重ねてもよい。新聞紙を閉じ、もう一枚の厚紙をのせる。
- 4) ポリ袋に入れ、口を閉じ、重しをのせる。6～7日ででき上がるが、その間は置き場所を動かさない。

4. きれいに作るためのポイント

- 1) 草花は水揚げのよい状態で、水けをよくふきとってから押し花にします。
- 2) 茎や葉が多すぎて、プレスしたとき重なりそうな場合は、切り捨てたり、切り離して別々にプレスします。
- 3) 花は八分咲き、五分咲き、つばみなど、いろいろの形のものをプレスしておく、デザインするとき楽しめます。
- 4) 多種類の草花を一緒に並べる場合は、厚さが平均になるよう注意します。
- 5) ビニールシート（ポリ袋）は、光を通さない色つきのものを使います。



花
づ
くり、
これ
だけ
は知
つて
おき
たい



カトレア (タンソ病)



セントポーリア (タンソ病)



カンナ (クギグサレ病)



(アメリカシロヒトリ)



シラン (タチガレ病)



アジサイ (カッパン病)



チューリップ (ハイロカビ病)



ゲンバユミシの被害



サイネリア (リンモン病)



ヒメシャガ (シラキヌ病)



アスター（イチョウ病）



（アブラムシ）



シクラメン（タンソ病）



シクラメン（ネグサレ病）

1. きれいな花を咲かせる肥料の知識

植物は生きて行くためにいろんな物質を吸収します。そして物質を合成したり、又分解したりします。植物が必要としている元素は16～17種類といわれています。物質をいろんなところから取り込みますが、葉や茎からは炭酸ガスと酸素を吸収し、根からは水とその外に必要な元素を水に溶けている無機イオンの形で吸収します。

この無機イオンの形で吸収する養分のうち比較的多く必要とするものを多量要素、少ないものを微量要素とよんでいます。多量要素の中でも特に多く必要とするものが三つあります。これを三要素と呼んでいます。その三要素とは窒素(N)、リン酸(P)、加里(K)の三つの元素です。

植物が必要な養分は土のなかに含まれていますが、必ずしも十分な量があるわけではなく人為的に補います。これが肥料です。

1. 肥料の三要素

植物を育てる場合に肥料として補う養分は通常先にあげた窒素、リン酸、加里の三要素です。これらの養分は植物が多く必要としていることもあります。不足しやすいことも一因です。

(1) 窒 素

窒素は主として硝酸態(NO_3^-)の形で吸収されます。ところが硝酸態は水に溶けやすく水と共に移動しやすいのですぐに不足します。特に雨が多い時期に不足します。このような性質があるので、窒素を肥料として施用する場合はアンモニア態(NH_4^+)の形にしてあります。土の中には硝酸化成菌という細菌がいて、アンモニア態窒素を硝酸態窒素に変えてくれます。これを植物が根から吸収するわけです。

(2) 磷 酸

リン酸は植物体内でエネルギーの運送屋として重要な働きをしています。リン酸はイオンとして極少量しか溶けていないので、溶けて水と共に流れてしまうことは少ない。しかし、土の粘土に取り込まれてしまったりしているので、必要な量は肥料として補給します。

(3) 加 里

加里は植物体内での物質合成に必要です。土の中では土の粒子に吸着されているので少ししか流亡しません。

2. 肥料の上手な使い方

(1) 基 肥

植物を植える前にやる肥料を基肥(もとごえ)といいます。窒素、リン酸、加里と石灰をやります。まず石灰質肥料を全面にまいてから耕します。そのあと窒素、リン酸と加里をほどこしますが、普通この三要素を含んだ化成肥料を全面にまきます。そのあと軽く土と混ぜます。肥料の量は石灰質肥料(消石灰等)は1㎡当り100g、化成肥料は成分含量や植える植物の種類によって違いますが1㎡当り50～150gの範囲です。

(2) 追 肥

植物が生育している時に不足しそうな肥料をほどこすのを追肥(ついひ、おいごえ)といいます。普通不足する肥料分は窒素ですので、窒素のみを含んだ肥料の硫酸や尿素を土の表面にほどこします。軽く土と混ぜた方が流亡が少ないようです。肥料の量は硫酸で1㎡当り10～20g、尿素は5～10g程度です。

花壇などでは粒の大きい化成肥料を1株に2～3粒土に押し込んでやるのも1方法です。

3. 植物別にみた肥料のやり方

(1) 1 年草

生育期間が数カ月程度なので、基肥としてほどこす化成肥料の量は1㎡当たり100g前後とし、1カ月おきに追肥をやります。

(2) 宿根草

宿根草は生育期間が長く、養分を蓄えているので少しぐらい肥料分が少なくても十分生育しますが、肥料をやった方が生育が良くなります。植え替えのときに基肥として石灰質肥料を1㎡当たり100g、リン酸肥料を50gをまず土とまぜ、次に油粕または鶏ふんを200g、化成肥料50g程度を土と良く混ぜてから植え付けます。

植え替えしなかった時は早春のまだ根が動き出さない内に株から少し離して穴をほり上記の肥料を土と混ぜて埋め戻します。

追肥はあまりやらないほうが良い。特に夏をすぎてから追肥が多すぎると株が腐敗することがあります。

(3) 球根類

球根類も宿根草と同様に貯蔵養分をもっている所以、肥料は多くやらない方がよい。植え付け前に基肥として、石灰質肥料を1㎡当たり100g、リン酸肥料50g、化成肥料50g程度土と混ぜてから植え付けます。追肥はやらない方が無難です。スイセンなどのように毎年植え変えないときは根が動き出す前(スイセンでは9月初め)に上記肥料を球根からややはなして埋め込みます。一般的に球根は無肥料の方が無難です。

- (4) 花木類
宿根草と同様。

4. 肥料の種類

(1) 化成肥料

いろんな種類がありますが、窒素、リン酸、加里が同程度か窒素がやや少なく含まれているものが使いやすく、基肥にほどこした場合の窒素の肥効期間は1カ月弱です。

(2) 有機化成肥料

窒素成分の一部あるいは全部が有機体の化成肥料で各成分含量は10%以下のものが多い。普通の化成肥料に比べて窒素の肥効期間がやや長く1カ月強です。

(3) 大粒化成肥料

接着剤で固めて大粒にした肥料で大きいものはマメタン程度のものもあります。固めてあるので、肥料がじょじょに溶け出し大粒ほど肥効期間が長く数カ月以上になるものもあります。割高ですが宿根草や花木類の肥料として便利です。

(4) 石灰質肥料

カルシウムを含んだ肥料で消石灰、苦土石灰などがあります。

(5) 化学肥料(単肥)

1) 窒素肥料

窒素を主とした肥料で硫酸や尿素などがあって、おもに追肥に使用します。尿素をプラスチックで包んだコウティング肥料もあります。これは肥効期間が1カ月から半年まで種類が選べ便利な肥料です。

2) リン酸肥料

リン酸を含んだ肥料で普通過リン酸石灰を使用します。土壌改良をかねる場合は重焼燐や熔成燐肥が使用されます。

3) 加里肥料

加里を含んだ肥料で塩化加里、硫酸加里等があります。

(6) 有機質肥料

動植物質の肥料で代表的なものとして、油粕、骨粉、魚かすなどがあります。肥効がやや遅く、急激な肥効がないので使いやすい面もあるが、発酵させていないものをほどこすと根に障害がでたり、時には分解のために一時的に土中の窒素を消費するので、窒素不足になることがあります。

第1表 化学肥料の成分含量

窒素肥料名	成分含量%	磷酸肥料名	成分含量%	加里肥料名	成分含量%
硫 安	21	過磷酸石灰	17	硫酸加里	50
尿 素	46	溶成リン肥	20	塩化加里	60
石灰窒素	20	重 焼 燐	35	珪酸加里	20

第2表 各種有機質肥料の成分表

肥 料 名		水 分 %	窒 素 %	磷 酸 %	加 里 %
自給肥料	野 草	75.0	0.34	0.11	0.36
	れ ん げ 草	89.2	0.35	0.08	0.24
	稲 わ ら	12.3	0.57	0.23	1.05
	大 麦 わ ら	12.7	0.41	0.13	1.01
	落 葉	13.6	0.95	0.18	0.20
	モ ミ ガ ラ	11.0	0.62	0.19	0.49
	わ ら 灰	—	—	1.56	4.61
	木 灰	—	—	2.28	7.81
	モミガラ灰	—	—	0.78	2.85
	米 ヌ カ	11.3	2.08	3.78	1.40
市販有機質肥料	油カス	大豆カス	6.7	1.5	2.1
		ナタネカス	4.8	2.5	—
	ス	綿実カス	4.4	2.1	1.4
	魚カス		8.0	7.1	—
	骨粉		5.1	21.0	—
	けいふん(風乾)		2.9	3.1	1.3

注：成分含量は平均的数字であり、おおよその目安として使用して下さい。

Q&A

花づくりこんなときどうする？

Q 農家のチューリップは大きくて立派だが、買ってきて栽培し、花を楽しんだ後で球根を掘りとりてみると、球根の数だけがふえて太りが非常に悪い。

A その理由は、販売球根は立派な花を咲かせるために、仕上げ球から最大に太らせたものですから、これを

栽培すれば繁殖のため3～5球に分かれる段階にきているものです。それで、農家の作った球根は大きく、消費者の球根は、数がふえるけれども1球1球は小さいということです。なお、花を楽しむため長い間咲かせていることも球根の太りを悪くする原因の一つです。

2. 丈夫に育てるよい土づくり

1. 土の役割と性質

(1) 土の果たす役割

よい花は良い植物体から作られます。よい植物体は良い環境によって作られます。では、よい環境はどうして得られるのでしょうか。

植物の環境は大きく分けて地上部環境と地下部環境になります。その地下部環境の基盤になっているのが土です。植物はこの土に根をはって水や養分を吸収します。この外にも土が果たしている役割があります。このことは忘れられがちですが、根が吸収するのに必要な酸素を供給している、根の生育に必要な温度を保っている、植物を固定しているの三つの役割がそれです。この外に根が分びする物質の分解などにも関係しているようです。

(2) 土はなんでできているか

土は砂や粘土のような粒子でできている。でも、それだけではありません。水と空気と沢山の微生物と種々の有機物等で構成されています。

(3) 養分の供給

植物は必要な養分のほとんどを根から吸収します。ですから、土のなかに必要な養分がなければなりません。そして、その養分は根が吸える形になっている必要があります。

植物の必要な養分は無機イオンの形で吸収します。

(4) 水と空気

根は土から体に必要な水を吸い、導管を通して体全体に運びます。また根がいろいろな仕事をするために必要なエネルギーを得るために酸素が必要です。この酸素は土のなかにある空気から取ります。この水と空気は土の粒子の隙間に存在し、水が多ければ空気が少なくなります。水が少なくなれば、空気が多くなります。

(5) 孔隙率

土の容積中の隙間の割合を孔隙率といいます。これが多いと軽い土、少ないと重い土といいます。

(6) 良い土の条件

- 1) 孔隙率が高く、十分な空気を供給できること。
- 2) pHが6～7の間で養分が根に吸われやすい形になっていること。
- 3) ゆっくり分解する有機物が多く含まれていること。

2. 作物の種類と用土の使い分け

(1) 花壇などの土壌改良

花壇など直接地面に栽培する場合は、客土すれば別ですが、そこにある土を使うしかありません。特に宅地として埋め立て造成された所では、建物を建てるには適したよく締まった土ですが、花を育てるには難物です。このような場合はまず、PH を調べてもらい、アルカリ性でなければ改良の余地があります。もしアルカリ性であればあきらめて土を入れ換えるべきです。草花を栽培するだけなら土の厚さは10cmあればなんとかなりますが、庭木もとなると30cmは必要です。

1) 排水

余分な水はすみやかに排水しなければなりません。排水には二つの経路があります。土の表面から流し出す表面排水と、土中の水を地下へ浸透させる排水です。この二つの経路とも十分機能出来るようにしておかなければなりません。表面排水は花壇の高低に合わせて排水路を整備しなければなりません。次に地下への排水ですが、まず作土の孔隙を増やすために堆肥の施用などによる土壌改良を行うこと。下層土の透水が悪ければ、埋め立てた宅地ではほとんどそうですが、暗渠排水工事を行って地下への水の浸透をはかることが必要です。

2) 作土の孔隙を増やす

作土は花が根をはる領域です。根に十分酸素がとどくように孔隙を増やす必要があります。それにはまず耕して土の大きな粒子を作ることです。次に堆肥をほどこすことです。1 m²当り20kg 程度をほどこし作土全体に混ぜ込みます。その後は年に5 kg 程度をほどこします。

(2) 鉢植えやフラワーボックスの土

これらに使用する土はいろんな種類、調合が選べます。作物の種類、大きさ、鉢やボックスの材質や形、管理の方法によって合った土を選べます。一般的な土の調合の一例としては、容量比率で田土が5割、腐葉土またはピートモスが3割、くんたんやバーミキュライトが2割です。

3. 市販用土の種類と特徴

(1) 田 土

いわゆる田んぼの土で、粘土と砂の含量によって性質がある程度違いますが保水力があり、肥料もちも良いものが多い。

(2) 川 砂

排水性がありますが保水力や保肥性が悪い。肥料分がなく、地温が上がりやすい。排水性改善のために土に混入します。さし木床によく使用されます。水や肥料を人為的に操作しやすいのでこまめに管理すれば生育コントロールがや

りやすい。

(3) 山 砂

比較的砂の多い赤土です。病虫害や雑草種子を含まないことから育苗用土のベースとして使用されます。通気性、排水性、保肥性に欠けます。酸性もやや強い場合が多い。

(4) パーライト

軽くて孔隙が多く、通気性改善のために土に混入します。灌水によって浮き上がって表面にたまったり流れだしたりするのが欠点です。

(5) パーミキュライト

軽くて保水性もあり孔隙も多い。パーライトと同様に通気性改善のために混入します。肥料分がなく保水性があるのでは種床用土としてよく使われます。

(6) 海成軽石

孔隙が多く保水性もあり粒状ですので、通気性の改良のために混入します。重みもあるのでランの用土としても利用されています。

(7) 腐葉土

良質の堆肥として土に混入されます。排水性、通気性、保水性、保肥性を改善します。

(8) ピートモス

寒冷地の湿地にできた泥炭で、保水性、通気性が良いのでこれらの改善のために土と混入します。酸性が強いのので消石灰も同時に混入します。酸性を中和ずみのものもあります。

4. 簡単な堆肥や腐葉土の作り方

市販の容器や土に穴を掘って作る。良質の堆肥にするには、積み替え(切り返し)を3～6カ月後に行って十分発酵させます。

材料は落葉、わら、干し草、縄のきれはしなどが最高ですが、生草や野菜くずなどでも作れます。この場合は水分が多すぎるので、少し乾かしてから積み込みます。

十分発酵させるためには、水と空気と肥料が必要です。

(1) 水 分

堆肥として積み込む前に生草などは重さが半分になるくらいまで乾かします。ワラや干し草は水をかけて湿らせておきます。積み込みする時に水をかけて、軽く握ったときに水がしみ出るくらいにします。積み込んだら雨水などがしみこまないように屋根をします。

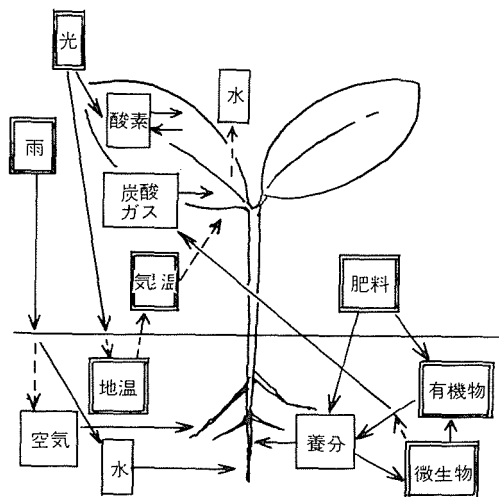
(2) 空 気

積み込みの時、材料がワラ等の場合は踏み込みますが、生草などが材料の場合は固くしすぎないように。通気性が必要なので、肥料袋やゴミ容器などで作

る場合は穴を底や側面に適当に開けておきます。

(3) 肥料

堆肥10リットルあたりタマゴカラや蟹ガラを20～50g、米ヌカ500gまたは油カス200～300gを混ぜ込みます。



第1図 植物と環境

Q&A

花づくりこんなときどうする？

Q 繁殖能率の劣るルードウィヒ系の大輪アマリシスの増やし方は。

A 鱗片挿しを行います。7月ごろに球根を掘り上げ、球根の中心を通して8～16に縦割りとし（ミカンの房を分けたような切片となる）更に鱗片を2枚ずつへたの部分につけて、沢山の小片に分割（ツインスケリング）し、パーミキュライト（赤土、砂でもよい）の挿床に、鱗片の先を少し出して挿します。やがて基部に小球ができるので、苗床で3～4年養成すると開花します。

Q 大きくて立派なダリアの球根を植えこんだが、いつまでたっても発芽しない。

A ダリアは球根そのものには芽がなく、球根がついている茎の基部の周囲に新しく伸びてくる芽があるものです。春になって、幾つもついている球根を分けるとき、その芽をそれぞれの球根につけてやるべきところを、たまたまつけなかったか、折角つけた芽を損傷したためでしょう。また、球根の首の細い部分が折れたり、乾燥し過ぎた場合にも芽が出なくなります。

3. 草花の殖やし方

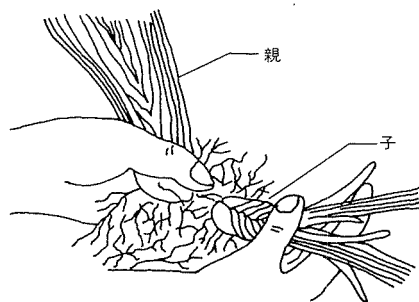
草花の繁殖を大別すると、種子繁殖と栄養繁殖に別けられます。種子繁殖とは種子からふやす方法で、おもに1・2年草で行なわれます。栄養繁殖は親株の一部を分ける方法で、株分け、さし木、分球、とり木、つぎ木、根伏せ、バルブ植え、さらには組織培養などがあります。主に宿根草、球根、洋ラン、観葉植物、花木などで行なわれます。

栄養繁殖は種子繁殖よりも早く開花させることができ、しかも種子のできない種類のものを殖やすことができるという長所から、植物の根・茎・葉などの植物体の各部を用いる、株分けやさし木、つぎ木などの方法が古くから行なわれてきました。ここでは草花を中心とした栄養繁殖の方法について紹介します。

1. 株 分 け

主に宿根草の場合ですが、ある程度大きくなったものは、植え替えのときに株分けして植えつけます。洋ラン類や観葉植物も株がふえて鉢いっぱいになっている場合には株分けして、それぞれ、新しい鉢とコンポストで植え替えします。時期は5月上旬から9月上旬までです。

洋ランのシンビジウムはバルブを3つ以上つけて株分けし、また観葉植物のアナナスは、子株が大きくなってから基部をつけて親株から切り離し、基部に水苔を巻いて植えるるとよい。



根をいためないように手で左右にはがす

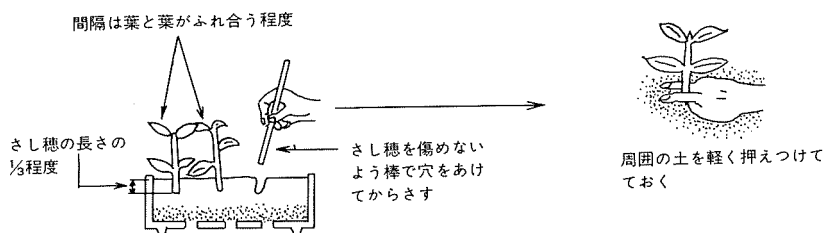
2. さ し 木

一般に樹木をさし木する場合は「さし木」、草花をさす場合は「さし芽」と使い分けていますが、どちらの言葉を使っても内容に変わりはありません。またさし木の方法により、茎ざし、根ざし、葉柄ざし、茎伏せ、根伏せ等に分け区別しています。

さし木の用土は雑菌のいないきれいな土を使います。赤玉土、鹿沼土、川砂バーミキュライト、パーライト、水苔等が使われます。

さし床の深さは7センチ程度が適当です。キクなら8センチくらいにとってきて、6～7センチに、ポインセチアは10センチくらいにとってきて、8センチく

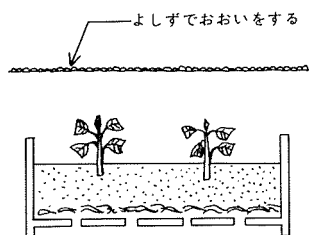
さし木のしかた



らいに、よく切れるナイフで切りもどし、水を十分吸わしてからさし木します。さし木する際に発根しにくいものは、発根促進効果のあるメネデル液につけてからさすか、切り口にルートン(発根剤)をまぶしてやると、とてもよく発根します。

- (1) 茎さし……キク、木立ペコニアなどみずみずしい茎をもつものは、頂芽を8～10センチの長さに切り、節の下を直角に切り、下葉を2～3枚取りのぞいて準備した用土に、葉が触れ合わない程度にさす。

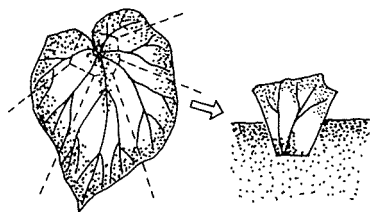
ゼラニウム、カランコエなどの茎は乾燥に耐える性質があるため、まる1日、日陰に置いて切り口を乾かしてさすようにします。水分が多いと切り口から腐りやすい。



- (2) 葉さし……よくおこなわれるペコニア・レックスは1枚葉の葉脈の分岐点の部分を切り、砂、パーミキュライトなどに伏せ込むようにさす。

サンスベリアは葉を約10センチに切り、上と下を間違えないようにしてさす。斑入り種は斑が出なくなってしまうので、株分けのほうがよい。

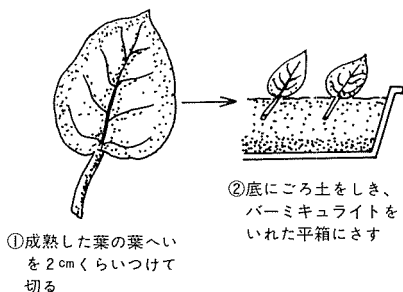
シャコバサボテンはこれらと違い、



レックス=ペゴニア
葉脈の分かれめから発芽するので
この部分を葉片につける

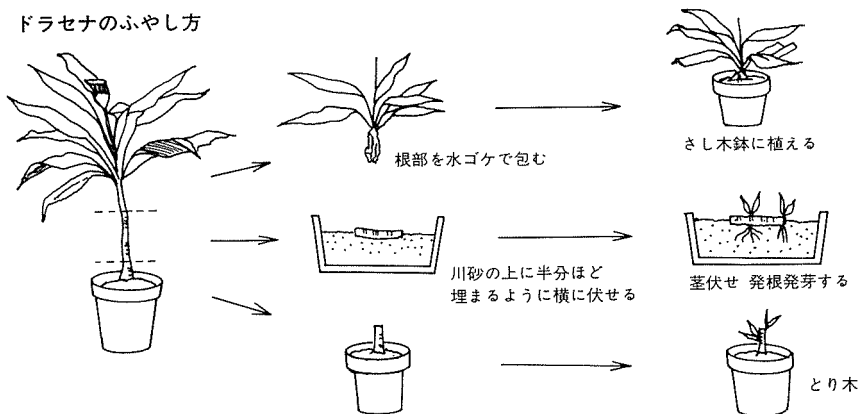
水苔を葉にまいて行なう方法と、用土の上にただ切った葉を寝かせておくだけという簡単な方法の二通りがあります。

- (3) 葉柄ざし……セントポーリア、ペペロミア類のさし木は、葉柄ざしという方法で行ないます。7月ごろ健全な成株の葉をつけ根から切り取り、葉に対して葉柄を2センチくらいつけて切ります。葉柄を約2センチ、葉のつけ根が用土につくようにさします。セントポーリアは2号ポリ鉢に直接さしたほうがよい。

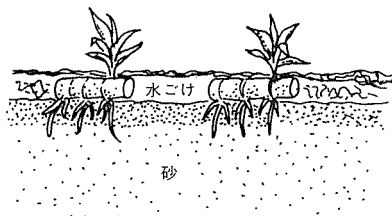


- (4) 茎伏せ……ドラセナは5月から9月までなら、いつでも茎伏せで殖やすことが可能です。この場合、下の図のように間伸びしたものを利用すると、茎ざし、茎伏せ、とり木と、3つの方法が一度に楽しめます。

ドラセナのふやし方

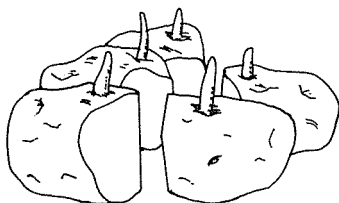


- (5) 根伏せ……サンスベリア類、コルジリネ等は根伏せで殖やせます。コルジリネの場合は、まず3センチくらいに根を切り、それを湿らせた水苔の中に埋めます。水苔が乾かないように管理します。

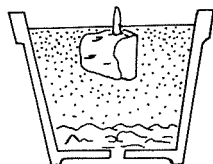


3. 分 球

球根鉢花の分球は、小球根のロードヒポキシス等は自然に分球するので、植え替えの際に大球を選んで植えます。またグロキシニア、カラジュームなどは大球で芽が多いので、球根を切り分けて殖やします。適期はさし木に準じますが、必ず芽をつけて分球し、切り口には殺菌剤を塗っておきます。



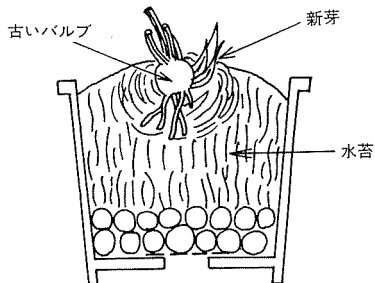
芽をつけて分割する



ふつうの球根と同じように鉢植えする

4. バルブ植え

一般にラン類で多く行なわれる方法です。花の終わった親株はやがて退化してバックバルブとなります。このバックバルブを大きな株に、そのままつけておくと、やがて自然に退化してしましますが、バックバルブをひとつ、ひとつ切り離し、新しい水苔で包んで植え込みますと、やがて新芽が出てきます。たいへん貴重な品種はひとつのバックバルブも無駄にせず育てて下さい。



4. 花を病気や害虫から守る

1. 防除のポイント

- (1) 病気は予防が重点、害虫は見かけたらすぐ駆除することが大切です。
- (2) 種子や苗、球根は病気や害虫のついていないものを選びます。
- (3) 肥料はやり過ぎないようにします。
- (4) 根ぐさを起こさないよう過度の湿気や乾燥に気をつけます。
- (5) 間引き、枝すかしをして通気と採光をはかり、密植しないようにします。
- (6) 病害虫の蔓延源になる雑草をこまめに除きます。
- (7) 咲き終わった花、病葉、枯枝は早めに取り除きます。
- (8) ウイルス病や軟腐病などは銕や指先からも感染しますから注意します。
- (9) 前作で病害虫の発生があった所に同じ植物を植えないようにします。

2. 上手な農薬の使い方

- (1) 農薬のえらび方
 - 1) 食害性の害虫には……駆除だけのマラソンやDDVPよりも持続性のあるカルホスやEPNの方が合理的です。
 - 2) 吸汁性の害虫には……接触作用だけのマラソンなどより全身性(浸透移行性)を兼ねたエカチンやオルトランが合理的です。
 - 3) 土壌害虫には……揮発性の高いダイアジノンなどを土に灌注します。
 - 4) 病気には……細菌による病気(軟腐病など)には銅水和剤かストレプトマイシンを主成分とする薬を、かびによる病気(灰色かび病など)にはベンレートやダコニールなどを用います。
 - 5) 混合液は効率的……EPNにエカチンを加えるとほとんどの害虫に効きますし、ベンレートにマイシンを加えとかび・細菌の両方に効果があります。
- (2) 農薬の使い方
 - 1) 散布量のめやす……(ア)必要量だけとかします。(イ)乳剤・水和剤など水でうすめる薬剤は1㎡当り100～200ml程度散布します。(ウ)粉剤は1㎡当り2～3gr、粒剤は1㎡当り4～6gr(1株当り2～5gr)程度を目安にします。
 - 2) 散布上の注意事項……(ア)薬液は葉裏にも、(イ)噴霧はできるだけ細かく、(ウ)葉全体に細かい霧がつく程度に、(エ)噴口は適度に離して、(オ)粉剤はうっすらと埃をかぶった程度に、(カ)粒剤は均一に株元に、(キ)マスク、手袋をして使用、(ク)風上から、(ケ)散布中に飲食しない、(コ)器具の洗浄や残液の始末と石鹸の手洗いの励行などが大切です。

3. かかりやすい病気(10種)

- (1) 灰色かび病……花卉や蕾、若葉や新芽などに灰色のかびが生える病気で、春秋の気温が20℃前後で多湿なときに発生します。病気にかかったものは早く摘みとって、多湿にならないよう、通風に注意します。温室やハウスで要注意です。
- (2) ウドンコ病……花・葉・新梢などにうどん粉のような白いかびを生じて、葉がねじれたり萎凋したり奇型化することもあり、春秋に多発します。
- (3) 軟腐病……細菌による病気ですが、多汁質の植物に多発します。傷口から病原細菌が侵入して腐敗が起きますから害虫の駆除も大切です。
- (4) 白絹病……株元が黒く腐ってその上に白い絹糸状のかびと粟粒のような褐色の菌核ができます。被害株は早目に処分して、その土壤を消毒しておきます。
- (5) ウイルス病……茎葉が萎縮したり、ねじれたり花や葉にモザイク斑やえそ斑を生じる全身的な病気です。予防薬も治療薬也没有から、感染を回避するためアブラムシを防いだり、接触や汁液による感染に気をつけます。
- (6) さび病……茎葉の表面に白色、橙黄色や褐色の粉質の胞子をつくりませんが、やがて葉が黄化枯死して落葉したりします。
- (7) 立枯病……茎の地際部や根が侵されて枯れていく土壤病害で、茎腐れ、根腐れのほか症状によって紋枯病、苗立枯病などの呼び名があります。
- (8) 菌核病……葉のつけ根が腐ったり茎まで腐って全株枯死したりしますが、患部に白いかびが生え、この部分に黒いねずみの糞のような菌核をつくります。
- (9) ベト病……葉に黄褐色のぼやけた斑紋ができて、この葉裏には薄く白い霜のようなかびが生える病気です。低温多湿で発生します。
- (10) 根こぶ病……生育がだんだん遅れて日中にしおれたりします。この株を抜いてみますと根にこぶができています。(根こぶ線虫のこぶより大きい)

4. つきやすい害虫(10種)

- (1) アブラムシ……特に若い新梢、芽、蕾、葉の部分の吸汁加害によって萎縮や歪曲、生育不良、変色枯死を起こしたりウイルス病の媒介をします。
- (2) ヨトウガ……幼虫はヨトウムシとも呼ばれ、ふ化幼虫は集団で葉裏から表皮を残して食害しますが、成長すると分散して日中は陰にかくれたり土中にひそんでいて夜間出てきて食害します。幼虫が大きくなると防除が困難ですから、早目に駆除することです。周辺の雑草の除去にも努めます。
- (3) ハダニ……葉の上に蜘蛛が糸をはったようになって小さい虫が這っています。生育不良や葉が白っぽくなったりします。乾燥や肥切れにも注意が必要です。
- (4) オンシツコナジラミ……葉の裏に白い小さい虫がいっぱい付着して盛んに飛びます。この虫がいる葉にはすす病が発生しています。温室やフレームでの発生がふつうですが、夏には露地での発生もみられます。

- (5) アオムシ……ハボタンなどのアブラナ科植物に多く発生します。葉を食べて穴をあけますが、モンシロチョウの幼虫です。春～秋に発生しますが、真夏には減少します。丹念に見廻って早目の駆除が大切です。少ないときは捕殺します。
- (6) メイガ……幼虫が成長点に食い入って内部を食うので、途中から虫糞が出たり、芯止りになったり生育が悪くなります。高温乾燥時、幼苗期の被害が大きいです。
- (7) コナガ……葉が白くなって小さい穴をあけます。葉裏には緑色の小さいイモムシがいます。年間10回以上も発生しますが、早目の防除が必要です。
- (8) コガネムシ……マメコガネなどは成虫は葉をかじりますし、幼虫も乳白色で大きく、土中での根の食害が甚しく根がほとんどなくなって生育が悪くなり、花が咲かなかったり枯れたりします。こまめに捕殺して、多発の場合は薬剤の土壌灌注を行います。
- (9) ナメクジ、カタツムリ……軟い新葉や花などが一夜のうちにかじられて穴があいたり切られたりします。ナメクジの這った跡が白くすじ状に残っていれば鉢裏など調べて捕殺します。ナメクジ剤の使用も有効です。
- (10) ネコブセンチュウ……根に大小の虫こぶができていて生育が目に見えて悪くなります。土壌消毒をするか、回避の対抗植物マリーゴールドを植えるのもよいでしょう。

5. 主要病害虫の防除一覧

病 名	殺 菌 剤
灰色かび病	ベンレート、スミレックス、ロブラール、トップジンM、マンネブダイセン、ダイセン
ウドンコ病	モレスタン、サブロール、トップジンM
軟 腐 病	銅水和剤、ストレプトマイシン剤
白 絹 病	バシタック、PCNB、トップジンM
ウイルス病	(殺虫剤による媒介害虫の駆除)
さ び 病	プラントバックス、ダイセン、バシタック、ダイファー
立 枯 病	ダコニール、ベンレート、トップジンM、タチガレン
菌 核 病	スミレックス、ロブラール、ベンレート、トップジンM
べ と 病	ダイセン、エムダイファー、マンネブダイセン
根 こ ぶ 病	PCNB、コプトール、アースサイド

害 虫	殺 虫 剤
ハダニ	ケルセン、アカール、モレスタン、エイカロール
オンシツコナジラミ	エルサン、モレスタン、スプラサイド
アオムシ	マラソン、オルトラン、除虫菊剤
メイガ	スミチオン、オルトラン、デブテレックス
コナガ	オルトラン、アクテリック、トクチオン、エルサン、パプチオン
コガネムシ	カルホス、DDVP、ダイアジノン
ナメクジ、カタツムリ、ダンゴムシ	デナボンベイト、グリーンベイト、ナメトックス
センチュウ	(クロールピクリン、メチルプロマイド)、ネマレート、ネマモール、石灰窒素
アブラムシ	オルトラン、ダイシストン、アクテリック、デブテレックス、エカチンTD
ヨ ト ウ ガ	スミチオン、オルトラン、デブテレックス

Q&A

花づくりこんなときどうする？

Q 秋植え球根類の追肥は、いつ、どれほどやればよいのか。

A 秋の植えつけ時の基肥のうち、窒素成分は、春までに流亡して欠乏状態です。といって春暖かになっての追肥は、おそ効きとボトリチス病や球根腐敗病の多発が心配です。そこで、年内で肥料成分流亡の恐れがなくなる地温5℃以下の季節（降雪直前）になったら、化成肥料（三要素各15％程度）25～30g/m²を花壇の表面にばらまいてやります。ユリ類のように翌春以後生育期間の長いものは、年末の追肥よりも融雪直後と花後に、前記と同様の施肥をします。

Q 秋植え球根類の花後のお礼肥えは必要か。

A 必要ありません。大部分の秋植え球根は、開花期までに茎葉への肥料栄養の吸収と生育がほぼ終わって、以後は葉から球根へ貯蔵栄養が送られるだけです。

したがって、花後の肥料は球根肥大に役立たず、根から球根へ直接肥料成分が移行してその濃度だけが高まり、球根腐敗病などの発生が多くなる恐れがあります。なお、ユリ類のように生育期間の長いものは、当然追肥が必要です。

5. これだけは揃えたい園芸用具のいろいろ

家庭で使う園芸用の用具は、それほど多くは必要としません。最低、これだけ備えておけばよいというものを紹介します。

1. 剪定するための用具

(1) ハサミ類

園芸用のハサミとしては、植木バサミ、剪定バサミ、生花用ハサミの3種類あります。それぞれ用途がありますので、全部揃えるにこしたことはありません。

しかし、どれか1つを選ぶとすれば各種の用途に向く、植木バサミを用意します。

植木バサミは先端がよくとがり、やや細めのものが使いやすく便利です。

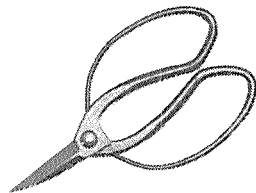
2. 灌水するための用具

(1) ジョウロ (如露)

蓮口 (水の出る部分) の取りはずしができるものを求め、水が広がって出る平口と、まとまって出る丸口の蓮口を取り替え用として準備し使い分ければ便利です。

(2) 水さし

吊り鉢用の用具として必要です。水の出る部分がぐっと上のほうに向いているものを使ったほうが、細かい枝葉の間にも平均して水やりができ、また、鉢土に水の勢いをつけずに水やりができます。



3. 用土を調整するための用具

(1) フルイ

花だんなど、一般の栽培には特に必要ありませんが、種まきなどするときには必要です。

まき床の土づくりをするときにフルイがあると、土がふるい揃えられて作業がしやすく、便利です。

4. 除草するための道具

(1) 除草ナイフ

細かく植わっている中に生えている雑草をとるときには、たいへん便利です。除草ナイフとして市販されていますが、一丁備えつけておくに役立ちます。

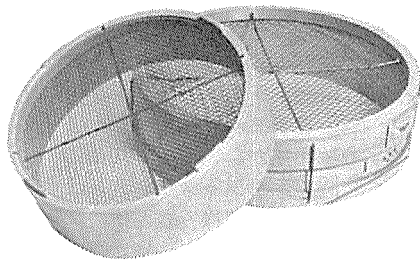
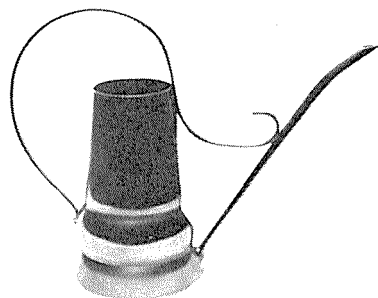
(2) コガマ (小鎌)

除草用具としては、最も簡単なのは小鎌を用意しておくことです。普通の草刈り鎌と、稲刈り鎌が使いやすさから適しています。

5. 薬剤を散布するための用具

(1) 噴霧器

薬剤 (水溶性の薬剤) を散布するには欠かせない用具です。小型で簡便なスプレー式から、手押し



の半自動式、大型の全自動式までいろいろありますが、一般家庭としては、5～10ℓ程度の手押し噴霧器は必要です。

6. 土を掘り、耕すための用具

(1) 移植ゴテ

ちょっとしたものを掘ったり、移植をするとき、肥料すくいや混合など、細かい仕事に利用できます。買うときは柄と刃の境目ががっちりして、折れ曲がらないよう丈夫なものを選びます。

(2) シャベル

土を掘り起こすのには欠かせない用具です。普通に使う大型のものが一丁あれば十分です。柄がまっすぐでつけ根のしっかりしたものが使いやすい。

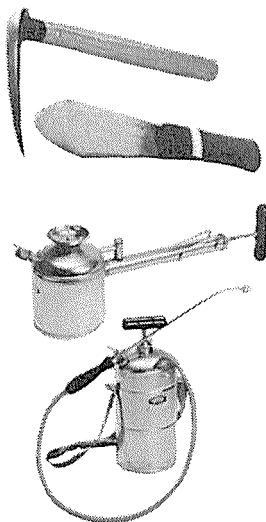
(3) クワ(鍬)

土を耕したり、畝を作るときに必要です。いろいろの形のものが市販されていますが、多少値段が高くて、やや重量があり、切れ味のよいものを選ぶことが必要です。

(4) レーキ

土をならしたり、落葉、ごみを集めたりするときにあると便利です。

かがんで使う6～8本爪の小さいものから、立ったまま使う大きい20本爪位までいろいろあるので、用途にあわせて準備します。



Q&A

花づくりこんなときどうする？

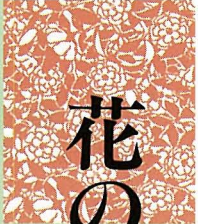
Q クジャクサボテンを栽培していますが、大きくなるばかりで花が咲きません。どうしたら咲くようになりますか。

A クジャクサボテンは他のサボテンと同様、春と秋によく伸びますが、真夏は苦手で、特に強い直射日光にあてると弱りますので、寒冷紗等で50%ほどしゃ光した場所に置きます。肥料は春から初夏にかけて施すようにし、

夏は休んで勢力の維持につとめます。

冬はガラス越しの光によく当てるようにし、乾かしぎみに育てます。冬に水分が多いと花芽がつかないので、水やりをひかえて、葉が赤味を帯びるほどに乾かして育てると、花芽がよくつきます。

植え替えは2～3年に1回とします。あまりひんぱんにすると葉状茎だけがよく繁茂して、花つきが悪くなります。



花の楽しみ方いろいろ

寄せ植え



室内花だん



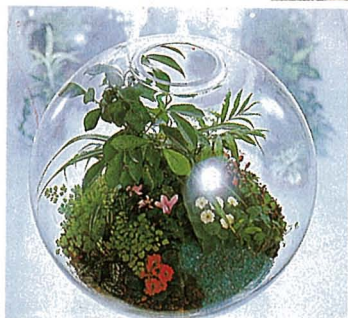
室内花だん

鉢・寄せ植え





テラリウム



水栽培



ヒヤシンス



チューリップ



水と花(砺波市チューリップ公園)

花のデコレーション



1. 吊鉢で楽しむ草花

明るく大きなガラス窓は室内へ十分に光を導き、高い天井は生活空間を広く伸びやかにします。そして、机、イス、或いは応接セットなど、住居の洋風化と共に、鉢花を飾り吊鉢を楽しむといったことが、日常あたりまえのこととなってきています。

ことに吊鉢は割合に新しい園芸の楽しみ方で、床から離れた空間に明るい色彩の花が咲いていたり、浅緑の観葉植物の蔓が静かに垂れているなど、いわゆる意外性がある心楽しいものです。当然のことですが、そこに用いられている植物がなんであるかも興味のあることではありますが、吊るす鉢やそのカバー、あるいは吊具(フックやロープなど)などに凝ってみるのも趣きのあるものです。

1. 吊り場所を選ぶ

吊り鉢はその位置を決定すると、ほとんど固定的で、そうたびたび移動するものではありませんから、インテリアとしての効果も十分に考えて決めたいものです。したがって、その吊り鉢に用いる植物の種類によって、それぞれに応じた太陽光が得られる位置で、しかも日常生活の妨げにならないことなどが大切です。

多くの観葉植物では、直射日光の入る窓辺よりも反射光が十分に入る程度の場所で、その葉色が適切な本来の色を示してくれたり、好光性で明るい花色の鉢花では、直射光の当たる窓辺で、レースのカーテンを1枚引いたような状態のところが適当でしょう。

真夏の直射日光が当たるようなところでは、葉焼けをおこして、葉の本来の美しい緑を損うもので、よくよく注意が肝要です。なお、ほとんど日光に当たらないような場所に吊るすような場合には、5～7日に1回、場所を移動して、日光に当たるようにしてやる配慮が必要です。

2. どんな植物を選ぶか

吊り鉢向きの植物といえば、とかく蔓性のものを連想しがちです。下垂する芽を摘んで茎の長さを調節してやれば、当然、茎の数も多くなり、ふさふさと繁って見た目にもよいのですが、一方では横に張って吊り鉢を覆うしだ類などいろいろあります。一般に蔓性の観葉植物が

吊り鉢のいろいろ



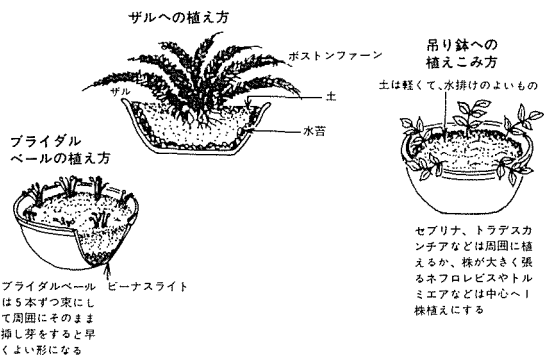
普及していますが、立ち形の観葉植物、草花類も多く用いられます。

- (1) 蔓性植物：アイビー、エキナンサス、オリヅルラン、サクララン、セダム、ポトス、ボストンタマシダ、ブライダルベール、トラデスカンチアなど。
- (2) 立ち型の植物
 - 1) アジアンタム、アスパラガス、ベゴニア、マソニアーナ、ペペロミア、マランタなど。
 - 2) ベゴニア、シャコバサボテン、インパチェンス、コリウス、セントポーリアなど。
- (3) 以上のほかに、イチゴ、プチトマト、パセリなど野菜類も楽しまれています。

3. 手作りの吊り鉢

市販の吊り鉢は5～7号鉢が主体で、簡単に吊すだけで楽しむことができますが、折角ですから自分で好きな植物を選んで、好みの鉢に植え込んでみたいものです。

蔓性の観葉植物ならさし芽で、シダ類なら株分けで、あるいは、1年生の草花類ならば幼苗を、それぞれに使用する鉢に見合った本数だけ、さし芽や植え込みを行います。また、一つの鉢に、上に伸びる植物と下がる植物、花の咲くものと観葉ものなどを、配色よく混植すれば、市販のものには見られない手作りの味わいを楽しむことができます。なお、混植の場合は、日照、土壤水分など栽培条件の似た植物を選ぶこ



＊花と伝統文化

祭り と 花

◇ぼたん

全国各地のお祭りで、子供たちが、山車や鉦や引出物を引く光景がみられます。それらの子供たちは、いずれも花笠をかぶっていますが、その花笠の飾りはほとんど牡丹の花の造花だと言われています。

◇さくら

紀州熊野や京都の今宮各神社では、今日なお伝統の鎮花祭があります。桜その他の美しい花を瓶に入れ、その瓶の中には宝剣が隠されていて、悪疫を流す悪神が花に魅せられて集まると、宝剣にふれて死滅すると伝えられています。

とが大切です。

4. 鉢 と 土

吊り鉢にはいろんなものがあるので、生育に支障がなくて吊り場所や植物との釣り合いがよければ自分の好みで選びます。また、吊り下げるという点から考えて、あまり重いものは使用しない方がよいでしょう。

用土についても、吊すものですから重いものは避けて、なるべく軽く、通気性に富んでいて、水もち、肥えもちのよいものを用います。例えば、赤玉土、腐葉土(又はピートモス)、バーミキュライト(又はパーライト)を5:3:2ぐらいの割合で配合し、鉢底にはゴロ土に代えて、発泡スチロールの砕いたものを入れるなどしてやるといいでしょう。

5. 管 理

- (1) 水やり：吊り鉢の水やりは、鉢土の表面が白く乾き始めたら、鉢底の穴から水が流れるくらいたっぷりと与えます。何日おきに鉢が乾き水やりが必要になるか、その鉢の大きさや用土の質、植物の種類、季節などでいろいろ違うので、鉢土の水分と土の表面の乾き具合の変化などを、よく観察して心得ておくことが大切です。

水やり作業は、暖期は戸外で、寒期は室内(浴室など)で十分に灌水を行い、よくしずくをきってから室内に吊り下げます。

- (2) 肥 料

秋のはじめまではどんどん生育し、新しい根や葉を出し、また、花をつけるといったことで、月に1回、粒状の化成肥料を4号鉢でひとつまみ、液肥ならば10日～2週間に1回灌水がわりに施します。油かすなど異臭の発生する有機質肥料を与えることは避けます。一般に冬季間の施肥は行いません。

花 と 演 劇

◇きく、さくら、ふじ

八重垣姫が歌舞伎で美しい菊模様の衣裳を着けており、能の猩猩でも菊のものを用いています。

また、白浪五人男(道成寺)には桜が使われていますし、舞踊の藤娘では衣装や舞台に藤が使われています。

そのほか、能や歌舞伎、舞踊では、舞台の飾りや、背景に牡丹を用いることが多いこともよく知られています。

(3) 株の手入れ

- 1) 株の姿を整える：蔓や葉が伸びすぎて株の姿が乱れることがよくあります。また、葉がすかすかでもっと株を茂らせたい場合もあります。

伸びすぎて乱れた株では、茎や葉を間引いたりかきとったりしてやります。また、すかすかの株は摘芯をしてわき芽を伸ばし、茎葉の数をふやして株張りをよくするように努めます。損傷を受けて見苦しい茎や葉は、見つけ次第に取り除いたり、常にすっきりとした草姿に整えておきます。

- 2) 葉を美しく保つ：室内で栽培、観賞するものですから、葉の表面がちりやほこりで汚れます。ときどき葉にスプレーしたり、湿ったガーゼなどで葉面をふいてやりたいものです。

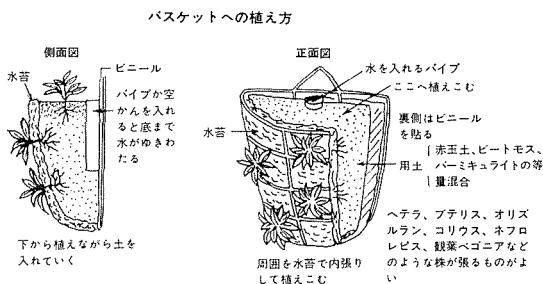
(4) 夏と冬の対策

夏の初めから秋口までの暖期は、とき折、鉢を半日ぐらい戸外の木洩れ日程度の明るさのところに出して、株の強化を図ってやります。また、冬季は室内の5℃以上の暖かくて湿度のある場所に吊したり、蔓を刈り込んで似かよった棚上などに置いて冬越しします。

(5) その他

吊り鉢とよく似て、草花や観葉植物で室内空間を飾るものに、ハンギングバスケットやハンギングタブローなどがあります(右図)

室内で楽しむ花と緑としては是非ともやってみたいものです。



花と建築

牡丹は、豪華で美しいことから、建築装飾に多く用いられており、牡丹唐草が創作されたり、唐獅子には必ず牡丹がつきものとされ、欄間や彫刻として、建築物に数多く用いられています。

透彫りで美しいのは宝蔵寺(滋賀県)の唐門、二条城や本派本願寺の欄間(いずれも梅、椿)、都久夫須麻神社本殿(琵琶湖)の牡丹があります。

また、本派本願寺の奥書院欄間の藤の花、大徳寺唐門の花しょうぶの彫刻も有名です。

2. 寄せ植えで楽しむ

草花の楽しみ方の一つに寄せ植えがあります。ことに室内に寄せ植えを飾ると、素晴らしい雰囲気生まれます。季節感を表す“正月用松竹梅”“クリスマス用寄せ植え”“ミニ観葉植物寄せ植え”等があります。

1. 寄せ植えづくりのポイント

- (1) 生育条件の似かよっている植物を組合せる。(日あたり、温度、湿度、水分必要量など)
- (2) 徒長せず、長期間鑑賞できる植物。
- (3) 用土の配合に気をつけること。
- (4) 飾る場所にふさわしい鉢を選ぶこと。

2. 草花の組み合わせ

- (1) 正月用松竹梅
松(黒松、五葉松)、梅(冬至梅)を中心に笹、南天、フクジュソウ、ユキワリソウ、ハボタン、ヤブコウジなど
- (2) 観葉植物を主体とする
アジアンタム、ペペロミア、ツデイ、ベンジャミンゴム、ポトス、アビス、ホヤ、レックスベゴニア、オリヅルラン、ヘデラ、ディフェンバキアなど
- (3) 鉢花を主体とする
シクラメン、プリムラ類、ポインセチア、シンビジウム、ベゴニア・センパフローレンス、リーガス・ベゴニア、アザレア、セントポーリアなど
- (4) 観葉植物と鉢花の組み合わせ
上記(2)と(3)を組合せる

3. 鉢

ぬり平鉢、ガラス製鉢、金属製鉢、プラスチック鉢、藤かご(外飾り用)等があります。排水孔のある鉢は受け皿を準備します。

4. 用土の配合

寄せ植用土は、排水、保水、保肥性の良いものが適します。用土の種類としては、田土(乾燥し粉碎したもの)赤玉土、バーミキュライト、パーライト、川砂、ピートモス、腐葉土等のうち入手しやすいものを選んで配合します。例えば、赤玉土2、バーミキュライト1、川砂1に緩効性の化成肥料を用土1ℓに5gを入れ混合します。この配合例は鉢花、観葉植物に利用します。正月用松竹梅は粘質な田土をベースとします。

5. 植えつけ

病気、害虫の被害、根づまり、下葉の黄変等を確めて、悪い部分を取り除き、寄せ植えします。

葉の色や形、花色等全体として調和をとります。

6. 管 理

- (1) かん水：表土が乾いたら十分かん水します。やりすぎて過湿になるのは禁物です。できれば水さしをを使用土全体にゆきわたるように、ていねいに行います。
- (2) 追肥：液体肥料800～1000倍液を鉢花は10日に1度、観葉植物は月に1度のめやすで施します。
- (3) 花がらつみ：鉢花で咲き終った花がらや、いたんだ葉はつみとります。

7. 寄せ植えづくりの方法—正月用松竹梅の例—

迎春に玄関や床飾りに松竹梅等縁起木を飾る習慣が江戸時代よりあります。

(1) 材 料

1) 植物の種類

種 類	適 し た 品 種
マ ツ	クロマツ、ニシキマツ、ゴヨウマツなど
ウ メ	冬 ^{とうじ} 主 ^{めい} 梅、一重(花色は白)。八重野 ^{やぶい} 梅(花色は白)。道 ^{みち} 知 ^{しる} 辺 ^べ 、一重(花色は桃)。寒 ^{かん} 紅 ^{こう} 一重または八重(花色は濃桃)紅 ^{べい} 千 ^ち 鳥 ^{とり} 、一重(花色は紅)など
タケ・ササ類	クマザサ、コグマザサ、シマザサ、オロシマチク、ヤクシマザサ、ホウオウチクなどの小づくりにした株を使う
ナンテン	赤実のナンテンと白実のナンテンを組ませ、紅白として用いることが多い。その他、オタフクナンテンなど
フクジュソウ	野 ^や 生 ^{せい} 種(一重、中輪、黄色)、福 ^{ふく} 寿 ^{じゆ} 海 ^{かい} (二重、大輪、濃黄色)、福 ^{ふく} 祿 ^{りく} 寿 ^{じゆ} (二重、巨大輪、濃黄色)など
イワカガミ	野 ^や 生 ^{せい} 種
ヤブコウジ	野 ^や 生 ^{せい} 種
寄せ植えに使用するその他の植物	マンリョウ、シュンラン、ユキワリソウ、ショウジョウバカマ、ハボタン、カンギク、キチジョウソウ、

2) 鉢、用土等

	用 途
ア オ ゴ ケ	寄せ植えた根元を美しく引き締める。ギンゴケ、ホソバオキナゴケなどを用いる
石	寄せ植えの点景物として、水石、火山岩など、凸凹のあるおもしろみのあるものがよい
化粧砂	築山風、盆景風など、鉢の余白に化粧砂を敷くことにより、さらに美しさが増す。寒水(白)、蛇紋石(グレー)、富士砂(黒)、大磯(混色)などを3～5mm目のふるいでふるった砂を、1～2種用いる
用 土	(川砂) 水はけをよくするため、鉢の底部に敷く。3～6mm目でふるった少し粗目のもの (田土または荒木田土) 根固めに用いる。あらかじめ粘土状に練っておく (培養土) 植え込み用の土。赤玉土5、川砂3、腐葉土2の割合でよくまぜ、少し湿り気を与えておく (ケト土) アオゴケをはるとき、接着材の役目をする。よく練って、のり状にしておく
鉢	だいたい浅鉢を使用。形は小判、長方、丸など。釉薬 ^{ゆうやく} は、かかっていなくてもよい。鉢選びは、全体の形を考えてきめること。また、素材が多くある場合は、鉢を選んでから植込む材料をきめるのも一法であろう
防虫網・針金	鉢底の穴を防ぐ防虫網と、それを固定する20番ぐらいの針金(5～6cm)を数本用意する

(2) 構想—配置—

- ・材料の種類
- ・主材料(松・梅等)の大きさ
- ・仮配置

(3) 作業手順—多少の入替えはある—

- 1) マツ・ウメ・ササ等鉢植え株のまわりの土を1/3～1/2かきおとす(根鉢を小さくする)。
枯れ葉、枯れ根を切りとる。
- 2) 鉢、用土の準備
 - ・鉢底に防虫網又は鉢かさをおく
 - ・水はけを良くするためごろ土又は川砂を1cm位敷く。
- 3) 主、副の植物(マツ、ウメ又はウメ、マツ)の位置、向き、高さを決め固定する。鉢の前の部分はあけておく。田土を使う。
- 4) 添の植物をあしらう。大きさ、色等のバランスを考え植えつける。田土を使う。

- 5) 石を置く。石の形・全体のバランスを考える。
- 6) 余白部分に田土を入れる。全体を固める。
- 7) 十分灌水し、水切れをまつ(5分～15分間位)
- 8) コケをはる
- 9) 化粧砂を敷く。(寒水石・赤玉土等)
- 10) 鉢の汚れをねれ布でふく。

(4) 観賞期の手入れ

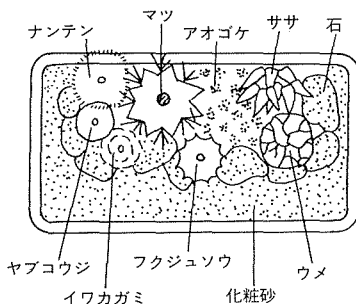
1) 置き場

- ・1日の温度差を少なくする(15℃差位)
- ・日あたりの良い場所

2) 灌水

- ・2～3日に1回・午前中
- ・水差しで静かに灌水する
- ・フクジュソウのつぼみにかけない
- ・ウメのつぼみに霧吹きを行えば開花が早まる

〔例〕寄せ植えの配置図



Q&A

花づくりこんなときどうする？

Q クンシランやオリヅルランは、なゼランと呼ばれているのですか？

A 植物学がまだ一般的でなかった時代に、平行脈をもった細長い葉の植物をランとまちがえたのです。

たとえば、ユリ科の植物では、オリヅルラン、ハラン、スズラン、ヤブラン、ヒガンバナ科の植物では、クンシラン、リュウゼツラン、ショウキランなどがその例です。

Q おもしろい名をもった植物を紹介してください。

A 動物、天然現象、産地名、植物の形質などがつけられています。

イヌサフラン、キツネノカミソリ、トラノオ、サギソウ、トキソウ、マツムシソウ、スズムシソウ(動物、鳥、虫)・アサギリソウ、カスミソウ、シモバシラ、ナツユキソウ(天然現象)、ヒャクニチソウ(百日草)、センニチコウ(千日紅)、ニチニチソウ(日々草)、(開花期間、花色の持続、開花の状態)などがあります。

3. テラリウムで楽しむ

テラリウムは一般的には、ガラス容器の中に植物を植えたミニガーデンといわれていますが、そもそもテラリウム本来の意味は、昆虫などの小動物を育てる飼育器のことをいいます。その中で植物が立派に育つということを発見したのはイギリスの外科医で、今から100年以上も前のことです。そしてその後、またたく間に世界中に広がったといわれています。

テラリウムを初めて見た人は、密封びんや小さな開口部しかないガラス容器の中で、植物が窒息しないで育っていることに疑問をもつかもしれませんが、植物は元気に育ちます。その原理は、密封びんの中に一定の空気と水分と光があれば、植物は光合成によって自ら新鮮な空気を生産し、水分は土中から蒸発しても、水滴となって密封びんの内側に結露し、ふたたび植物に降り注いだり、用土に戻ったりして循環しています。つまり、ガラス容器の中は、私達が住んでいる宇宙(地球)を小さくしたようなものであり、植物はその中で水や空気を自給自足して、生きているのです。

テラリウムには、その材料として、観葉植物が多く利用されるが、最近では、ミニ洋蘭と観葉植物をうまく組み合わせた、色彩のよい豪華なテラリウムを、各地の洋蘭展で見かけるようになりました。

テラリウムは鉢植え草花と異なり、管理が楽ですから、乾燥しがちな季節や場所でも、ガラスの透明感とみずみずしい緑の調和が楽しめます。

1. 飾る場所

容器内の温度が上がりすぎると植物が痛むので、直射日光の当たらない明るい場所が適しています。室内のどこに置いてもよく、好きなときに好きな場所で楽しめます。また鉢と違い、鉢穴から水もれの心配もなく清潔です。

2. 手入れ

水やりは、用土の表面が乾いてきたら霧を吹く程度の補給で十分です。肥料は、ミニの状態を維持したいので、伸びすぎ防止のためにも与えません。雑菌の繁殖を防ぐため、植物、容器、土とも清潔を保つようにします。

3. つくり方

容器……ガラス製のびん、水槽、スタンドガラスの加工容器など、好みのものを選ぶ。密封びんか、容器の口が小さいものほど、水分が逃げないので、湿度が保てます。

植物……明るい日陰を好むミニ観葉植物なら、ほとんどの種類が適しています。また、花を楽しむなら、ミニ洋蘭と観葉植物を組み合わせれば一層豪華になります。

一般草花類は、セントポーリアなど明るい日陰で咲くものを除いて、十分な日光を必要とするものが多いので、あまり向いていません。

用土……粒状で水もちのよい、形のくずれにくいものを使用します。赤玉土、パーミキュライト、ピートモス等を混合して使用します。

4. 植え込み

①



容器をよく洗って乾かし、底にゴロ土を敷き、その上に用土をびんの高さに応じて、1/6から1/4程度入れる。植える位置にスプーンで穴をあけて、根を入れて土をかける。

②



予定の配置に、植物の向きを加減しながら大きい植物から順に植えていく。

③



全部植え終わったら、全体のバランスを見て植物の傾きなどを直し、コルク棒などで用土の表面を押えて、植物を落ちつかせる。

④



霧を吹きかけて葉のよごれをとる。びんの内側の水気は、針金の先に綿を巻つけたものなどでふき取る。用土全体に浸み込む程度に水を与えて終わり。

4. 水栽培(ハイドロカルチャー)の楽しみかた

室内で園芸を楽しむ、そのことは今日ではごく普通のことで、珍しいことではありません。そして、土を用いず清潔な条件のもとで行われる球根草花の水栽培は、ヒアシンスやクロッカクについては、かなり古くから行われています。元来、球根草花は、花が咲くまでに必要な養分を球根自身の中に蓄えて休眠しているもので、適当な条件さえととのえば休眠は破れて生育を開始し、ぐんぐん根を伸ばし、茎葉が成長して花を咲かせるものです。

休眠している球根を呼びさます(休眠覚醒といいます)条件は、まず温度ですが、それぞれの種類によって多少の違いがあります。次に水分です。この二つの条件が満たされると、花芽の分化と発育、そして根が伸び始めます。

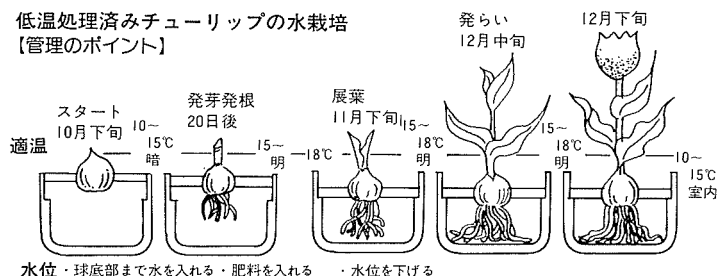
秋植え球根では、球根の掘り上げ貯蔵中の温度経過で、秋までに花芽の分化発育と幼根が球根内部で徐々に発育し、水分さえあれば発根伸長するばかりの状態となっていて、球根を水栽培ビンなどの器にセットして水を与えてやれば、いわゆる水栽培の開始ということになります。

1. 水栽培ができる球根の種類

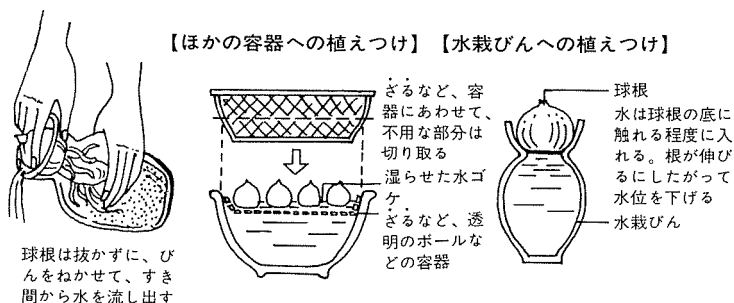
水栽培は、その球根の貯蔵養分を消費しながら水だけで栽培するもので、ちょうどソウメンのように細く、白く、糸のように繊細な根と、緑色の茎葉、そして美しい花を眺めて楽しむ水栽培は、栽培開始時に既に養分と花芽を内蔵している秋植え球根が専ら用いられます。

これは、春植え球根は球根の中の貯蔵養分が少く、茎葉が伸びて、それによって生産される養分で生育開花するため、ほとんど春植え球根は水栽培に用いられず、例外的にアマリリスが供されるくらいです。

低温処理済みチューリップの水栽培
【管理のポイント】



- 植え込んですぐに暖かい室内に入れないこと（花が咲かなくなります）
- うっかりして水をきらさないように。
- 根が伸び葉も伸び始めてから日陰に置くのは禁物です。



水栽培が行われる秋植え球根のうちでも、ヒアシンス、クロッカス、スイセンなどが主体で、このほかにムスカリ、アリウム、シラー、その他2～3のものが可能ですが、あまり行われてはおりません。

なお、チューリップについては、従来、かなり困難とされてきましたが、富山県野菜花き試験場がその技術を開発して以来、チューリップの水栽培は全国的に普及しています(図参照)

2. 水栽培の開始

ヒアシンス、クロッカス、スイセン、チューリップなどの秋植え球根は、夏の暑いうちは、たとえ水を与えておいてもけっして発根してきません。しかし、秋に入って温度が低くなってきますと、水分さえあれば発根しようと待ちかまえています。

チューリップの発根適温が13℃前後であるように、おおかたの秋植え球根の発根温度はこれに近く、秋ぐちから球根底部の発根部が次第に盛り上がってきて、気温が15℃を下回るようになってきますと、水分があれば容易に根は伸び始めます。したがって、このころが水栽培の開始時期といってよく、あわてないで気温の低下状況をよく確めて取りかかることが大切です。この地方では、一般に10月中～下旬に行うのがよく、多少遅れて11月初めになってもよいでしょう。

開始が遅れた場合は、球底部の薄皮が破れて、根の先端が黒・褐変しているようなこともありますが、このような場合は、発根・伸長が大変悪くなるので、よく注意して避けたいものです。

3. 容器

ヒアシンスにはヒアシンスグラス、クロッカスにはクロッカスグラスが市販されているので、これを利用すると便利です。水栽培は、茎葉や花だけでなく、根の発育や美しさまで観察するものですから、透明な器を用いる方がより目的にかなうようです。

器によって1球、3球、5球など種々の型のものがあります。また、チューリップについては富山県花卉球根農業協同組合で、3球と10球の専用水栽培セット

を販売しています)

4. 水栽培の実際

- (1) 球根を選ぶ：大きくて硬く締まったもの、外皮に病痕や傷のないもの、とくに、ヒアシンスやスイセンでは、球根を押してみたとき、部分的に軟かいものは腐敗のおそれがあるので除きます。また、球根の大きさは、ヒアシンスでは直径が5 cmをこえ、発根部が小さくて締まりのよいものを選び、クロッカスでは直径が3 cmをこえる程度のものを選びます。クロッカスの球根は外皮が着いていると発根しにくいので、底の皮をむいてやります。
- (2) 置き場所：球根を水栽培ピンの皿部にのせ、発根部がヒタヒタになる程度に水を入れて、押入れや戸棚の中など暗くて涼しい場所に置きます。数日たてば根が動き始めたことがよくわかります。

根が容器の深さの半分以上に伸びたら明るい所に出しても大丈夫、あとは順調に伸びてくれます。しかし、日光の当たる場所は水温が上がって、水中にバクテリアや藻が発生してくるので、低温の場所を選んで置きます。

- (3) 水位に注意：根が2～3 cmになったころから容器の水位を少しずつ下げてやり、5～6 cmに伸びたら、球根と水面の間を3 cmぐらい離して、根に対する新鮮空気の供給をはかってやります。なお、水面と球底部に隙間があることは、球根腐敗を防ぐことにもなります。
- (4) 水の交換：気温・水温が割合高くなりがちな10～11月中は、7～10日に1回ぐらい、12月から寒中は1か月に1回ぐらい容器の水を換えてやります。
- (5) 低温にあわせる：根が伸びたからといって、すぐに暖かい部屋に入れて開花を急がせると失敗します。凍らない程度の低温の場所に40～50日置いて、十分に低温にあわせてから暖かい室内に取り込んで開花させます。

はじめから暖かい部屋に取り込むと、茎葉の伸びの不足、草姿の乱れ、開花の遅れなどを招いて失敗します。

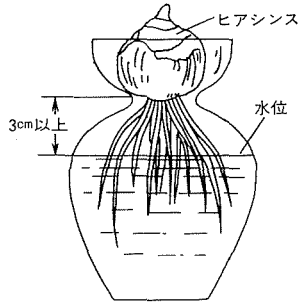
5. その他(水栽培に関連する2～3のことから)

- (1) スイセンのカニ作り：大球のニホンスイセンの水盤作りの一つで、球根の先端から僅かに葉先が出たところが適期、子球が3～4個ついたものが出来が良くなります。親球を中心にして一直線に並んでいるので、安定し易い方を下にして、下図のように球根の上面から、葉や蕾を包んでいる苞が出るまでけずり取り、それぞれの葉の縁を1 m/mぐらいそぎ取ります(各葉の先端は傷をつけず、約5 m/m下からそぎ取ります)球の中心の蕾を覆っている苞に傷をつけないよう慎重に行います。

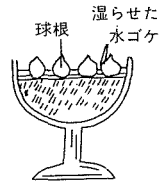
切り終えたら水盤に小砂利を敷いてその上に置き、切口を乾かさぬようにガーゼで覆い、球底が水に浸るまで水を入れて栽培します。

- (2) 水苔栽培：土や砂の代りに水を含ませた水苔を用いて栽培するもの、底に穴のない皿やガラスなど種々の容器に水を含ませた水苔をつめ、ここにヒアシン

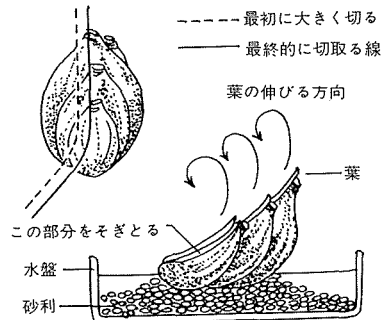
水位を下げるのがコツ



水苔栽培



スイセンのカニ作り



スイセンのカニ作り ニホンズイセンを使う カニ作りの仕立て方

ス、クロッカス、ムスカリ、スノードロップ、スイセン、チューリップなど多くの球根を栽培する。水栽培の一種とも言えます。

みんなで楽しむ花づくり



高崎スミ子邸(富山市)



中太閤山小学校



上市中央小学校



出町小学校



黒部中央小学校



日本海電測KK(大沢野町)



栃谷美紀夫邸(富山市)



花の愛好グループ(魚津駅前)



西上老人会(城端町)



大森地区村づくり協議会(立山町)



弁財天公園(庄川町)



山岸生産組合(福岡町)



高岡市若杉



太田福寿会(砺波市)



春日自治会(高岡市)

1. 花だんづくりを倍に楽しむ

1. 花壇の種類

土地の広さ、形や、環境状況によりいろいろな花壇の楽しみ方があります。

(1) 毛せん花壇

草丈の低い草花をじゅうたんを敷いたような模様にした美しい花壇で、大規模なものは見ごたえがあります。多くは左右対称で鳥や動物などをデザインすることもあります。構成にあたって草丈が低く花、葉が密生する種類を用います。パンジー、ベゴニアセンパフローレンス、ペチュニア、サルビア、マリーゴールド、ケイトウ、テランセラ等、公園、芝生の中などに作ります。

(2) 寄せ植え花壇

中央を高くして、周囲から眺められるように草花を植え込む花壇です。中心に花木、ユツカ、カンナ、ダリア等丈の高いものを植え、サルビア、マリーゴールド等周囲に順次低いものを植え込み、足もとをひきしめるため縁取りをします。公園、ロータリー、玄関前などに作ります。

(3) 境栽花壇

後に草丈の高いもの、次に中位のもの、前に低いものを植え込む花壇です。一方ないし三方から眺めます。建物、構築物の前に作ります。

(4) リボン花壇

草丈の低いものを帯状に植え込む花壇です。道路、建物ぞいにアクセントとして作ります。

(5) 沈床花壇(上の4つは形状を示すがこれは位置を示すもので、この中にもいろいろな形状が取り込まれる)

道路から一段低くなった場所に作るものです。幾何学模様の左右対称なデザインによることが多く、公園等に作ります。

(6) その他

1) 水栽培花壇(池、水槽に水生植物を植え込みます)。

2) ロックガーデン(岩石を組合せて、山草、高山植物などを植えます)。

2. 花壇の配色

花壇の美しさは、色彩によってきまります。色の組み合わせについて、花壇の種類、草花の草丈、開花期を考慮して季節ごとにリズムをつくってやりたいものです。草花は葉茎の緑がベースとなっています。配色には季節感をだしたいものです。

表1を参照して下さい

(1) 1色または同系色の組み合わせ

赤と桃のような組み合わせはおだやかで、一体感のある調和のとれたデザイン

となります。

(2) 補色の組み合わせ

黄と紫のような組み合わせはコントラストを生かした鮮明なデザインとなります。

(3) 暖色と寒色の組み合わせ

赤、橙、黄等は暖色で、白、青、紫等は寒色です。これらの色の用い方で春、夏、秋の季節感を作ります。春は赤、黄。夏は白、青、黄。秋は赤、黄、白といった組み合わせが人の心をあたたかくも、涼しくもしてくれます。(表2参照)

3. 草花の選び方

(1) 種類は少なくします。

花壇の美しさを求めるためには、なるべく草花の種類を少なく、株数を多くして、集団の美を強調します。

(2) 花色は3～4色とします。

赤、黄、白の3色を使っても葉の緑と土の茶色が加わると5色になります。

(3) 気候条件に適した種類を選びます。

早春や晩秋には霜にたえる種類を、盛夏には高温、多湿に強い種類を選びます。

(4) 丈夫で作りやすく、開花期間が長いものを選びます。

(5) 草花の種類は表3、4、5、6を参照して下さい。

4. 花壇の縁取り

花壇は縁取りの仕方によって感じが違ってきます。

(1) 石材—大谷石、鉄平石、花こう岩、玉石など

(2) 加工材—れんが、ブロック、タイル、かわらなど

(3) 木材—焼丸太、杭、竹など

(4) 植込材料—低木(クサツゲ、イヌツゲ、サツキなど)

草物(リボングラス、ジャノヒゲ、タマスダレ、ヤブランなど)

(5) その他—空びん、コンクリートテスト、棒杭など。(図1参照)

5. 点景工作物

花壇と点景物が一体となって美しい環境を作りだすものです。

(1) 彫塑、日時計、レリーフなど。

(2) 池、壁泉、噴水など。

(3) パーゴラ、アーチ、トレリスなど。

6. 良い土の条件

良い土が花壇の草花にとって大切な条件です。

(1) 通気性があること。

根が十分育つには、空隙(空気→酸素を含んでいる)の多い膨軟の土であること。

(2) 保水力がある反面、排水が良いこと。

(3) 有機物を多く含んでいること。

(4) 土の酸度が適正であること。

- (5) 有害物質を含まないこと。

7. 土作りの実際

- (1) 客土をしよう。

肥沃な畑土や田土があれば、客土をします。この際、底土の排水をよくする努力も必要です。表層の土を一度に全部換えられなくても、少しずつでも良い土と換えてやりたいものです。

- (2) 毎年有機物を与える

- 1) 稲わら、落葉、雑草、もみがら等を材料に堆肥を作り最低でも 2 kg/m^2 は施してやりたいものです。
- 2) 近くに畜産農家があれば、きゅう肥を利用するのがよく、できるだけ完熟したものを用います。
- 3) 堆・きゅう肥がなければ、腐葉土、ピートモス、パーク堆肥などを与えます。

- (3) 石灰を施そう。

土壌酸度を適正にし植物体にカルシウムを供給するため、花壇植込みの7～10日前に消石灰を m^2 当り $100\sim120 \text{ g}$ くらい施して土と良く混ぜます。

8. 肥料の施し方

- (1) 基肥には堆肥、油粕、鶏ふん、骨粉等の有機質肥料などと緩効性の化成肥料を併用すると効果的です。
- (2) 追肥には、尿素、熔成磷肥、硫酸加里、化成肥料等一般に効果の早い化学肥料を用います。
- (3) 基肥と追肥の割合は、 $1:1\sim2:1$ を標準とします。

9. 苗の準備

花壇を1年中美しくたもつには、植えかえ数が多くなり、多数の苗が必要です。本県では早春～春までの花壇、夏～秋までの花壇、晩秋～冬までの花壇の3回が考えられます。

- (1) 定植間隔

草花の種類、苗の生育状況、花壇のデザインによっても異なりますが、標準的な間隔は表7、8のとおりです。

- (2) 植え込み株数

表9の早見表により苗の必要本株を出して下さい。

10. 手 入 れ

- (1) かん水

定植から活着までと夏のかん水がおもなものです。夏期日中の高温時をさけて朝か夕方かん水を行います。

量は 1 m^2 あたり 3 l 程度を標準として夏は十分に、春、秋はひかえ目にします。適量かどうかは地表下 20 cm 近辺まで水がしみこんだかどうかで判断します。

(2) マルチング

地表からの水分の蒸散を防いで乾燥を避け、雑草をおさえ、降雨時の土のはねかえりもなく病害を予防するためマルチングは効果的です。

材料は切りわら、落葉、ピートモス、もみがら等入手しやすいものを選んで行います。

(3) 除草、中耕

雑草はそのままにしておくと、肥料分や水分をすいとり、草花の生育が悪くなります。また通風が悪くなり病害虫の発生がみられます。

雑草は根気強く根ごと抜きとります。

中耕は除草をかねて、土を柔かくし、凸凹を多くして空気に触れる面積を増大するとともに通気と透水を良くします。

(4) 摘芯、刈込み

分枝を促し、株張りを良くし花数の増加や、草丈の調節と開花期をそろえる働きがあります。摘芯する種類は、サルビア、マリーゴールド、ダリア、コスモスその他、数多くあります。(図2参照)

茎の柔らかいもの、株の小さいものは草姿を整えるため刈込みを行います。刈込みする種類にはテランセラ、トレニア、クサツゲその他多くあります。

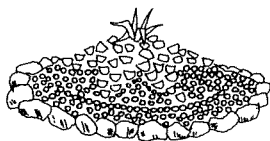
(5) 花から摘み

開花後一定期間をすぎると色があせて見苦しくなり結実を始めます。この状態が続くと脇芽の蕾が開花しなかったり新しい枝がでなくなったりして開花期の幅が短くなります。

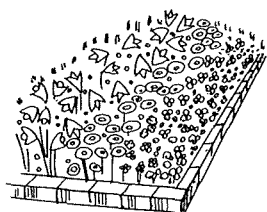
サルビア、マリーゴールド等その他対象となる種類は数多くあります。

花壇の種類

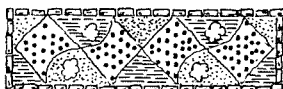
寄せ植え花だん



境栽花だん



リボン花だん



Q&A

花づくりこんなときどうする？

Q シクラメンを毎年買いますが、なかなか長持ちさせることができません。長持ちさせるにはどうすればよいでしょうか。また来年も咲かせることはできないでしょうか。

A 家庭での日常管理でシクラメンが早く「ダメ」になる原因として、次のことが考えられる。

- (1) 水のやりすぎ、特に受皿に水をいっぱいためている場合。
- (2) 光のあたらない部屋に置きっぱなしの場合。
- (3) 寒気のすき間風のあたる所におきっぱなしの場合。
- (4) ストープのすぐそばに置いてある場合。
- (5) 水やりを忘れて、何回もしおれさず場合。

以上のことをふまえて、水やりは鉢表土が乾燥した頃に、コップで茎葉にかけないように、鉢底穴から流れ出るくらいにたっぷりと与えます。また置

き場所は、ガラス越しに日光が当たる所で、多少寒くても置き場所を変えないことが長持ちさせる条件です。

冬から春にかけて咲き続けたシクラメンは、4月頃になると花が咲かなくなり、古い葉はだんだん枯れてきます。そのまま水を与え続けると球根から、また新しい葉が出てきて、引き続き育てることができますが、夏の蒸し暑さには弱く、病気が入りやすいので、水やりを中止します。水をやらなくなったことで球根は休眠状態に入ります。

9月になり、少し涼しくなった頃に球根を掘り上げ、根を半分位切り取り、新しい鉢に新しい用土で、球根の上部を半分くらい出して植えてやります。その後は、いままで通りの育てかたをして下さい。1週間に1回くらい液肥を与えて育てると、やがてつばみができて花が咲いてくれます。ただ花の咲く時期が多少遅れて翌年になるでしょう。



表1 花だんの配色効果一覧

色	白	黄	オレンジ	赤	ピンク	ブルー
	一二年草花	一二年草花	一二年草花	一二年草花	一二年草花	一二年草花
春花だんの色彩による区別	パンジー キンギョソウ デージー マーガレット フロックス スイートピー カスミソウ	キンレンカ パンジー キンギョソウ	キンセンカ キンシンカ	ポピー キンギョソウ ストック デージー ダイアンサス フロックス	ダイアンサス プリムラ キンギョソウ ストック スイートピー	シネリリア ラークスパー パンジー ロベリア
	宿根草花	宿根草花	宿根草花	宿根草花	宿根草花	宿根草花
夏・秋花だんの色彩による区別	スイセン スノーフレーク ヒヤシンス チューリップ クロッカス	クロッカス スイセン アイリス ラナンキュラス チューリップ ユリ	チューリップ ラナンキュラス	アネモネ チューリップ ラナンキュラス	ヒヤシンス チューリップ	ヒヤシンス クロッカス アイリス ムスカリ
	球根草花	球根草花	球根草花	球根草花	球根草花	球根草花
色	白	黄	オレンジ	赤	ピンク	ブルー
	一二年草花	一二年草花	一二年草花	一二年草花	一二年草花	一二年草花
夏・秋花だんの色彩による区別	アスター ペチュニア バーベナ ジニア フロックス	マリーゴールド ナスタチューム ヒマワリ ジニア	コスモス マリーゴールド ナスタチューム ジニア	ケイトウ コスモス ペチュニア フロックス サルビア バーベナ ジニア	アスター ジニア インパチエンス ラークスパー ペチュニア バーベナ	アゲラタム ペチュニア バーベナ
	宿根草花	宿根草花	宿根草花	宿根草花	宿根草花	宿根草花
夏・秋花だんの色彩による区別	キク ゼラニウム フロックス ジャスターデージー	キク	キク	カーネーション キク ゼラニウム フロックス	キク インパチエンス ゼラニウム フロックス	カンパニュラ
	球根草花	球根草花	球根草花	球根草花	球根草花	球根草花
夏・秋花だんの色彩による区別	アガパンサス ダリア ユリ グラジオラス	カンナ ダリア ユリ	ユリ ダリア	カンナ ダリア グラジオラス ペゴニア	アマリリス カンナ ダリア ユリ グラジオラス	アガパンサス シラー
	球根草花	球根草花	球根草花	球根草花	球根草花	球根草花

表2 暖色・寒色の関係

暖色	赤・橙・黄
寒色	紫・青・緑
三原色	赤・黄・青
補色	赤と青緑・緑黄と青紫・紫青と黄橙・橙など

表3 花だんむき秋まき一年草(低性)(毛せん、リボン花だんにむく)

花名	開花期	花 色	草 丈	備 考
アリッサム	4～6月	白、桃	10～15cm	防寒を要する
セキチク	4～7	白、桃、赤	10～30	三寸セキチク、五寸セキチク
ハナビシソウ	4～5	白、黄、赤、橙	20～50	直まき
バーベナ	4～9	赤、桃、紫、白	10～20	宿根草となる
パンジー	3～6	白黄、ビロード、朱、紫	10～15	春花だんの代表
デージー	4～5	白、桃、赤	10～15	春花だんの代表
フロックス	5～6	白、桃、赤、サーモン ピンク	20～50	パンジーの後植えによい
ロベリア	5～6	白、青、淡桃	15～25	防寒を要する
ワスレナグサ	5～6	空	10～20	パンジー、デージーの後植えによい

表4 花だんむき秋まき一年草(高性)

花名	開花期	花 色	草 丈	備 考
カスミソウ	4～6	白	40～50	
キンセンカ	3～5	黄、橙	30～40	群植
キンギョソウ	5～6	赤、桃、白、黄、ピンク	15～25	矮性種、毛せん、寄せ植え花だん
ケシ	5～6	白、桃、黄	60～70	境栽花だん
スイートピー	5～7	白、藤、青	ツル性	垣根、アーチづくり
ゼニアオイ	5～6	淡紫紅、濃紫紅	60～90	背景植え
タチアオイ	6～8	白、黄、朱紅、黒紅	100～300	背景植え
ナデシコ	5～6	赤、桃、白	20～30	群植
ハルシャギク	7～10	ビロードの蛇の目	80～100	群植
フウリンソウ	5～6	白、桃、紫	60～100	群植
ヤグルマソウ	3～6	白、桃、青	40～100	境栽、寄せ植え花だん
ラックスパー	5	桃、紫	80～100	
ルピナス	4～6	白、黄、紫	70～80	境栽、寄せ植え花だん

宿根草、球根類は主として境栽、寄せ植え花だんに利用されます

表5 花だんむき春まき一年草(低性)(毛せん、リボン花だんにむく)

花名	開花期	花 色	草 丈	備 考
アゲラタム	6～10月	白、紫、桃	15～60cm	ミゼットブルー、ブルーミルク
アリッサム	9～10	白、桃	10～15	春まきは夏を冷しく育苗すれば秋花だんに使える
インパチエンス	6～10	赤、桃、白	10～15	日陰地、樹木下によい
カイザイク	6～9	赤、桃	10～20	矮性種
ケイトウ	7～9	赤、黄、桃	10～20	ドワーフ・クリスタータ、ファイアーフ ェザー
サルビア	7～11	赤	20～40	セントジョンズ・ファイヤー
ナスタールチューム	6～10	白、黄、橙、朱	20～40	チェリースカーレットのような葉よりも花 がつきでるもの
バーベナ	5～9	紺赤、白、桃、紫	10～20	種をまけば宿根草となる
ハクニチソウ	7～10	赤、桃、黄、白	10～20	ツンベリナ、バトンジニア、サンビタリア、 メキシカーナ
フレンチ・マリーゴールド	6～11	黄、オレンジ、濃黄	20～25	ナギット種、プチ種、キュービッド種
ペゴニア・センパフ ローレンス	4～10	赤、白、桃	10～20	春まきは秋花だんに使える
マツバボタン	8～9	白、桃、赤、濃桃	10～15	縁とりに適する

表6 花だんむき春まき一年草(高性)

花 名	開花期	花 色	草 丈	備 考
アサガオ	7～9月	赤、桃、白、紫、青	ツル性	棚づくり、ベランダ、アーチ、バーゴラにからませる
オシロイバナ	7～10	黄、白、赤	50～60cm	
キンケイギク	7～9	黄	60～70	群植
キンセンカ	5～7	黄、橙	30～40	寄せ植え、境栽花だん
ケイトウ	6～9	赤、黄	30～60	背景植え、境栽花だん
コスモス	6～11	白、桃、黄	70～150	
サルビア	6～10	白、赤、紫	30～50	寄せ植え、境栽花だん
センニチコウ	8～9	白、赤、桃	50～70	夏花だん
テンニンギク	8～10	黄、橙、赤	50～60	境栽、寄せ植え花だん
ニチニチソウ	7～8	白、桃	40～50	夏花だん
ハボタン	12～1	白、赤	20～50	冬花だん
ハゲイトウ	7～10	赤、黄	50～150	背景植え
ヒマワリ	8～9	黄	150～200	
ヒャクニチソウ	6～10	白、黄、赤、朱	40～80	背景植え
ベチュニア	5～9	白、桃、赤、紫、サーモンピンク	50～70	フラワーポット植えによい
ハウセンカ	7～9	白、桃、赤	50～70	縁とり
マリーゴールド	6～10	黄、橙	30～70	境栽、寄せ植え花だん
ムギワラギク	8～9	黄、赤	70～80	
コリウス	6～10	赤、黄、橙	20～50	模様花だん
ルコウソウ	7～9	赤	ツル性	棚づくり、垣根づくり

Q&A

花づくりこんなときどうする？

Q 夕方や夜に咲く花には、どのようなものがありますか？

A オシロイバナ、ヨルガオ(ユウガオ)、オオマツヨイグサなどがよく知られています。また、香りがすばらしい種類には、ジンジャ、チューベローズ、ヒメノカリスがあります。サボテンのなかまの月下美人は純白大輪の花が咲きますが、夜7～8時に開き、3時間くらいでしぼんでしまいます。

そのほか、クレオメ、ツキミソウなども夜に咲きます。

Q 人工材料を用いず、自然の花で水中花がつくれますか？

A 水を入れたコップを利用すればできます。

コップに一杯水を入れ、カーネーションやアスパラガスの一枝を逆さにさし入れ、コップにピッタリとくつつく皿などでふたをして、両手で持って逆さにひっくり返せばよいのです。コップの水に閉じ込めた花や枝は、夏でも数日は生き生きとして氷柱のように見えます。

図1 花だんの縁どりのいろいろ

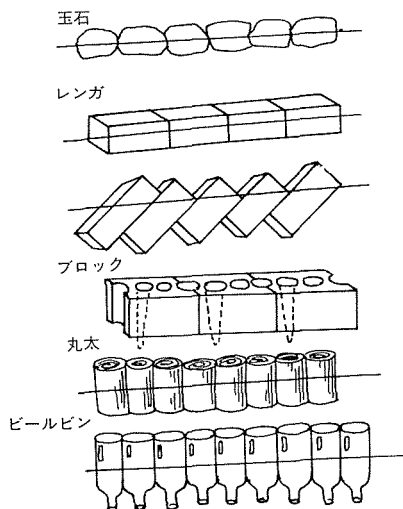


図2 マリーゴールドの摘芯

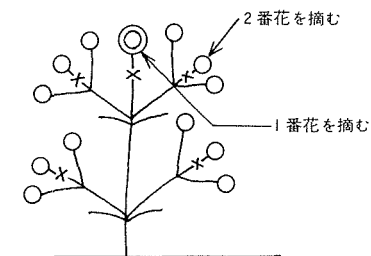


表7 定植間隔表(球根類)

定植間隔	草花名
5 ～ 15cm	オキザリス、ムスカリ、クロッカス、グラジオラス
10 ～ 20cm	ラナンキュラス、スイセン、シラー
15 ～ 20cm	グラジオラス、モントブレチア、ユリ、リアトリス、チューリップ、ヒアシンス、アネモネ
20 ～ 30cm	アマリリス、アイリス、ミニ・ダリア、カラジウム、カラー
30 ～ 80cm	ダリア、カンナ

表 8 定植間隔表(1、2年草)

定 植 間 隔	草 花 名	m ² あたり株数
15 ～ 20cm	パンジー、デージー、ワスレナグサ	44 ～ 45株
20	アゲラタム、アフリカホウセンカ、キンレンカ、コリウス、セキチク、スターチス、センニチコウ、トレニア、ペゴニア＝センパ、フロックス、ホウセンカ、ペチュニア、マツバボタン	25
25	アスター、キンギョソウ、サルビア、ジニア、ナデシコ、マリーゴールド(フレンチ系)、ヤグルマソウ	16
30	アサガオ、キンセンカ、ケイトウ、ハゲイトウ、マリーゴールド(アフリカン系)	11
40 ～ 50	ゴテチア、オシロイバナ、コスモス、ヒマワリ、クレオメ	6 ～ 4

表 9 花壇所要株数早見表(方形植え)

面積 間隔	15×15cm	20×20cm	25×25cm	30×30cm	40×40cm	50×50cm
40m ²	1,940株	1,100株	710株	490株	270株	180株
60	2,900	1,650	1,060	730	400	270
80	3,880	2,200	1,410	970	530	360
100	4,840	2,750	1,760	1,210	660	440
120	5,810	3,300	2,120	1,460	800	530
140	6,780	3,850	2,470	1,700	930	620
160	7,750	4,400	2,820	1,940	1,070	710

注 1) 実際の植込み株数より10%程度の余裕がみてある。

2) 端数は100m²の植込み数を按分して加えればよい。

＊誕 生 花

誕生花を知っていますか。
誕生花で素敵な贈り物を!!

生まれ月	花 の 名	生まれ月	花 の 名
1 月	ス イ セ ン	7 月	ダ リ ア
2 月	スイートピー	8 月	ヒ マ ワ リ
3 月	ス ミ レ	9 月	ナ デ シ コ
4 月	チューリップ	10月	コ ス モ ス
5 月	ス ズ ラ ン	11月	キ ク
6 月	バ ラ	12月	カ ト レ ア

2. 道路を彩る花づくり

歩行者や車の運転者、同乗者に、心をなごませる道路の草花は、すばらしい植物からの贈り物です。花を愛する心は、人間の自然への憧れの発露です。歩行者も運転者も、道路の草花を愛し、いたずらしないような心掛けが大切です。道路の花壇作りには、次のような点に留意しましょう。

- ◇ 交通安全について先づ留意します。特に草丈の高いものは交差点近くでは、運転者の視野をさえぎり、交通事故を誘発します。
- ◇ 道路は公共施設なので、草花の管理については、担当者を明確にします。
- ◇ 草花の種類を決める際、地域の道路にふさわしい特色のあるものを選びます。
- ◇ 草花の種類と花色は、あまり複雑にしないで、シンプルな構成にするのが望ましい。
- ◇ 花の種類によっては夜間、街路灯の照明で開花に変調を来すものがあるので、事前に調査が必要です。

1. 農道花壇づくりのポイント

- (1) 日あたり、通風の良い場所が多いので、好光性の草花を植えます。
- (2) 路肩に雑草が多いので、その防除について植付前に十分な処理をします。
- (3) 農作物の生育や、農作業について障害にならないようにします。
- (4) 路肩が傾斜しているため土が流亡しやすいので、傾斜部にイネ科牧草(ウイーピングラブリグラス、ケンタッキーブルーグラス等)を植えつけたり、ブロックを用いたりして土止め対策を行います。
- (5) 土質を良くするため、きゅう肥、稲わら堆肥、雑草を刈り集めた堆肥等を毎年十分に施します。
- (6) 農道花壇に適する草花として、雑草に負けない生育の旺盛なもの、また宿根性のものなどがよく、次のような例が考えられます。

カンナ、アメリカフヨウ、アフリカンマリーゴールド、サルビア、コスモス、シャスターデージー、ギボウシ、アスチルベ、ニチニチソウ、その他。

2. 街路花壇づくりのポイント

- (1) コンクリート、れんが、ブロック等により縁どりをした整った花壇やプランター花壇が多い。縁どりをした花壇では底面の排水が十分できることが必要で、もし底面がコンクリート面になっておれば、必ず排水孔を側面に設けます。
- (2) アーケードがある花壇では、日あたりが少なく、日陰にむく草花を用います。(インパチエンス等)
- (3) 市街地の街灯の光が強いところでは、サルビアが開花不良となるように、種

類によって開花異常となるものがあるので注意が必要です。

- (4) 未熟な有機質肥料は、はえが発生したり、悪臭がでるので施用しません。
- (5) 用土は排水性について特に気をつけ、田土、赤玉土をベースに、鹿沼土、腐葉土、ピートモス、バーミキュライト等から数種類選んで用います。
- (6) 街路花壇に適する草花としては、草丈が中位から低いもの、花数が多いもの開花期間の長いものを用います。

ベゴニア・センパフローレンス、サルビア、フレンチマリーゴールド、ペチュニア、アゲラタム、パンジー、テージー、ハボタン、その他。

3. 一般道路花壇づくりのポイント

- (1) 幅員の狭い道路から幅員が数十メートルに及ぶなど、さまざまな道路があります。また、歩道が分離されて花壇が縁どりされている道路、路肩を花壇として利用する道路等があります。
- (2) 自動車の利用が多い道路は花壇の幅は広く、長さはできるだけ長いことが運転者や同乗者の目を楽しませます。この際、草花の種類は一種、花色も一色とすれば、印象が鮮明となります。草丈は中・低のものを選びます。
- (3) 管理のうちで特に気をつけたいのはかん水です。晴天が続いた時は担当者は朝か夕方十分かん水を行う必要があります。
- (4) 雑草は、草花の植えつけ前に宿根性のスギナ、ヨモギ、メヒシバ等を根こそぎぬき捨てます。草花の生育中は、雑草が繁茂すればぬきとります。
- (5) 肥料は、やせた土が多いので基肥を十分に施し、草花の生育中は月に1回をめぐりにIB 化成肥料等を追肥します。
- (6) 一般道路花壇に適する草花

カンナ、マリーゴールド、サルビア、セキチク、コスモス、キバナコスモス、その他(注：カンナ、コスモス等は交通の妨げにならない場所を選ぶ)。

3. プランターで楽しむ草花

1. プランター利用の特徴

- (1) 移動可能のため、いろんな場所で草花を楽しめます。
ベランダ、室内、玄関、屋上、通路、道路、広場、公園等
- (2) 季節によって、日あたり、通風が加減でき、草花の生育を良くします。盛夏の直射日光を嫌うものは半日陰、室内に入れる等。
壁面を利用して吊り下げることにより、立体的な構成ができます。
- (3) 庭土のない場所でも草花を楽しむことができます。

2. プランターの種類

- (1) 木製
木製は材質に吸水保水性があり草花の生育が良く、おちついた感じを与えます。数年間で腐朽する欠点がありますので長持ちさせるため表裏を焼きあるいは塗装します。
- (2) 樹脂製
軽量で持ち運びが便利、衝撃や寒さに強く、使用年数も長く使えます。また簡単に汚れを落とすことができます。
- (3) コンクリート製
頑丈で、耐久性に富んでいますが重くて移動が困難です。
- (4) その他
手製でトロ箱、リング箱、木樽、古タイヤ等を改良して作ります。

3. プランターの形

長方形のものが多く、正方形、円形、三角形など種々あります。

4. プランターの用土

基本的には大きな鉢栽培といえましょうか。用土は通気性、保水性や排水性に富む用土作りを心掛けます。基本となる畑土や田土(乾燥して砕土したもの)または赤玉土に腐葉土、バーミキュライト、パーライト、ピートモス、バーク堆肥等から1～3種選んで、混ぜ合せ、草花の種類にあった配合土を作ります。手軽にすませる場合は園芸店でプランター用土として市販しているものを求めます。

用土配合割合は表1を参照して下さい。

5. プランターの容量

鉢物に比べて、多量の用土が必要になります。正方形や長方形のものは幅、高さ、奥行きを掛け合わせて、容量を計算します。なお、バケツ1杯分は約10ℓとして目安をたてて下さい。

6. プランターに適する草花

小型中型のプランターには草丈のあまり高くないもの、大型のプランターには草丈の高いものを選びます。開花期間の長いこと、栽培の容易なことも条件です。主な種類をあげると下記ようになります。

(1) 1年草

ペゴニア・センパフローレンス、サルビア、ペチュニア、アゲラタム、パンジー、デージー、コリウス、ハボタン、インパチェンス

(2) 宿根草

ゼラニウム、セキチク、ギボウシ、ポットマム、わい性カーネーション

(3) 球根

ダリア、チューリップ、クロッカス、アネモネ、カンナ

(4) 観葉植物

しだ類、アスパラガス、オリヅルラン、スパシフィラム、ゼブリナ、ペペロミア

7. プランターの肥料

栽培が長期間にわたるので、後半肥料不足になりがちです。施肥量の3/2くらいを基肥とし、多少高価でも持続性の高い緩効性の肥料を用います。表2を参照して下さい。これらの肥料は約1年間くらい効果があります。

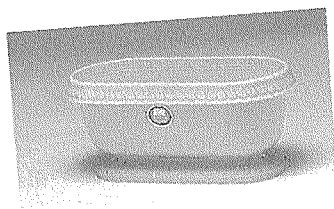
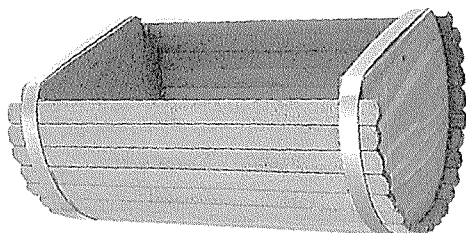
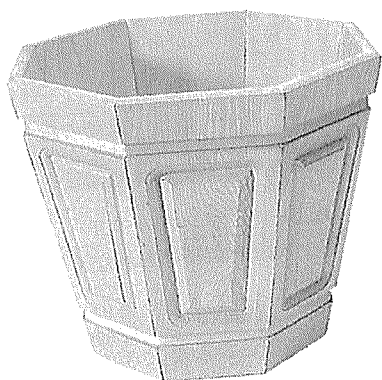
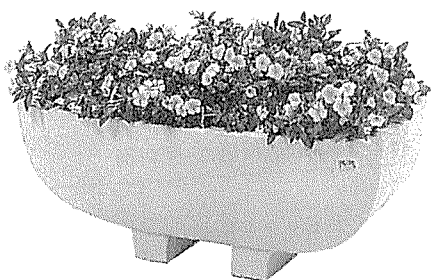
追肥は4月～10月にN、P、Kの3要素を含んだ液体肥料または粒状化成肥料を月1回をめどに施します。液肥としてハイポネックス液肥、住友液肥1号、2号等があり化成肥料にはIB化成等があります。

8. 植えつけ上の注意

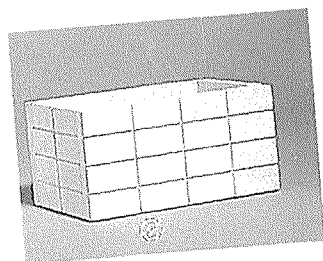
- (1) プランターの排水孔をたしかめる。栓のしてあるものは必ず栓を抜く。排水孔をあけるものは必ず孔をあける。
- (2) プランターの底にゴロ土(発泡スチロール片でも良い)を入れる。
- (3) 配合土をゴロ土の上に敷く。配合土に消石灰を少量まぜると良い。
- (4) 肥料を施し、また配合土を入れる。土の量はウオタースペースをあける程度まで入れる。
- (5) 植えつけ後底から水が流れるほど十分かん水する。

9. かん水

鉢物ほど乾燥しないが、用土が乾いたら十分かん水します。盛夏の朝、夕は2回必要になります。



17



18

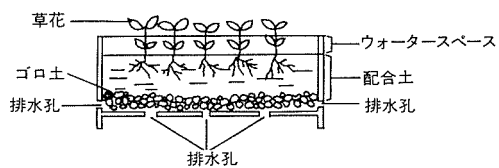
表1. プランター用土の配合例

	基本となる用土	補 助 用 土	肥 料
例 1	畑土、水田土 4～5	腐葉土 3～4 パーミキュライト 2	基肥
例 2	赤玉土 5	ピートモス 3 鹿沼土 2	基肥
例 3	山土 5	パーミキュライト 3 パーライト 2	基肥

表2 緩効性(持続性)肥料例

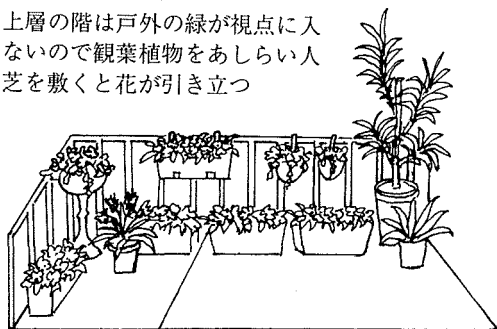
品 名	説 明
ハイボネックス微粉	花・葉の色を鮮やかにする水溶性肥料カーネーション・洋蘭・一般鉢物栽培の追肥に最適で、花の発色がよくなり、茎葉が丈夫になるバランスのとれた肥料。 (成分) N-6.5、P-6、K-19。
マグアンプK 大粒・中粒	少しずつ溶けて一年以上も効きつづける。長期持続肥料として各種園芸植物、鉢物の元肥に理想的な肥料。植物が必要とする時に溶けますので、肥料不足、肥やけ、植いたみの心配がありません。大粒と中粒があり、大粒は生育1年以上用(庭木、果樹、観葉植物)中粒は生育1年以下用(草花、球根、カーネーションなど)。
プロミック錠剤中粒	目で確認できる鉢植え用の肥料 速効・緩効・遅効の総合効果をもつ長期持続性の高圧錠剤肥料です。効果が3カ月持続し、カスが残りませんのでなくなれば補充します。 (成分) N-12、P-12、苦土-1、K-12、マンガン-0.1
プロミック [®] 小粒	プロミック小粒は育苗に必要な成分を植物に無理なく供給するよう計算されております。 成分は従来のプロミックと同成分に新しくホウ素(0.05)を加えております。 また、既存のプロミック錠剤の約半分(0.8g)のサイズとし、育苗用に最適な大きさとしております。 プロミック小粒は速効性と緩効性を兼ね備えており、灌水される水の量と土壌のバクテリアの働きにより、確実に吸収されながら効果を持続し、健康で均一な苗を作り上げます。
プロミックS	抜群の追肥効果、持続性も高い有機ブレンド肥料、高品質生産の新しい肥料で、連作に効果があります。肥料代の生産経費に占める割合はわずかですが、肥料の選択・施肥方法の誤りは生産収益に大きな変化をもたらします。プロミックSは置肥用として合理的な成分内容と立枯れ病の予防効果もあわせもった、高品質生産時代に必要とされている肥料です。 (成分) N-8、P-3、K-10。
ハイコントロール 70 日100日180日360日 タイプとも	使い易いコーティング肥料。 緩効性のコーティング肥料で、硝酸系肥料を特殊製法により樹脂で被覆。80%の窒素が溶出するのに、約70日かかる70日タイプ、約100日かかる100日タイプ、約180日かかる180日タイプの3タイプがあり、作物の種類、栽培型を考慮して最適タイプを選定して下さい。カリも溶出速度はほぼ窒素と同じです。また、土地を傷める硫酸根や塩素は含まず、生理的に中性です。 (成分) N-16、O-3、K-10

図1 プランターでの植えつけ

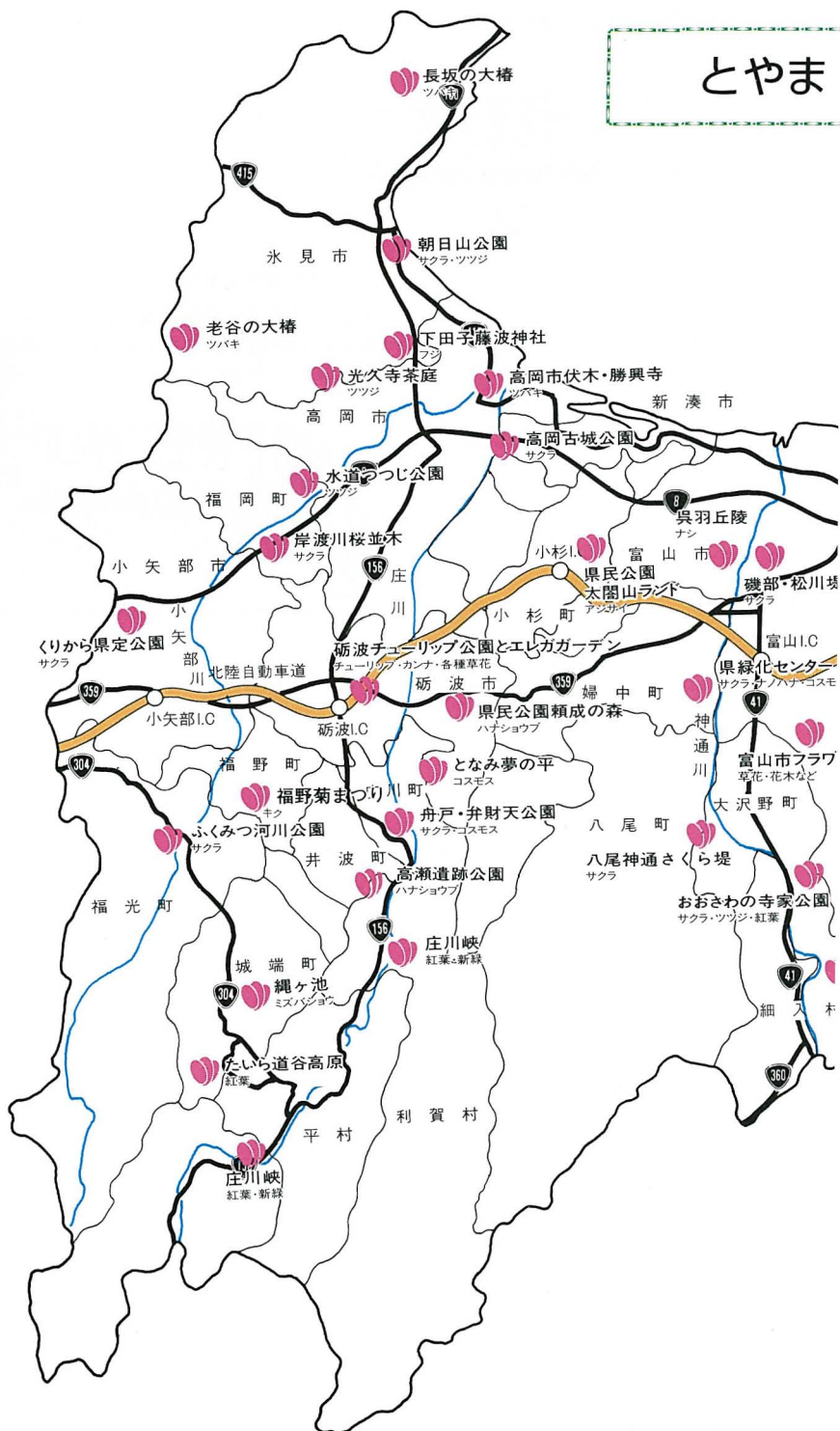


ベランダの飾り方

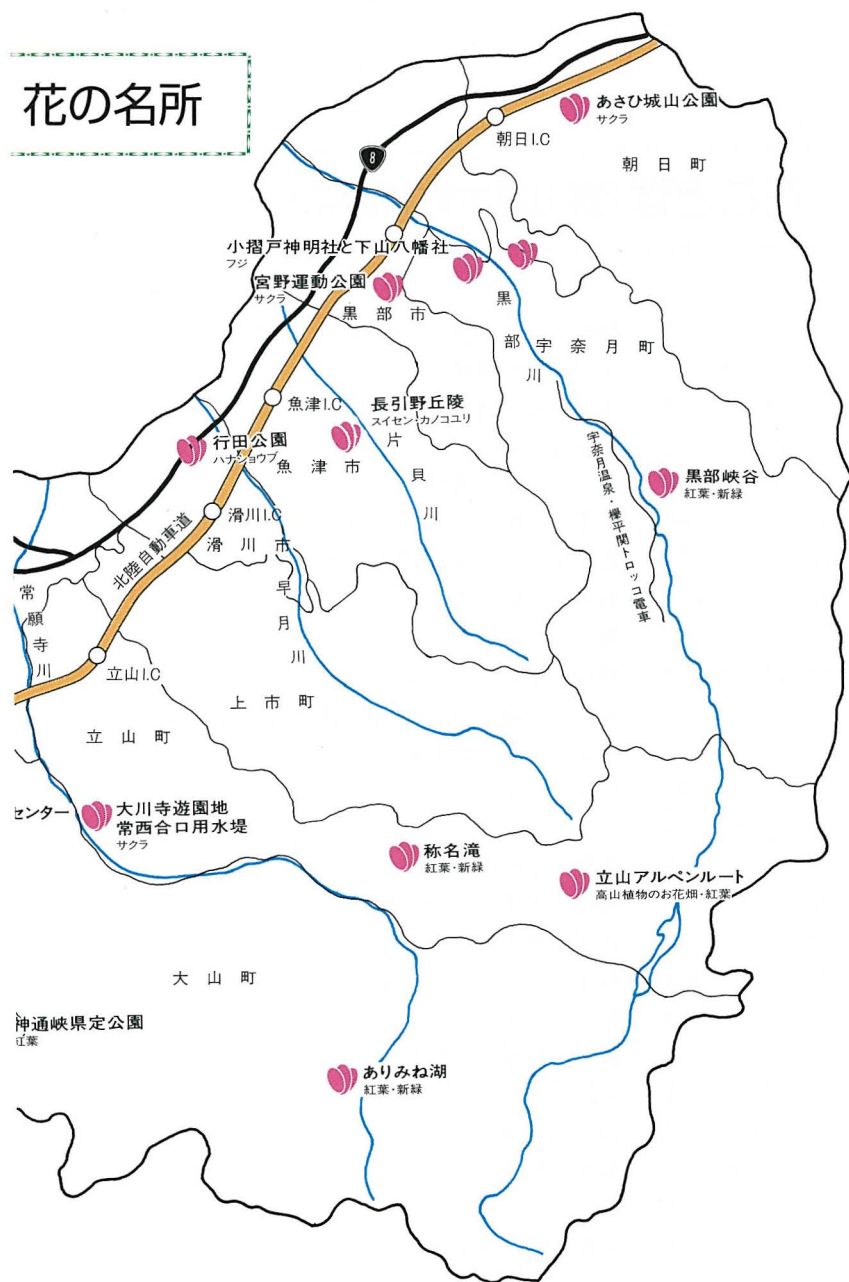
上層の階は戸外の緑が視点に入らないので観葉植物をあしらいい人工芝を敷くと花が引き立つ



とやま



花の名所



花ことば(富山県市町村の花)

- | | | |
|-------|---------|--------------------------------------|
| ●富山市 | アザミ | 触れないで・独立・厳格 |
| ●高岡市 | アジサイ | 辛抱づよい愛情 |
| ●新湊市 | ケイトウ | おしゃれ・情愛 |
| ●魚津市 | カノコユリ | 東洋の幻想 |
| ●氷見市 | ユリ | 孝心・純潔・高貴 |
| ●滑川市 | キク(黄) | 長寿と幸福 |
| ●黒部市 | ユリ(白) | 純潔・飾らぬ美・荘厳 |
| ●砺波市 | チューリップ | 博愛・思いやり |
| ●小矢部市 | シヨウブ | 優しい心 |
| ●大沢野町 | サルビア | 燃ゆる想い、すべてよし |
| ●上市町 | リンドウ | 正義・的確・「私はあなたが悲しんでいるとき、
あなたを最も愛する」 |
| ●立山町 | キク(赤) | 私は愛する |
| ●宇奈月町 | イワウチワ | |
| ●入善町 | チューリップ | 博愛・思いやり |
| ●細入村 | キク(白) | 真実・誠実・貞操・高貴 |
| ●小杉町 | キク | 真実・誠実・貞操・高貴 |
| ●大門町 | カワラナデシコ | 貞節 |
| ●城端町 | ミズバショウ | 変わらぬ美しさ |
| ●利賀村 | ササユリ | 清純・無垢の美しさ |
| ●庄川町 | ヤマブキ | 気品 |
| ●井波町 | ユキワリソウ | 自信・信頼 |
| ●井口村 | フクジュソウ | 幸福を招く |
| ●福野町 | キク | 愛・真実 |
| ●福岡町 | カンナ | 情熱・堅実な生き方 |

●編集委員の方々

金 岡 トモコ	富山女子短期大学助教授
國 重 正 昭	富山県農業技術センター所長
笹 倉 慶 造	造園家
椎 名 泰 治	富山県農林管理課長
富 田 利 次	富山県農産園芸課長
西 井 謙 治	砺波市文化振興会参事
横 江 敏 郎	(財)花と緑の銀行専務理事

●執筆していただいたの方々

石 崎 力	有磯高等学校
岡 田 巖	小杉農業改良善及所
金 森 松 夫	富山県花総合センター
塩 谷 佳 和	富山県花総合センター
竹 田 誠	中央農業高等学校
高 野 喜八郎	富山県花総合センター
中 西 滋 春	有磯高等学校
西 井 謙 治	砺波市文化振興会
西 尾 正	富山県花総合センター

五十音順 敬称略

●参 考 文 献

書 名	著 者	発 行 所
園芸大百科事典		講談社
家庭の園芸	浅井 英 一	小学館
草花園芸	柳 宗 民	樹石社
日本の花	小 原 豊 雲	主婦の友社
花ことばファンタジー	中 村 俊 子	保育社
テラリウム室内園芸		学習研究社
四季花ごよみ		講談社
草花園芸 350 種		文研出版
草花園芸		家の光協会
室内園芸		学習研究社
趣味の家庭園芸		山と溪谷社

●写真を提供していただいた方々

高 野 喜八郎

竹 田 誠

中 西 滋 春

幡 谷 広 司

稲 盛 寛

富山県農業技術センター

富山県花卉球根農業協同組合

大浦カメラ店

索引

アゲラタム	15	クロッカス	78
アサガオ	24	グロキシニア	109
アザレア	122	グロリオサ	67
アスター	31	ケイトウ	25
アスチルベ	50	コキア	28
アネモネ	80	コスモス	32
アメリカフヨウ	49	コリウス	22
アリウム	71	コルチカム	70
アルソピア・ディアンティフローラ	133	サギソウ	89
イカリソウ	93	サクラソウ	95
インパチェンス	19	サラシナショウマ	91
ウラシマソウ	84	サルビア	18
エビネ	82	サンタンカ	123
オミナエシ	90	シクラメン	108
カスミソウ	13	シネリリア	118
カトレア	104	シバザクラ	47
カライトソウ	88	シャクヤク	43
カランコエ	107	シャコバサボテン	112
カンナ	66	シャスターデージー	45
ガーベラ	120	シュウメイギク	55
キキョウ	51	宿根アスター	60
キク	42	宿根カスミソウ	41
球根アイリス	79	シラー	72
キンセンカ	36	シライトソウ	87
キンレンカ	16	シラン	52
ギボウシ	59	シンビジウム	103
クジャクサボテン	115	ジギタリス	33
クレマチス	48	ジャーマンアイリス	53

スイセン	77	ヒトリシズカ	81
スイレン	136	ヒマワリ	26
スズラン	46	ヒメシャガ	85
スパシフィルム	131	ヒャクニチソウ	27
スミレ	96	フウリンソウ	34
セントポーリア	113	フクジュソウ	94
ゼラニューム	114	フトイ	139
タチアオイ	35	ブーゲンビレア	126
タヌキモ	138	プリムラポリアンサ	117
ダイモンジソウ	92	ヘーベ	132
ダリア	68	ベゴニア・センパフローレンス	23
チゴユリ	83	ペチュニア	17
チューリップ	73	ホトトギス	57
ツワブキ	54	ポインセチア	111
デージー	11	マツバボタン	20
デンドロビウム	105	マリーゴールド	14
ナデシコ	56	ミズバショウ	135
ニチニチソウ	29	ミヤコワスレ	44
ノボタン	110	ミヤマオダマキ	86
ハイドランジア	121	ムギワラギク	21
ハイビスカス	124	ムスカリ	75
ハゲイトウ	30	ヤグルマソウ	12
ハス	137	ユリ	76
ハナショウブ	58	リーガースベゴニア	119
ハボタン	9	リコリス	69
パフィオペディルム	106	レウイシア	134
パンジー	10	ロードヒポキシス	116
ヒアシンス	74		

あ と が き

花づくりを楽しむ方々が気軽に読める本、地域で花づくりに取り組んでいただいている皆さんのお役に立てる手引書、そのような本があればいい、そういう思いで発刊にむけてスタートしましたが、一冊の本をつくりあげることのむずかしさは、予想以上のものでした。

内容もあり、楽しく気軽に読めるものをと、多くの方々からいろいろ御希望をいただきました。これに応えるため、編集委員や執筆者の皆さんの御指導と御協力をいただき、いきつもどりつをくり返しながらようやく発刊にこぎつけることができました。

この一冊が、花を楽しみ、愛する皆さんの愛読書として親しまれ、花づくりに少しでも役立つことを願っております。

末尾になりましたが、編集委員、執筆者の皆さんをはじめ、出版に際し御協力をいただいた方々に心からお礼を申し上げます。

とやま花づくり

定価1,200円

第 一 刷	平成 2 年 3 月 30 日
第 二 刷	平成 2 年 7 月 31 日
発 行	財団 花と緑の銀行 法人 富山県婦負郡婦中町上轡田42 電 話 (0764) 66-2425
印 刷	株式会社チューエツ 富山市上赤江町 2 丁目 8-6 電 話 (0764) 32-4171
